

2016年度パツヘI-A-1 1-A-2 研究報告書 目次

パツヘI-A-1

	氏名	ページ
1	宮沢 千尋	1
2	中島 明	3

パツヘI-A-2

	氏名	ページ
1	金 承哲	5
2	佐藤 啓介	7
3	青柳 宏	9
4	奥田 太郎	11
5	藏本 龍介	13
6	後藤 明	15
7	斎藤 衛	17
8	鈴木 貴之	19
9	藤川 美代子	21
10	吉田 竹也	23
11	渡部 森哉	25
12	加藤 隆雄	27
13	平川 武仁	29
14	鎌田 修	31
15	森田 貴之	33
16	Anthony Gripps	35
17	大澤 広晃	37
18	神崎 宣次	39
19	芝垣 亮介	41
20	鈴木 達也	43
21	村杉 恵子	45
22	山岸 敬和	47
23	泉水 浩隆	49
24	小林 純子	51
25	中村 督	53
26	真野 倫平	55
27	茂木 良治	57
28	太田 達也	59
29	松戸 庸子	61
30	森山 幹弘	63
31	籠橋 一輝	65
32	蔡 大鵬	67
33	宮崎 浩伸	69
34	赤壁 弘康	71
35	上野 正樹	73
36	川北 眞紀子	75
37	澤井 実	77
38	中島 裕喜	79
39	松井 宗也	81
40	安田 忍	83

	氏名	ページ
41	竹澤 直哉	85
42	池田 亮一	87
43	窪田 祐一	89
44	青木 清	91
45	岡田 悦典	93
46	小原 将照	95
47	田中 実	97
48	都筑 満雄	99
49	洞澤 秀雄	101
50	榊原 秀訓	103
51	丸山 雅夫	105
52	David Potter	107
53	浅香 幸枝	109
54	石川 良文	111
55	梁 暁虹	113
56	松戸 武彦	115
57	水落 正明	117
58	三輪 まどか	119
59	森山 花鈴	121
60	山田 哲也	123
61	Reginald Alva	125
62	佐々木 美裕	127
63	白石 高章	129
64	杉原 桂太	131
65	栞原 寛明	133
66	沢田 篤史	135
67	張 漢明	137
68	野呂 昌満	139
69	蜂巢 吉成	141
70	横森 励士	143
71	横山 哲郎	145
72	大石 泰章	147
73	奥村 康行	149
74	坂本 登	151
75	高見 勲	153
76	藤井 勝之	155
77	浅野 享三	157
78	五島 敦子	159
79	森泉 哲	161

2016年度
パッへ研究奨励金 I-A-1 (特定研究助成・特別)研究成果報告書

2017年 4 月 4 日

氏 名	宮沢千尋	所 属	人文学部人類文化学科
研 究 課 題	朝鮮との比較の視点から見たベトナム女性の伝統的財産権と祖先祭祀上の地位		
研 究 の 種 類	(個人)		グループ
共 同 研 究 者	なし		
<p>研究実績の概要</p> <p>2016年8月7日から9月2日までベトナムに渡航しました。ハノイ市ではドンガック村、漢文チュノム研究院、ハノイ国家大学発展研究院で調査をおこないました。インタビュー調査、族譜・遺産相続文書・財産分割文書の収集をおこないました。文献資料が膨大にあるということがわかりました。地域比較のために、フエ市、ホイアン市において、族の祠堂などで女性の財産権に関して聞き取りをおこないました。</p> <p>2016年12月25日から1月4日までハノイで調査をおこないました。漢文チュノム研究院、ハノイ国家大学発展研究院にある文献資料の収集を継続する一方で、漢文チュノム院とフランス極東学院が共同で出版した碑文の拓本集(22巻)を購入し、あわせて関連文献の収集をおこないました。</p> <p>2017年3月12日から18日まで三度目のハノイ調査をおこないました。漢文チュノム研究院、ハノイ国家大学発展研究院にある文献資料の収集を継続する一方で、ハノイ市郊外のドゥオンラム村(伝統文化の観光村)を訪問し、族の祠堂や観光用に公開されている伝統家屋で祖先祭祀について聞き取りをおこないました。祠堂や族譜がよく保存されている村なので今後も継続して調査したいと思います。</p> <p>朝鮮関係については、予定していた王朝時代の族譜、日記などがいずれも品切れで購入することができませんでしたが、欧米の研究者による先行研究や、遺産相続文書などが収録された資料集を購入することができました。</p> <p>刊行された成果としては、南山アーカイブズの依頼で執筆した下記のもの1点のみでした。前近代のベトナム女性研究には、宮沢がおこなっているような女性の財産権と祖先祭祀上の役割に加えて、寺社への寄進行為に見る女性のエージェンシーに関する研究があること、さらにそれを可能にした史料の状況について論じ、婚出した女子を含む輪番制の祖先祭祀や、母方の祖先に対するいわゆる外族祭祀が朝鮮と類似していることを再確認いたしました。</p> <p>今後も収集・購入した資料の分析に努める一方、外部資金などを導入して研究を継続していこうと思っています。助成をいただきありがとうございます。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016年度南山大学パッへ研究奨励金 I-A-1」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「前近代ベトナム女性の財産権に関する研究動向と展望—史料の状況に注目して」	書名	
雑誌名	『アルケイア—記録・情報・歴史』	論文名	
巻号	第11号	出版社	
発行年月	2017年3月	出版年月	
ページ	117-138	ページ	
著者名	宮沢千尋	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）

2016年度
 パッへ研究奨励金 I-A-1 (特定研究助成・特別) 研究成果報告書

2017年 4月 3日

氏名	中島 明	所属	理工学部 機械電子制御工学科
研究課題	離散・連続な非ホロミック系の制御による把持物体の広範囲な操り運動計画法		
研究の種類	(個人)	グループ	
共同研究者	なし		

研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)

工場などの限定された環境のみならず，日常生活，福祉介護や災害現場へロボットを導入するためには，多様な物体の把持・操りが可能な多指ハンドが必要不可欠である．しかしながら，操り運動においては，把持点の切り替え，指先の転がり・滑り運動の切り替え，把持形態（指先ピッキング・包み込み）の切り替えなど**多くの自由度**があり，望みの物体運動を実現するハンド動作を見つけ出すことは非常に困難である．そこで本研究では，把持点の切り替え，および指先の転がり運動に関して本質的に内在する，**非ホロミック系と呼ばれる数理的かつ力学的な特性を利用して**，所望の把持物体の操り動作を実現する運動計画法の構築を目指した．

指先が物体上を転がる運動は**非ホロミック拘束**と呼ばれる性質を持つ．図1は球が平面を転がる様子を示しており，①から④まで転がりながら方眼紙の直線上を移動すると，球は左に移動し，姿勢(ロゴマーク)が90度左に回転する．その一方で，①，④でロゴが上を向いていることから，**球の接触点は閉軌道を描いており，変化量はゼロである**．これは，転がり運動の2自由度を用いて，球と平面それぞれの接触点2自由度および姿勢1自由度の計5自由度(以下，**接触状態**と呼ぶ)を制御できることを示唆しており，**「入力より多い状態を制御できる」**ことが分かる．すなわち，積極的な利用により**高機能化**が期待できる．

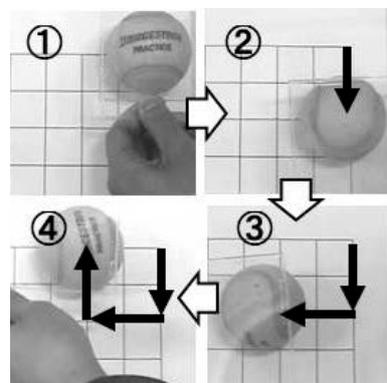


図1: 平面を転がる球の運

この非ホロミック性を利用した物体の操り理論の構築のため，台形状の指先上の閉軌道のパラメータに関する繰り返しの接触座標のレギュレーション手法の拡張を行なった．具体的は，閉軌道を行う際の指の関節の制限や物体上の接触点の制限を考慮する．ここで，接触の幾何学的関係を用いることで，閉軌道パラメータに関する制約条件として定式化を行なった．この制約条件を伴う非線形最適化により閉軌道パラメータを求めることを繰り返すことで，図2のような指機構の制限を満足した上でのレギュレーションを実現した．さらには，前述の接触の幾何学的関係を利用して対象物の目標状態を接触座標に変換することで，望みの操り状態を実現することに成功した．以上の成果を数値シミュレーションにより検証し，実用性を示した．

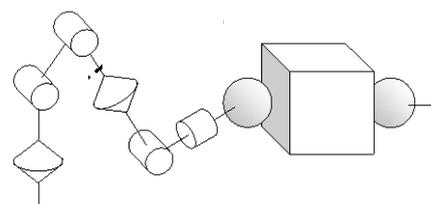


図2: 転がり運動可能な指機構例

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パッセ研究奨励金 I-A-1」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	把持・操り系における転がり運動を用いた運動計画の一手法	書名	
雑誌名	第4回計測自動制御学会制御部門マルチシンポジウム予稿集	論文名	
巻号	CD-ROM	出版社	
発行年月	2017年3月	出版年月	
ページ	1C2-4	ページ	
著者名	中島 明	著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年 月頃予定）	備考	済・未（ 年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 5日

氏名	金 承哲	所属	人文学部
研究課題	「聖なる愚者」についての学際的研究：新しい知のあり方を求めるための基礎研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究は、「聖なる愚者」（以下「聖愚者」）について、その背景となるキリスト教の文脈に留まらないより広い概念として、領域横断的な研究を行うことを目的としている。具体的には、社会的劣位性に関する文学・宗教学・民俗学・文化人類学・図像学的な解明を行うことで、その現代的な配置を明らかにしようとするものである。この研究によって、配分的な公正さに欠けた現代社会における「知」の在り様を考察する新たな視点が提供され、それと同時に、社会的に差別されて少数者となった人びとに対する認識に根本的な反省を促す契機を作ることになるだろう。</p> <p>2016年度には、聖愚者についての同じ方向の研究テーマ（「宗教研究の視座からの社会的排除—聖愚者と崇高なる排泄物のアナロジーについて」）が大幸財団の「平成28年度人文・社会科学系学術研究助成」にも採択され、二つの助成金に支えられながら研究を進めることができた。</p> <p>こうした状況の中で、2016年度はまず日本のカトリック小説家の遠藤周作（1923～1996年）の作品の中で扱われた「聖愚者」および「棄てられた者」についての研究を行った。その理由としては、2016年が「遠藤周作没後20周年・『沈黙』刊行50周年」を迎えた年であり、日本国内では遠藤周作学会を中心とした大規模の研究会やシンポジウムが開催されたし、海外においては、その『沈黙』がアメリカの映画監督のマーティン・スコセッシによって映画化されたことが特記された年でもあったからである。</p> <p>作家として、またキリスト教徒としての遠藤周作は、棄てられたものについての神の優しい眼指しをテーマにした作品を多く描いた。人びとに棄てられた『おバカさん』によって彼を棄てた人が救われるという宗教的論理は、遠藤の全作品を貫くテーマである。『おバカさん』は、遠藤の文学世界を代表する長編小説であり、同じモチーフが『沈黙』にも反映されている。そして、『おバカさん』の聖なる「バカ」——遠藤にとってそれは聖書のキリストのイメージである——は『沈黙』においては踏絵に描かれたイエスになり、「踏むがいい」と言いながら、自分の身を棄てて人を愛する者にまで昇華される。</p> <p>そのような聖なるバカが人間のなかに残した「痕跡」を綿密に考察することによって、人は自分のなかにも宿っている聖性に目覚めることができる。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「痕跡」の文学——遠藤周作の文学世界を理解するために	書名	
雑誌名	『遠藤周作研究』	論文名	
巻号	10号	出版社	
発行年月	2017年9月	出版年月	
ページ	未定	ページ	
著者名	金 承哲	著者名	
備考	済・未(未) (2017年9月頃予定)	備考	済・未(年 月頃予定)
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未(年 月頃予定)	備考	済・未(年 月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未(年 月頃予定)	備考	済・未(年 月頃予定)

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 3日

氏名	佐藤 啓介	所属	キリスト教学科
研究課題	記憶を核とする宗教的情操に関する宗教哲学的検討		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究では、慰霊、葬送、追悼などの個別の宗教的行為を動かしている動因を「宗教的情操」と規定し、その情操の構造を、人間存在の根本で働く「記憶の役割」に注目して、哲学的観点から明らかにすることを計画していた。その際の研究方法としては、国内における宗教学的事例研究の分析、ならびに英語圏・フランス語圏における宗教哲学の動向を分析することを、主たる方法として計画していた。とりわけ、申請者がこれまで取り組んできた哲学者リクールの物語的記憶論を接合点として活用することで、現代のフランス語圏の宗教哲学における不幸な死者への倫理思想を、宗教学での死者記憶論へと接合させ、死者に尊厳を感じる宗教的情操のあり方を明らかにすることを目指した。</p> <p>そうした研究の成果として、フランス宗教哲学と英語圏における宗教哲学、そして宗教学一般での死者論の対話を図った学会発表として、「抗議の神義論は擁護しうるか—死者の宗教哲学から考える—」(日本宗教学会第 75 回大会、単独、2016/9/10、早稲田大学)をおこなった。そこでは、不幸な死者の苦しみに、死者に代わって私たちが抗議することが倫理的行為なのかどうかを、分析形而上学における「死の害の哲学」ならびにフランス哲学の記憶論の観点から考察した。この学会発表によって、当初の研究計画の一端は、予定通り実現できたと思われる。なお、この学会発表の内容は、「パツへ研究奨励金によるもの」との記載はないものの、2017年3月刊行の単著『死者と苦しみの宗教哲学』(晃洋書房)に一部採録されている。</p> <p>また、宗教的行為・信仰における物語的記憶論においては、過去志向としての記憶と対になる未来志向としての期待・希望の概念が、重要な役割を果たしていることが、キリスト教系の宗教哲学の分析において浮かび上がってきた。そこで、現代キリスト教思想における代表的な希望論である神学者モルトマンの「希望の神学」を分析し、宗教的行為における記憶-希望という時間的構造の分析をおこなった。当該の分析は、論文業績①として刊行した。以上より、記憶論のみならず希望論をも取り扱ったことで、当初の研究計画を発展するかたちで、研究課題「宗教的情操の宗教哲学的検討」をおこなうことができた。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	宗教的幸福の非宗教的意義を考 える—モルトマンの希望の神学にお ける幸福論を手がかりに	書 名	
雑誌名	社会と倫理	論 文 名	
巻 号	31	出 版 社	
発行年月	2016年11月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	69-82	ペ ー ジ	
著 者 名	佐藤啓介	著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年4月14日

氏名	青柳宏	所属	人文学部人類文化学科
研究課題	v-システムに関する言語横断的研究～日韓語の動詞句構造を中心に～		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>Rizzi (1997)が提唱した補文標識 C の領域に普遍的に複数の機能範疇の階層が存在するとの主張に始まる言語地図作製(cartography)プロジェクトの下、近年では、(1)に示すように、時制辞 T 以下の領域にも機能範疇が階層的に存在するとの提案がある。さらに、Halle & Marantz (1993)、Marantz (1997, 2001)を始めとする分散形態論(Distributed Morphology)の仮説の下では、範疇未指定の語根(√R=root)に範疇決定機能範疇主要部(v, n, a, ...)が併合して初めて範疇が決まると考えるので、vP が概ね従来の VP に当たる。</p> <p>(1) [TP ... [XP ... [VoiceP ... [YP ... [vP ... [ZP ... Z] [√R (W)] v] Y] Voice] X] T]</p> <p>たとえば、Borer (2005)、MacDonald (2008)、Travis (2010)、Fukuda (2012)などは外項を導入する Voice を境として X、Y の位置に high/outer aspect、low/inner aspect という文の相や事象タイプに関わる機能範疇が存在するとしており、Pylkkänen (2000, 2008)や McGinnis (2001)などは vP を境として Y、Z の位置に high applicative、low applicative というそれぞれ受益・被害、所有権移動に関わる機能範疇が存在するとしている。しかし、日韓語において動詞句の階層性がどのようになっているかについての統一的な見解はいまだ存在しない。</p> <p>また、日韓語は統語的類似性が高いが、文法化(grammaticalization)の度合は前者の方が後者より進んでいるとされる(Shibatani 1994)。たとえば、日本語では「～始める、～続ける、～終わる／終える」のようなアスペクトを表す文法化された補助動詞の生産性が高いが、韓国語ではその生産性は軒並み低い。さらに、前者の「うつる(ut-ur)／うつす(ut-us)」(共通語幹は「空つ(ut-u)」:『時代別国語大辞典:上代編』による)のように、自他交替しつつ、さらに受動化(うつられ(ut-ur-are))、使役化(うつさせ(ut-us-ase))、使役受動化(うつさせられ(ut-us-ase-rare))するものも後者には存在しない。</p> <p>これらの事実を説明するために Aoyagi (in print)では、まず、文法化に 2 方向を認め、(i) 語彙範疇が機能範疇化して構造的により高い位置に現れる(Roberts & Roussou 2003、例: 上記アスペクト動詞)こともあれば、逆に、(ii) 語彙範疇が語根化(radicalization)する(例: 上記 ut-ur/ut-us の-ur と-us)こともあることを示し、日本語には(i)、(ii)の両方が存在するが、韓国語には(i)は限定的に存在するものの、(ii)は存在せず、動詞派生接辞 i, hi, li, ki は(1)の v の位置に止まっているとの仮説を提案した。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	On Verb-stem Expansion in Japanese and Korean	書名	
雑誌名	Japanese/Korean Linguistics	論文名	
巻号	Vol. 24	出版社	
発行年月	印刷中	出版年月	
ページ	1-14	ページ	
著者名	Hiroshi Aoyagi	著者名	
備考	済・未（2017年9月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年4月12日

氏名	奥田太郎	所属	人文学部 人類文化学科
研究課題	レジリエンス概念の哲学的・倫理学的研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究は、1990 年代以降社会や教育等に対しても用いられるようになった生態学出自の鍵概念「レジリエンス」についての哲学的・倫理学的研究である。</p> <p>本研究では、レジリエンス概念がこれまでにどのように扱われ、そうすることでどのような効果を発揮してきたかを先行研究に基づいて明らかにすることを目指した。そのうえで、自然環境と社会環境に関わる様々な問題領域の事例を収集・分析することによって、目指されるべきレジリエンスとそうでないレジリエンスという区別があるのか否か、あるとすればそれはいかなる基準によって区別されるのかを解明しようと試みた。こうした作業を通じて、レジリエンス概念がいかなるものかを哲学的・倫理学的に示すことが本研究の最終目的であった。</p> <p>2016 年の春には、計画通り、レジリエンス関連の文献を収集し、さしあたり参照すべき文献を整理した。その整理に基づいて、2016 年 7 月 27 日に北海道大学で開催された 2016 年度第 3 回応用倫理研究会にて「レジリエンス概念の倫理学的検討」と題する研究報告を行なった。その成果を踏まえて、レジリエンス概念を適用する具体的なテーマとして「内部告発」を選び、内部告発が組織や集団のなかで生じるメカニズムについて、それに対する報復・冷遇の不可避性なども視野に入れて、レジリエンスの観点から分析する研究を行なった。その成果を 2016 年 10 月 29 日に北海道大学で開催された 10th International Conference on Applied Ethics にて「Whistleblowing and Resilience」と題する研究報告として発表した。</p> <p>これら 2 つの研究報告をもとに、2 本の論文の執筆を計画中であるが、「レジリエンス概念の倫理学的検討」についてはまだプロット段階であり、他方、「Whistleblowing and Resilience」については、第一稿が書き上がり、南山大学社会倫理研究所が刊行する論文集「<i>Resilience, Proximate Causes and Social Ethics: Exploring the Ethical Foundations of Resilience</i> (仮)」(2017 年 8 月刊行予定) 掲載のために校正中である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	Resilience, Proximate Causes and Social Ethics: Exploring the Ethical Foundations of Resilience (仮)
雑誌名		論文名	Whistleblowing and Resilience (仮)
巻号		出版社	Nanzan University Institute for Social Ethics
発行年月		出版年月	2017年8月(予定)
ページ		ページ	90頁
著者名		著者名	Taro Okuda
備考	済・未(年月頃予定)	備考	済・未(2017年8月頃予定)
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未(年月頃予定)	備考	済・未(年月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未(年月頃予定)	備考	済・未(年月頃予定)

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年3月31日

氏名	藏本龍介	所属	人文学部・人類文化学科
研究課題	宗教組織の経営についての文化人類学的研究：日本とミャンマーの比較から		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>①研究経過 申請課題「宗教組織の経営についての文化人類学的研究：日本とミャンマーの比較から」に基づき、ミャンマーにおける研究資料収集・調査を行った（2016年8月、2017年2-3月）。</p> <p>②研究結果 帰国後はこれらの調査資料をもとに、「仏教を結節点とした「つながり」とその変容」として著した。原稿自体は2017年夏に書き上げたが、論集の刊行は2018年3月を予定している。本稿の概要は以下のとおりである。</p> <p>ミャンマーでは、約50年に及んだ軍政期をとおして、＜軍政・国家サンガ大長老委員会⇔一般の出家者・民衆＞という構図が構築されてきた。軍事政権が政治を専有し、それに対して出家者が抵抗する。さらにそれを抑えるべく、軍事政権が国家サンガ組織を整備する。こうした軍政と出家者という二大勢力を前にして、政治的なアクターとしての民衆の役割はごく小さいものに過ぎなかった。こうした中で、社会の構成員ではない（選挙権・被選挙権をもたない）出家者が、社会の構成員である民衆の代弁者として振る舞うことが許容されるという、倒錯した状況が常態化していた。</p> <p>しかし2011年以降、民主化プロセスが進展する中で、こうした状況は大きく変化しつつある。第1に、軍部による政治の専有が解かれることによって、「政治僧」の活動が活発化・組織化していく。その一方で、第2に、これまで沈黙を強いられてきた民衆が、議会制民主主義という新たな制度のもとで選挙権・被選挙権を有する市民となり、諸メディアを通じて積極的に自らの、そして多様な意見を述べるようになる。それではこれらの変化の中で、仏教を結節点とした「つながり」は、いかなる変容を遂げ、いかなる公共圏を生み出していくのか。そしてその中で出家者はどのような役割を果たしうるのか。この問題を考える上で重要なのが、2011年以降に活性化している出家者による反ムスリム運動と、それに対する社会の反応である。そこで本稿では、反ムスリム運動の実態と、それへの対抗言説を分析することによって、現代ミャンマーにおける公共圏の一側面を浮き彫りにすることを目的とする。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	転換期のミャンマーを生きる： 「統制」と公共性の人類学
雑誌名		論文名	仏教を結節点とした「つながり」とその変容
巻号		出版社	風響社
発行年月		出版年月	2018年3月末予定
ページ		ページ	
著者名		著者名	土佐桂子編
備考	済・未（年月頃予定）	備考	未（2018年4月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年3月24日

氏名	後藤 明	所属	人類文化
研究課題	現代考古学としての宇宙考古学：日本における先駆的研究の試み		
<p>2016年度は宇宙開発の系譜を現代考古学あるいは物質文化研究の視点から、調査および文献研究を行った。これと関連して宮城県角田市にある宇宙センターの見学を行い、日本の宇宙開発の歴史について展示資料から情報を収集した。さらに関連する文献調査も行って資料を収集、整理を開始することができた。</p> <p>さらに人類が宇宙をどのように捉えていたかというより大きい問題意識をもって、ここ数年継続している、民族天文学的な調査も継続している。具体的には北海道アイヌの墓や家の方位に見る天文現象との関連から、アイヌ民族の宇宙観に迫るための基礎調査を行った。その成果は2017年9月にスペインで行われる国際考古天文学・文化天文学会に発表する予定で、事務局から昨日（3月23日）、発表要旨の受理のメールが来ている</p> <p>なおここ数年いただいた Pache 助成金や科学研究補助金による研究成果の集大成として、現在単著『天文の考古学』を執筆しており、初稿を終え、同成社から本年5月に出版予定である</p> <p>またこのような研究活動が認められ、2017年度から国立民族学博物館の共同研究「宇宙開発への文化人類学的接近」の一員に加わることになっている。</p> <p>2016年度の成果としては次の論考を出版した：</p> <p>「宇宙考古学の射程：現代考古学・物質文化研究としての展望」『貝塚』72:11-20. (査読付き)</p> <p>さらに関連する業績としては次を出版した：</p> <p>Solar Kingdom of Ryukyu: the formation of a cosmovision in the southern Islands of the Japanese Archipelago”、Journal of Astronomy in Culture 1(1): 78-88 (査読付き)</p> <p>。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツヘ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
① 論文		①	
論文題目	宇宙考古学の射程：現代考古学・ 物資文化研究としての展望	書名	
雑誌名	『貝塚』	論文名	
巻号	72	出版社	
発行年月	2017年3月	出版年月	
ページ	11-20	ページ	
著者名	後藤 明	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
② 論文		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③ 論文		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年3月31日

氏名	斎藤 衛	所属	人文学部
研究課題	統語と意味のインターフェイス: θ 規準効果の説明と連鎖の解釈をめぐって		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>現在追求されている極小主義文法理論 (Chomsky 2013, 2015) は、最低限必要な操作によって構成される。一つは、二つの要素 α, β から構成素 $\gamma = \{\alpha, \beta\}$ を形成する「併合」であり、もう一つは、併合によって形成された構造を、意味と音声の解釈部門に送る「転送」である。併合は、形成された句の性質を決定するラベリング・アルゴリズムを伴う。例えば、動詞と名詞を併合した場合に、形成された句が、動詞句あるいは名詞句であるという情報を、解釈部門が必要とするからである。本研究では、日英語比較研究を基礎として、ラベリングと転送について新たな提案を行った。</p> <p><u>θ 規準効果の説明</u></p> <p>θ 規準は、動詞の述部・項構造が、統語構造に反映されなければならないとする原理であり、Chomsky (1981) によって提案されて以来、広く仮定されてきた。しかし、昨年度の研究で、(i) 英語においては、その効果がラベリング・アルゴリズムによって説明しうること、(ii) 日本語では、ラベリングが適格になされる一方で、θ 規準に抵触する文法的な例が複数種類あることを示し、θ 規準を除去することを提案した。すでに“Labeling and Argument Doubling in Japanese”と題する論文の草稿を書き終えていたが、今年度は、最終稿を完成させ、国立清華大學語言學研究所 30 周年記念論集に掲載すべく、現在校正を行っている。</p> <p><u>転送領域に関する研究</u></p> <p>転送により説明される現象に、照応形束縛や移動の局所性がある。(例えば、○John likes himself と X John thinks that Mary likes himself の対比が示すように、再帰代名詞は同一文内に先行詞がなければならない。) 本研究では、日本語特有の現象に基づき、転送領域 (転送される単位) の再定式化を提案した。述部・項構造を表す vP と文の時制や作用に関する情報を含む CP が基本的単位 (フェイズ) とされているが、上位のフェイズが完成した時点で、下位のフェイズが解釈部門に転送されるというのが、提案の骨子である。要点を示し、この提案により、英語の束縛や移動に関する経験的問題も解決できること、また、様々な種類の文構造の統一的分析が可能になることを、“A Note on Transfer Domains”と題する論文にまとめ、<i>Nanzan Linguistics</i> 12 (言語学研究センター) に発表した。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	A Note on Transfer Domains	書名	
雑誌名	<i>Nanzan Linguistics</i> (南山大学言語学研究センター)	論文名	
巻号	12	出版社	
発行年月	2017年3月	出版年月	
ページ	61-69	ページ	
著者名	Mamoru Saito	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年3月17日

氏名	鈴木 貴之	所属	人文学部
研究課題	実験哲学の手法を用いた責任実践に関する心理的メカニズムの解明		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>今年度は主に以下の内容について研究を進めた。</p> <p>①これまでに実施した自由意志と責任に関する質問紙調査のデータ分析を進め、一般の人々は、他行為可能性に関して一部の哲学者が想定するような理解をしていないことなどを明らかにした。その成果は、今後学術論文として公刊予定である。</p> <p>②責任判断の心理的メカニズムに関する実験哲学研究および社会心理学研究についての文献調査を行い、その理論的・哲学的意義に関する考察を進めた。その結果、現在提唱されている経験的モデルには、自由意志の問題における非両立論を支持する要素は見られないものの、現在のモデルはいくつかの点で単純すぎるということが明らかになった。その成果は、2017年3月に東京大学駒場キャンパスで開催された道德・社会認知研究会における研究発表「責任判断の心的メカニズム：概観と展望」として発表された。同内容は今後学術論文として公刊予定である。</p> <p>③心知覚 (mind perception) に関する社会心理学研究についての文献調査を行い、その理論的・哲学的意義に関する考察を進めた。その結果、心知覚は経験／行為者性および被行為者／行為者という対比を基本的な図式とすることや、この図式がさまざまなバイアスの原因となりうることを明らかにした。また、それらのバイアスを解消するためには、反省的な認知過程に依拠することよりも環境を改変することのほうが効果的であるかもしれないことを明らかにした。これらの成果は、2017年度に出版予定である概念工学を主題とした論文集の執筆担当章として公刊予定である。</p> <p>④申請者が研究代表を務める科学研究費補助金との共催で、ニュージーランドのヴィクトリア大学ウェリントン校から Justin Sytsma 氏を招き、2017年2月17日、18日に、南山大学名古屋キャンパスで実験哲学を主題としたセミナーを開催した。セミナーでは、実験哲学の構想、研究手法、具体的な研究をテーマとして合計5つの講演が行われ、実験哲学の意義や具体的な研究内容について、講演者と参加者の間で活発な議論が交わされた。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	『概念工学マニフェスト（仮）』
雑誌名		論文名	「心（らしさ）の概念を工学する － 哲学側からの応答」
巻号		出版社	名古屋大学出版会
発行年月		出版年月	2017年度中を予定
ページ		ページ	未定
著者名		著者名	鈴木貴之
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	未（2017年10月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 19日

氏名	藤川美代子	所属	人文	学部	人類文化	学科
研究課題	船上生活者の教育と福祉に関する文化人類学的研究：日本と中国の比較					
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究は、国家の理念や政治体制に大きな差異が認められる近代以降の日本と中国において、船上生活者の子どもをめぐる実施されてきた学校教育・社会福祉のあり方を比較検討し、それらが持つ意味を、「国家の意図」と「当事者の受け止め方」から考察することを目指している。</p> <p>2016 年度は、日本(名古屋市)・中国(福建省福州市・漳州市)・台湾(台北市)における現地調査および資料調査を実施した。また、日本・中国の教育制度に関連する文献の収集に努めた。また、教育・福祉を含む一連の「陸上がり」が船上生活者にとっていかなる意味をもつのかを、より広い視点から理解すべく、日本・中国(大陸・香港)・タイをフィールドとする若手の研究者とともに研究会とシンポジウムを開催した。</p> <p>2016 年度の調査・研究により、日本については、船上生活者の文明化(教育水準の向上、児童福祉の拡充)と定住化を抱き合わせにした政策が、大正期の都市港湾部に出現していたこと、それが米騒動後に高まった治安維持の徹底化という文脈と密接に関わっていたことが明らかになった。つまり、船上生活者に対する教育と福祉の必要性は、子どもたちを貧しさ・無教養・粗野な性格・未発育の身体をもった「問題児」として対象化し、それらの原因を流動的な船上生活に求める政治的態度の結果として生じたということになる。いいかえれば、ある時期において教育とは、親以前の生活・生業の慣習を否定することを前提としていたというわけである。ただし、現場で教育や福祉を享受した子どもや親、彼らと接した教師や寄宿舎の職員は、いかなる経験として一連の動きを捉えていたのかについては、細かな聞き取り調査が必要となる。また、村落部での政策の展開や実際の経験についても詳細な研究が求められる。これらは今後継続的に考察する予定である。</p> <p>中国については、1949 年以降の共産党政権による統治システムが、船上生活者の(教育・福祉を含む)陸上がりの過程に大きな影響をもたらしていたことがわかった。建国前から、財や権力をもたざる者たちのよき理解者であらねばならぬとの宿命を負いつづけてきた共産党政権にとって、船上生活者に定住用地を割譲し、集合住宅を建設・分配する行為は、もたざる者の救済という自らの責務を体現してみせる上で、恰好の材料となったはずであり、船上生活者の子女のための小学校開設・寄宿舎設置も、大きな役割を担ったからである。ただし、このことは子どもたちの未来を一元的に陸上へと開くことにはつながらなかった。たとえば、福建省漳州市の連家船漁民の場合、義務教育以上の学歴を得るために陸上で長い時間を過ごしてもなお、水上の船に生業・生活の場を求めることが多いからである。中国についても日本と同様、教育現場でいかなる指導がいかなる志のもとに展開されたのか、子どもたちはそれをいかに受け止めているのかを、さらなる聞き取りと参与観察によって明らかにする必要がある。</p>						

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	講演録「趣旨説明：水上と陸上に生きる－アジアの船上生活者が経験した「陸上がり」－」	書名	
雑誌名	講演録『南山大学人類学研究所主催 共同研究「定着／非定着の人類学：「ホーム」とは何か」関連公開シンポジウム①』	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2017年5月発行予定	出版年月	
ページ	(編集中につき未定)	ページ	
著者名	藤川美代子	著者名	
備考	済・未 (2017年6月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
②		②	
論文題目	講演録「水上と陸上に住まう－中国・福建の連家船漁民が経験した「陸上定居」」	書名	
雑誌名	講演録『南山大学人類学研究所主催 共同研究「定着／非定着の人類学：「ホーム」とは何か」関連公開シンポジウム①』	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2017年5月発行予定	出版年月	
ページ	(編集中につき未定)	ページ	
著者名	藤川美代子	著者名	
備考	済・未 (2017年6月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)

2016年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 3月 25日

氏 名	吉田 竹也	所 属	人文学部人類文化学科
研 究 課 題	楽園観光地における宗教と観光の合理化の研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究は、インドネシアのバリ島、および国内の沖縄周辺地域の島嶼社会を事例とし、とくに「楽園」という形容を与えられる観光地に関する資料にもとづいて、島嶼学と人類学とを架橋しつつ、観光と宗教の合理化について探求しようとするものである。研究目的については、科研で採択を受けた研究と合致する。</p> <p>今年度は、理論研究の面で、2つの成果を論文として刊行した。ひとつは、ギアツのバリ宗教合理化論とヴェーバーの宗教合理化論との差異と共通性を整理した2015年5月の文化人類学会における発表(査読付き学会発表)に修正を施し、日本文化人類学会の学会誌に投稿したものである。いまひとつは、この論文とも密接な関連を有する、マックス・ヴェーバーの合理化論の認識基盤を文化人類学の民族誌的研究との関連を視野にまとめたものであり、こちらは『アカデミア』に掲載された。</p> <p>これらの業績を刊行する傍らで、本申請研究に関わる他の作業も進めた。まず、観光と宗教の実態について、1週間程度沖縄で、また2週間程度バリで、それぞれフィールドワークをおこなった。この出張については、科研費をもちいた。沖縄では、観光と宗教の関係を慰霊観光という形態において捉えつつ、その観光形態の転換を示すデータを、那覇市の図書館や公文書館で収集するとともに、ひめゆり平和祈念資料館において、本研究課題に関する継続的な資料収集を行った。ひめゆりについてのデータを収集し議論の方向付けをおこなうことが、今年度の最優先課題と考えてたが、そこに一定の見通しを得ることができた。また、バリについては、これまで継続的に収集してきたデータをあらためて再整理しながら、議論にまだ欠落している穴を補うようなデータ収集をおこなった。とくに、サヌールという観光地にあるホテルと寺院の関係の現状について確認しインタビューできた。今年度、研究全体の民族誌的データの整理に、かなりめどが立ってきたように思われる。その点では、研究計画を順調に進めることができたと判断する。</p> <p>理論研究の面では、リスク論と観光論・宗教論との接合可能性について、さらに考察を進めた。こちらも、ある程度のめどが立ってきたように思われる。</p> <p>なお、パッへ研究奨励金は、おもに文献資料の購入と、PCをはじめとする機器の購入に充てた。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2015 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①	論文	①	
論文題目	ヴェーバー合理化論の基盤認識と人類学——客観性・因果連関・歴史の叙述	書 名	
雑誌名	アカデミア人文・自然科学編	論 文 名	
巻 号	12	出 版 社	
発行年月	2016 年 6 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	1-21	ペ ー ジ	
著 者 名	吉田 竹也	著 者 名	
備 考	済・未（頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
②	論文	②	
論文題目	バリ宗教の合理化論をめぐる再検討——ギアツからヴェーバーへ	書 名	
雑誌名	文化人類学	論 文 名	
巻 号	81(2)	出 版 社	
発行年月	2016 年 9 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	302-311	ペ ー ジ	
著 者 名	吉田 竹也	著 者 名	
備 考	済・未（2017 年 3 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 1月 13日

氏名	渡部森哉	所属	人文学部
研究課題	ペルー北部高地カハマルカ地方の土器研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>2016年8月から9月にかけてペルーに滞在し、遺物の分析を行った。2012年に実施したエル・パラシオ遺跡第3次発掘調査でC2区から出土した土器を、これまで設定した土器タイプに従って分類し、土器のタイポロジーとの整合性を確認した。</p> <p>またこれまで分析済みの他の発掘区の土器サンプルの図面を作成し、アルバイトを雇い、コンピューターでデジタル化した。今回の研究費は全てアルバイト代として使用した。</p> <p>ペルー北部高地カハマルカ地方では前50年頃からスペイン人が侵入する16世紀前半まで、カオリンと呼ばれる緻密な白色粘土を用いた土器製作が行われた。またこの土器に特徴付けられる文化はカハマルカ文化と命名されている。土器が高度に発達しながら、建築や墓などがあまり目立たないのがこの文化の特徴である。カオリン土器は、作りはいいものの、埋納や墓などの特別なコンテクストに限定されるわけではない。そのため地表から容易に確認できる。遍在することから、政治的階層、社会分化に対応する土器ではなく、儀礼的共通性を示すと考えられる。そのため、分析のためには儀礼的要素がどれだけ認められるかがポイントとなる。</p> <p>土器分析の結果、次のようなことが明らかとなった。分析した土器資料が出土したC2区は斜面に位置する。山の麓の平らな部分に位置するB区と比較して建築物は小規模で、装飾的な土器は相対的に少ない。そのため、エル・パラシオ遺跡の中核部はB区にあると考えられる。また外来のワリ様式土器がB区とC区から出土している。人面を施した土器が多く出土しており、それぞれ顔の表情や頭飾りが異なり、別個の人間集団を示していると思われる。そうした人面表象は、在地のカハマルカ文化のカオリン土器にも取り入れられた。従って土器分析から当時の人間集団の間でどのように表象されていたかを明らかにすることができ当時の社会状況を理解する手がかりとなる。今年度の研究内容の一部は古代アメリカ第21回研究大会で発表した。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	ワリ文化の奉納儀礼について—ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡の事例—	書名	
雑誌名	年報人類学研究	論文名	
巻号	7号	出版社	
発行年月	2017年3月	出版年月	
ページ		ページ	
著者名	渡部森哉	著者名	
備考	済・未（3年31月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
パッセ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年 2月 24日

氏 名	加藤 隆雄	所 属	人文学部心理人間学科
研 究 課 題	〈子どもコード〉の歴史的・理論的研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子ども向け文化を、児童文化研究や児童文学研究とはまったく別の観点から、また作品とテクストの評論という形ではなく、文化として外的に分析する手段として、「子どもコード」という概念を充実させ精緻化していく研究を行った。これによって、膨大な過去の文化作品個々の批評的考察に煩わされることなく、一定の視点のもとにおける研究が可能になった。その成果は「〈子どもコード〉の生成と展開—児童文学と特撮テレビ番組の分析—」（南山大学紀要『アカデミア』人文・社会科学編第 13 号, pp.39-50）として公刊した。この中では、「子どもコード」という概念の必要性、その定義と、実際に子どもコードが生成する場面の分析を、文献資料や視聴覚資料を用いながら行った。また、国際子ども図書館の収蔵資料も参考にした。 ・ 上記論文では、子ども向け文化に規制コードがかかるありさまを、現代にいたるまで述べることができた。特に、現代の子ども向け文化が、自己準拠的に規制を強めるメカニズムを「過コード化」として論じることができた。 ・ 次の点が課題として残された。①19 世紀から 20 世紀にかけての欧米の児童文学を取り上げたが、より専門的に踏み込んだ検討が必要であること、②戦後日本の児童文学についてもより網羅的な検討が必要であること、③子どもコード概念の文化理論や言語学・記号学理論によるさらなる精緻化。 ・ 子どもコードという概念を設定したことで、子ども文化産業を適切に取り扱う枠組も確立することができたと考える。20 世紀初めのアメリカの、特にディズニー以降の子ども向け文化、1960 年代以降のテレビアニメを中心にした子ども文化の発展とその構造について、今後、実証的な研究を構想していく足がかりとなった。 ・ 同様に、子どもコードという概念を設定したことで、青年文化を、その脱コード化として捉えることができるようになった。こうした観点から、青年文化の生成と展開を体系化することができると考えており、上記の課題とともに今後取り組む予定である。 			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	〈子どもコード〉の生成と展開—児童文学と特撮テレビ番組の分析—	書名	
雑誌名	『アカデミア』人文・社会科学編	論文名	
巻号	第13号	出版社	
発行年月	2017年1月	出版年月	
ページ	39-50	ページ	
著者名	加藤 隆雄	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年 4月 4日

氏名	平川武仁	所属	体育教育センター
研究課題	競歩の歩行速度の差異による上・下肢の協応動態の安定性に関する非線形再帰定量化解析		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>スポーツなどで合目的な運動産出を目的とした場合、四肢の動きの相対的關係における安定性の有無が熟達度の 1 つの指標となる。本研究では、競歩種目における上肢（上腕）と下肢（大腿）の相対的關係における安定性を定量化するため、短期時系列データでの非線形解析を可能とする再帰定量化解析を用いて、まず漸増歩行速度条件における上肢と下肢との相対的關係の安定性を算出し、その安定性の指標を用いて、歩行速度と安定性の關係を数理的にモデル化した。次に、同条件における未熟練者の指標の変化を定量化し、熟練度による差異を検討した。</p> <p>実験測定では、100m/min の速度から 250m/min まで 30 秒毎に 10m/min ずつ漸増するトレッドミル上で、熟練競歩選手 5 名と未熟練競歩選手 1 名が競歩の歩型で歩いた。熟練者の最終速度は 250m/min であったが、未熟練者は 220m/min であった。彼ら 1 名ずつの矢状面動作を評価できるように、右側側方からビデオ撮影（毎秒 60 コマ）した。得られた動画画像から、各速度（140m/min から 250m/min までの 12 速度）の中間 10 秒の動画画像データを抽出し、この期間の彼らの右肩峰、右肘、右大転子、右膝の各 4 点をデジタイズした後、各点に関する 2 次元の実座標変換をした。この時系列データを 2 次のバターワース・ローパス・フィルターで平滑化し、上肢と下肢の水平偏角の時系列データを作成した。再帰定量化解析の前に、全 69 データ (=5 名×12 速度+1 名×9 速度) について、まず誤り再隣接法によって埋め込み次元 (m) を、次に平均相互情報量により遅延時間 (τ) を算出し、位相空間を再構築した。埋め込み次元には 2 次元が選択された。再構築された位相空間では、上腕の角度変異が最初に最小値になった時点から 4 回目に最小になった時点までの 3 周期を解析の基準区間として抽出し、各遅延時間を踏まえて各角度データを抽出し、位相空間中の軌道を 300 点に基準化した。再帰定量化解析では、半径パラメータ ϵ を決定し、二値化した後、安定性の指標である最大線長を算出した。</p> <p>その結果、熟練者の安定性は速度に対して、逆比例的に上昇し、その関数（数理モデル）は「最大線長=$-4626/(\text{速度}-276)+40$」であった。しかしながら、未熟練者の安定性は歩行速度に関わらず、上昇せず停滞していた。</p> <p>これらの結果は、熟練者の上肢と下肢のアトラクタの相対的關係が強固、柔軟性、そして協応されていたが、未熟練者のアトラクタは摂動（トレッドミルの漸増速度）に対して脆弱であったことを意味していた。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	漸増歩行速度条件で保持される競歩の上肢と下肢の協応パターンの安定性	書名	
雑誌名	アカデミア人文・自然科学編	論文名	
巻号	第13号	出版社	
発行年月	2017年1月	出版年月	
ページ	133-147	ページ	
著者名	平川武仁（単著）	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 14日

氏名	鎌田 修	所属	人文学部日本文化学科
研究課題	生きた素材による初級から中級への日本語会話教材のための素案作り—会話当事者の意識を基盤に—		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>まず、2016年5月には2015年度パツへ研究奨励金を利用して完成させた日本語の聴解教科書『生きた素材を使つての中級から上級へのなりきりリスニン』(ジャパンタイムズ)を無事出版できたことを報告する。そこでは「中級から上級」というすでに基礎的な力を持った学習者を対象にした教材開発を目的としたが、今回の研究では、むしろ、初級レベルにおいて生の素材を使つた聴解能力の開発という極めて挑戦的な研究に取り組んだ。初級レベルの場合、ほとんどの外国語は「雑音」にしか聞こえないかもしれないが、その「雑音」から何らかのコードを発見し、意味理解を可能にする能力の開発であり、それは、子供の言語習得に匹敵するプロセスであると言える。臨界期をすぎた成人にもそれは可能であるという仮説のもと作業を進めた。前回と同じ研究仲間との共同研究を行い、やはり、まずは、その自然発話の場の当事者になること、それが大切だと判断し、いかに、その当事者になれるか、ということを中心に研究を進めた。2016年6月と2017年3月に開かれた日本語プロフィシエンシー研究会で研究発表とワークショップを行い、理解を深めるとともに実際の教材開発も試みた。</p> <p>しかし、ここで述べたような情動的動機付けだけで聴解能力が付くはずはなく、やはり、そもそも、自然発話そのものの音声的分析に加え、自然発話の談話分析、語彙、文法分析に基づいた「訓練」が必要なことをはっきり認識するに至った。例えば、日本人同士の雑談に入り込み会話を展開する際、その場に溶け込み、情動的に「当事者」になることはできても、そこで展開される話の細部、あるいは、ポイントの理解がなくては本当の当事者にはなれない、単なる、調子を合わせるだけの当事者にしかなれない。動機付けだけでは解決できない言語的問題を解決する方法を考えなければならない。また、言語的問題だけでなく、音声認識そのものに関わる身体的、生理的課題も残している。これらの点のさらなる理解は今後の課題として取り組む。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	上級日本語学習者に残る中間言語的特徴 – 文末表現の習得に絡めて –	書名	
雑誌名	『日本語学』2017年2月号	論文名	
巻号	Vol. 36-2	出版社	
発行年月	2017.2	出版年月	
ページ	Pp.58-69	ページ	
著者名	鎌田修・峰布由起	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年4月19日

氏名	森田貴之	所属	人文学部日本文化学科
研究課題	中世の寺社縁起を対象とする漢故事受容の研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>中世の代表的な寺社縁起資料である、『八幡愚童訓』甲本を対象とし、その漢故事受容の様態を研究した。『八幡愚童訓』甲本は、主に神功皇后の三韓征伐伝承を中心に八幡宮の神威を説き、また蒙古襲来を退けた靈験を説くものである。その漢故事受容形態は、およそ①文飾や比喩的な引用、②漢籍仏典等由来の句の直接引用、③やや長文の説話引用の3つの形態が認められたが、そのうち主に②、③の場合を主な対象とした。</p> <p>②の場合には、『帝範』『臣軌』という2つの漢籍が頻繁に用いられていることがわかった。これらの漢籍は、いわゆる君臣道徳を説くものであり、一見して寺社縁起資料である『八幡愚童訓』との関係は見いだせない。しかし、『八幡愚童訓』には、理想的な君臣関係として、神功皇后と武内宿禰の関係に言及しており、漢籍引用の形態からもその君臣関係を理想化していることが裏付けられた。</p> <p>次に③の場合には、『史記』のうち、高祖やその妻呂后に関する引用が特に顕著で、長文での引用例も含まれていた。これは、神宮皇后を呂后になぞらえることで、日本の歴史の先例として、中国の漢王朝の歴史を参照していくという、叙述姿勢の現れであると考えられる。</p> <p>こうした2つの事例は、決して独立した事象ではなく、②の例で触れた武内宿禰は、鎌倉幕府の執権北条義時がその後身であるという説が流布しており、③の例で注目した呂后についても北条政子との同質性が語られている点に共通点がある。つまり、②・③の漢籍引用の方法は、ともに、蒙古襲来当時、鎌倉武家政権を実質上掌握していた鎌倉北条氏の立場を擁護しつつ、八幡宮の靈験を説くという『八幡愚童訓』甲本の方向性を示すものであることがわかった。</p> <p>以上、『八幡愚童訓』甲本の漢籍受容の形態について研究を行った結果、漢籍引用の点から本書が北条氏の立場を意識していることが判明し、作品の叙述内容や構想と密接に関わる形で漢籍の引用がなされていることがわかった。『八幡愚童訓』甲本は、神国思想の高まりを反映した作品として有名だが、その神国思想の背景としても漢籍が用いられている点は、思想史的にも留意すべきであろう。同時に、従来、中世の寺社縁起と漢籍の関係はほとんど論じられることがなかったが、その有効性を本研究によって示すことができた。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	『八幡愚童訓』甲本の漢籍利用法 粗描—武内宿禰と北条氏に触れつ つ—	書 名	
雑誌名	国語国文	論 文 名	
巻 号	86 巻 4 号	出 版 社	
発行年月	2017 年 4 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	未定 (16pp.)	ペ ー ジ	
著 者 名	森田貴之	著 者 名	
備 考	済・未 (2017 年 4 月頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未 (年 月頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未 (年 月頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 1月 13日

氏名	Anthony Cripps	所属	Dept. of British and American Studies
研究課題	Examining the efficacy of BYOD (Bring Your Own Device) for English Language Learning		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>My research on examining the efficacy of BYOD (Bring Your Own Device) for English language learning was very successful and provided data which will be of use to the university and add to the existing canon of academic knowledge. Below is a brief overview of my research and the results. Elements of this research were presented at the COLTT conference on language learning and technology in Colorado, and the HICE Conference in Honolulu. This research project had three main goals: to examine the efficacy of BYOD through multi-method quantitative and qualitative analysis: to investigate the implementation of BYOD (Bring Your Own Device) at Japanese universities: to create guidelines for teachers when incorporating BYOD into their courses.</p> <p>In the initial stage of this research project a comprehensive analysis of the existing literature on BYOD support and implementation was carried out. Preliminary data was collected through interviews with academics and an extensive literature analysis. Additionally, students we asked about their thoughts on BYOD through online questionnaires. At this stage the existing academic canon and implementation of existing BYOD was catalogued and analyzed. Two students from Nanzan University were recruited to take part in the study. They were asked to use portable technology to assist their language learning. The students used this technology every day (both in class and outside of class) to improve their English language learning. Data on the students' BYOD experiences was collected through face-to-face interviews, questionnaires, and students' BYOD diaries. The quantitative and qualitative data was analysed to assess the effectiveness of BYOD in helping support English language learning. Initial findings were presented at two conferences in America (COLTT and HICE). A research paper which outlines this study in detail is due to be published in Academia in March 2017.</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
⊖		⊖	
論文題目		書名	Academia No. 101
雑誌名		論文名	Assessing the efficacy of Bring Your Own Device/Bring Your Own Technology: An exploratory study
巻号		出版社	Nanzan University
発行年月		出版年月	March 2017
ページ		ページ	TBA
著者名		著者名	Anthony Cripps
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
⊖		⊖	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
⊕		⊕	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 5日

氏名	大澤 広晃	所属	外国語学部英米学科
研究課題	1940、50年代の南アフリカにおける「人道主義」の展開とイギリス帝国		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p><研究経過></p> <p>本研究では、20世紀の南アフリカにおいて「人道主義」が非白人の権利の保護やその福利の増進をいかにして実現しようとしたのかを解明しようとした。この研究を遂行すべく、パツへ研究奨励金は海外史料調査のための旅費支出及び関連文献の購入に用いた。このうち、海外史料調査については、2016年8月にイギリスで実施した。現地では、英国図書館において、当時の主要な「人道主義」団体であった原住民保護協会と反奴隷制協会の史料を調査した。また、ロンドン政治経済学院（LSE）図書館では、「人道主義」にかかわる女性団体の史料を閲覧・分析した。両方の文書館ではデジタルカメラによる史料の撮影が許可されていたので、閲覧しきれない史料は写真に収め、後日分析を行った。</p> <p><研究結果></p> <p>パツへ研究奨励金で購入した文献の読解とその支援を受けて行った海外史料調査での成果、及び、これまでの研究に基づき、2本の論文を執筆した。</p> <p>1つは、「「人道主義」とアフリカ人の結婚制度：原住民保護協会（APS）を事例として」というタイトルで『南山大学ヨーロッパ研究センター報』（第23号、2017年3月31日発行）に掲載された。本論文では、20世紀における「人道主義」とジェンダーの問題を考察するための足がかりとして、19～20世紀転換期の原住民保護協会がアフリカ人の結婚制度にどのような態度を示したのかを当時の思想潮流との関係で明らかにしようとした。</p> <p>もう1つは、「20世紀中葉南アフリカにおけるアフリカ人女性全国評議会（NCAW）：アフリカ人女性と植民地主義についての一考察」と題する論文で、『アカデミア 人文・自然科学編』（第14号、2017年6月30日発行予定）に掲載されるものである。本論文では、これまでの史料調査の成果とパツへ研究奨励金で遂行した研究の成果を踏まえて、20世紀中葉の南アフリカにおいてアフリカ人女性たちが植民地主義にかかわる諸問題にどのように対峙したのかをアフリカ人女性全国評議会（NCAW）という組織に着目して分析した。</p> <p>2つの論文により、本研究課題に関わる新たな領域を切り拓くことができたと考えている。貴重なご支援に感謝申し上げたい。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「人道主義」とアフリカ人の結婚制度：原住民保護協会（APS）を事例として	書名	
雑誌名	『南山大学ヨーロッパ研究センター報』	論文名	
巻号	第23号	出版社	
発行年月	2017年3月	出版年月	
ページ	1～25	ページ	
著者名	大澤広晃	著者名	
備考	済・未（2017年4月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目	20世紀中葉南アフリカにおけるアフリカ人女性全国評議会（NCAW）：アフリカ人女性と植民地主義についての一考察	書名	
雑誌名	『アカデミア 人文・自然科学編』	論文名	
巻号	第14号	出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名	大澤広晃	著者名	
備考	済・未（2017年6月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

年 月 日

氏 名	神崎宣次	所 属	国際教養学部(2016年度は外国語学部)
研究課題	領域横断的研究に関連する重要な概念についての倫理的視点に基づいた分析		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>この研究の目的は、領域横断性、およびデュアルユースという二つの概念を倫理学の観点から分析することにあつた。そもそもこの研究計画を立てた背景として、申請者が近年、1) 総合地球環境学研究所における環境保全研究プロジェクト(「地域環境知形成による新たなコモンズの創生と持続可能な管理」, ウェブサイト http://ilekcrp.org)、2) 人工知能の社会的影響等に関する研究プロジェクト (AIR: Acceptable Intelligence with Responsibility, ウェブサイト http://sig-air.org) という、二つの領域横断的な研究グループに実際に参加して研究を行ってきたという事情がある。</p> <p>そのため、当パツへ研究は、これらのグループへの報告者の参加を一種のフィールドワークとして扱うという形で一年を通して実施された。また、それ以外にも、12月に科学社会技術論と戦争倫理の専門家を招聘した研究合宿を行って、領域横断的な体制に基づいてデュアルユース概念についての検討を行った。(そのほか、資金の都合上、別経費(科研費)での実施になったが、三月には北海道大学の川本思心准教授の研究グループと合同で、デュアルユース概念についてのワークショップを開催した。)</p> <p>こうした研究活動の成果は、北海道大学で開催された応用倫理国際会議での発表(単独, "Ethicists' Participation in Interdisciplinary Research: three case studies", 2016年10月29日)や、前述の地域環境知プロジェクトでの報告として、すでに一部公表している。</p> <p>ただし文章としての公表は、予定していた論文集の刊行が出版補助への申請の関係で一年遅れることになってしまったために、今年度の期日までに間に合わないことになってしまった。この点については可能な限り早急に対処したい。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 3月 31日

氏名	芝垣亮介	所属	外国語学部英米学科
研究課題	述語の種類論と英語教育		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>研究経過</p> <p>報告者は本研究奨励金を活用し物品の購入および出張を行なった。研究内容は課題通り、述語の理論言語学的分析を行い、それを基に英語教育にどう活かすかというものであった。具体的には、日本語の「ないで」と「なくて」の分析を行なった。これらは共に「ない」の要素を含んでいるが、その文法のパターンは異なり、「ない」が述語として機能する時としない時の区別が分岐点となった。これらの2語は第二言語としての習得時に混乱をきたすことが知られており、その解決方法を提案すべく、先行研究の分析と新たなデータの収集を行なった。</p> <p>研究結果</p> <p>研究結果として、論文「Between Language Education and Linguistic Theory: Suffixes and their Semantic Distribution」を発表するに至った。この論文はタイトル通り、言語の理論分析と英語教育の接点をさぐるものである。内容は前述の「ないで」と「なくて」の2語を用い、教育現場での混乱を解消するためには、この2語の理論言語学的分析を簡素化し、教育者に伝え、体系的に教える必要があることを提案した。理論分析としては、「ないで」は「なくて」よりも統語的に制限がきつく、可能な文法表現が限られている一方、「ないで」の方が「なくて」よりも意味的な制限がゆるく（一部意味がオーバーラップしている）、ここが教育現場における混乱を引き起こしていると仮定した。実際の教育現場でこの論文で提案する方法が効果的かどうかは、実験が必要であり、本研究ではそこまで到達しておらず、これは今後の課題としたい。</p> <p>以上、本研究奨励金を有効に活用し、研究成果を残したことをここにご報告いたします。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Between Language Education and Linguistic Theory: Suffixes and their Semantic Distribution	書名	
雑誌名	言語文化学会論集	論文名	
巻号	第48号	出版社	
発行年月	2017年6月予定	出版年月	
ページ		ページ	
著者名	Ryosuke Shibagaki	著者名	
備考	未（2017年6月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 4日

氏名	鈴木達也	所属	外国語学部英米学科
研究課題	言語横断的分析による不定形節の普遍的特性の解明について		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究は、不定形節が持つ普遍的な特性を明らかにすることを目指し、ミニマリスト・プログラムの枠組みを用いた英語動名詞と現在分詞の統一分析と日本語の連用形や「お...になる」タイプの敬語をも射程に入れた言語横断的な分析を行うプロジェクトの第1期と位置づけるものである。</p> <p>当初の計画では、研究の前半は近年行われてきた ACC-ing の分析 (Reuland (1983)、Pires (2006)等) を総括し、解明すべき問題点を洗い出し、理論的背景を十分踏まえて、本研究の意義を明確化し、研究の後半で、最新の POP (Problems of Projection) (Chomsky 2013、2015) の枠組みにおける動名詞研究の理論的意義についての考察を行い、プロジェクトの次年度以降の研究へとつなげるとしていた。</p> <p>前期の研究をしている過程で、不定形節の一つである「英語縮約関係節」の分析が本研究にとって重要な意味を持ち得ることが判明し、後期に行なう予定であった最新の POP の枠組みによる不定形節の検討を前倒しして集中的に研究を行った。その成果は、2016年10月15日開催の日本英文学会第68回中部支部大会(富山大学)にて口頭発表を行なった。大会での発表のフィードバックを踏まえて研究を継続し、その成果は、2017年4月に『中部英文学』第37号(査読付き)に投稿した。(採否については2017年8月頃判明)</p> <p>内容は、ミニマリスト・プログラム (Chomsky 1995, 2004, 2013, 2015 他) に基づいた英語縮約関係節の統語的分析であり、一般に付加詞としての関係節は対併合によって生成されると仮定し、定形関係節や不定詞関係節とは異なり、英語縮約関係節は CP の構造を持たないことを示した上で、演算子が関与していない関係節であると主張した。さらに、英語縮約関係節の分析と Chomsky (2013, 2015) によるラベル付与の理論との整合性についても検討を行った。今後の検討課題とせざるを得ない問題も数多く存在するが、本研究が英語縮約関係節の研究にとどまらず、定形関係節や不定詞関係節も含む関係節全般、あるいは広く付加詞全般に関わる研究課題となり得ることも示唆した。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	英語縮約関係節の構造について： 対併合分析による視点	書 名	
雑誌名	中部英文学	論 文 名	
巻 号	第 37 号	出 版 社	
発行年月	2018 年 1 月予定	出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名	鈴木達也	著 者 名	
備 考	済・未(2018 年 1 月頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未 (年 月頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未 (年 月頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 4日

氏名	村杉恵子	所属	外国語学部英米学科
研究課題	言語の恣意性：生成文法理論の観点から探る擬態語擬声語の文法的特性		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>言語の音と意味は文法の介在によって結び付けられるが、一定の意味が一定の音をもたなければならないことはない。音と意味の関係は恣意的であり、恣意性は人間言語の特徴であるといわれている。ところが、擬態語と擬声語、あるいは手話は、音（や手話）と意味に一定の関連がある。</p> <p>本年度のパツへ研究奨励金によるプロジェクトでは、生成文法理論であまり扱われてこなかった分野の一つである擬態語・擬声語を題材として、音と意味との関係にある恣意性に関して、言語獲得と大人の文法の両面から分析することを目的として研究を進めた。擬態語・擬声語を、単に、記号としてではなく、名詞のみならず副詞や形容詞、動詞などの一定の統語範疇に結び立ち上げ能力が、人間には生得的に備わっている可能性を追求し、特に、幼児が母語にかかわらず、一定の擬態語・擬声語を、大人から学ぶこともなく、創造的に産出するのはなぜかについて理論的実証的に考察した。また、それらの考察をもとに、大人の文法と幼児の文法に共通する擬態語動詞 (Mimetic Verbs) の構造と仕組みについて具体的に以下の論考にまとめ、発表した。</p> <p>また、この研究に付随する問題として、なぜ幼児は具体的な刺激が少ないにも関わらず短期間に言語を獲得できるのかという「プラトンの問題」を扱ったキャロル・チョムスキー追悼論文集の書評を日本英語学会から依頼されたことから、これを機に、言語の恣意性にかかわる手話などの関連分野に関する最近の研究を学び、自らの研究と関連づけながら書評論文をまとめつつある。これについては今後の課題としたい。</p> <p>口頭発表：</p> <p>Keiko Murasugi (2016)“Mimetics as the argument-structure sprouts in child Japanese” NINJAL International Symposium 2016:Mimetics in Japanese and other languages in the world. 2016年12月17日。国立国語研究所。 http://pj.ninjal.ac.jp/mimetics/en/ 招聘</p> <p>Keiko Murasugi (2017)“The Structure of Mimetic Verbs” Oral Presentation at Aquilab, University of Connecticut. 2017年3月23日。University of Connecticut.</p> <p>論文ならびに書籍（次ページに掲載）：</p> <p>Keiko Murasugi. (2017) “Mimetics as the Japanese Root Infinitive Analogues.” <i>Grammar of Mimetics</i>. (Edited by Noriko Iwasaki, Peter Sells, and Kimi Akita.) Routledge. pp.129-147.</p> <p>Keiko Murasugi (2017)“The Structure of Mimetic Verbs: A Preliminary Study.” <i>Nanzan Linguistics</i> 12. Center for Linguistics. Nanzan University. pp. 47-59.</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	“The Structure of Mimetic Verbs: A Preliminary Study.” Center for Lingsuitics. Nanzan University.	書名	<i>Grammar of Mimetics.</i> (Edited by Noriko Iwasaki, Peter Sells, and Kimi Akita.)
雑誌名	<i>Nanzan Linguistics</i>	論文名	“Mimetics as the Japanese Root Infinitive Analogues.”
巻号	12.	出版社	Routledge
発行年月	2017年3月	出版年月	2017年1月
ページ	pp. 47-59.	ページ	pp.129-147.
著者名	Keiko Murasugi	著者名	Keiko Murasugi.
備考	済	備考	済
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年4月5日

氏名	山岸敬和	所属	国際教養学部
研究課題	日米の公共政策（主に医療政策）の歴史的発展の比較研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究は、平成 26 年度に採択された科研費基盤研究（C）「アメリカ医療制度改革の執行過程」に関連したものである。基盤研究（C）では、2010 年 3 月に成立した患者保護および医療費負担適正化法の執行過程を研究するが、本申請研究では、比較の視座を持ちながら、現在日本で進行している医療制度改革についてそれを取り巻く政治的争いを分析することを目的とする。</p> <p>本研究では、現在進行形の医療制度改革を理解するために皆保険体制が確立した 1940 年代と 1950 年代を対象として、医療制度改革をめぐって、日本医師会、労働組合、産業界、厚生労働省、財務省など利害関係者がどのような議論を展開し、どのような政治的戦略を採っているのかを分析した。</p> <p>今後は、研究対象期間を 1960 年代以降に時代に進めながら、本研究を進めて行く予定である。長期的には、日本医療制度の政治史について研究を本としてまとめる計画をしている。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Health Insurance Politics in the 1940s and 50s	書名	
雑誌名	Journal of International and Advanced Japanese Studies	論文名	
巻号	9	出版社	
発行年月	03/2016	出版年月	
ページ	193-204	ページ	
著者名	Takakazu Yamagishi	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 1日

氏 名	泉水 浩隆	所 属	外国語学部スペイン・ラテンアメリカ学科
研究課題	日本人スペイン語学習者のスペイン語イントネーションに関する実験音声学的研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>日本人スペイン語学習者が持つ「スペイン語の発音はやさしい」という印象に対し、筆者は常に疑問を感じ、これまで日本人スペイン語学習者の音声面に関して実験的に観察する研究を行ってきた (Sensui (2012)、泉水 (2014)、Sensui (2015) など)。今回の研究では、泉水 (2014) で課題の1つとして触れた、日本人スペイン語学習者がどのように無強勢語を発音するかについて実験的手法を用いて分析することを試みた。</p> <p>スペイン語を専攻言語として学ぶ日本人大学生 8 名およびスペイン語ネイティブスピーカー 2 名をインフォーマントとし、その録音音声に含まれる無強勢語が連続する部分を音声分析用のコンピュータソフトを用いて観察した。</p> <p>その結果、今回採取したネイティブスピーカーの音声においては、無強勢語・無強勢音節が連続する場合、全体としては平板な動きを示すのに対し、日本人スペイン語学習者のうち、留学経験者および長期滞在未経験者インフォーマントの場合、無強勢語が連なる部分では、最初の音節から徐々に下がっていく動きか、あるいは、2つ目の音節にかけて少し上昇した後で下がっていくというパターンがよく見られた。つまり、日本人スペイン語学習者は、無強勢語が連続し、低い音調で平板に発音しなければならないような環境が苦手なのではないかと推測される。一方、長期滞在経験のある日本人インフォーマントの場合、それ以外の 2 つのグループの発話と比較し、ネイティブスピーカーの発話に見られるパターンにより近い動きが多く見られた。この点から、学習期間やスペイン語圏での長期滞在経験、あるいは、どのくらいの年齢で長期滞在したことがあるかによって、低い音調で平板に発音し続けられるかどうか左右される可能性があるのではないだろうか。</p> <p>また、既に泉水 (2014) でも指摘されているのと同様に、ピッチ全体の変動幅が日本人スペイン語学習者は狭く、無強勢語・無強勢音節の連続部分から強勢音節へ移行する部分で同じような傾向が見られた。ネイティブスピーカーのインフォーマントの発話に見られるように、無強勢語・無強勢音節の連続する部分の平板な動きから強勢音節へ、そしてさらにその後の音節へと急激に上昇する動きが強勢の知覚に影響を与える可能性も考えられるので、このような部分でよりはっきりと上昇させるよう指導する必要があるだろう。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「日本人学習者によるスペイン語の無強勢語の発音」	書名	
雑誌名	『アカデミア』文学・語学編	論文名	
巻号	102号	出版社	
発行年月	2017年6月（予定）	出版年月	
ページ	未定	ページ	
著者名	泉水 浩隆	著者名	
備考	済・未（未）（2017年6月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 3月 31日

氏名	小林 純子	所属	外国語学部フランス学科
研究課題	知識の制度化過程に関する社会学的研究 -フランスにおける芸術文化教育の事例から-		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究の目的は、フランスにおける芸術文化教育 PEAC の特徴を明らかにし、知識がどのように制度化されるのかを明らかにすることであった。PEAC 導入の経緯と内容を把握するため、まずは 2013 年共和国の学校の再建に関する法律や通達、PEAC の一環と考えられる具体的措置の分析を行った。また子どもの芸術文化実践における PEAC の位置づけを明らかにするため、主に文化実践の社会学的業績の整理を行った。フランスの学校知識の社会学の業績は決して多いとは言えず、中でもイザベル・アルレが行なった調査とそれをもとに書かれた博士論文の検証は、本研究にとって大きな収穫となった。これらの分析から次のことが明らかになった。</p> <p>第一に、PEAC は学校教育の時間、学校以外の時間の双方において、子どもの芸術文化実践を促進しようとする構想で、学校以外の文化機関であるアソシエーション、自治体、芸術文化施設などが共同でプロジェクトを実施する。</p> <p>第二に、どのような知識が学校で教えられるべきとみなされているのかを明らかにする方法として、歴史的、社会的な文脈を考慮する学校知識の社会学の功績と方法論がある。しかしながらフランスでは学校知識の社会学はイギリスと比較してあまり取り上げられてこなかった。先行研究はフランスの芸術文化教育は 1960 年代までデッサンの技術を中心に行われていたこと、芸術文化教育の民主化という文脈において学校教育によって文化実践の平等を目指そうとした教育省と、学校教育以外の活動において文化実践を促進しようとした文化省の対立があったことなどを明らかにしている。</p> <p>第三に、PEAC の芸術文化実践は、情報技術文化の発展、ソーシャルメディアの発達や、子どもの社会学の功績によってますます問い直されている「正統な文化」と「大衆的な文化」の境界線の考察に貢献しうる調査の対象である。芸術文化実践は、社会的な格差をつくり出すもの、社会統合を可能にするものとしてのみならず、文化実践とその観衆との相互作用から新しい関係を築くものとして捉えることができる。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Les pratiques culturelles des enfants : quelles approches ?	書名	
雑誌名	南山大学ヨーロッパ研究センター報	論文名	
巻号	第23号	出版社	
発行年月	2017年3月31日	出版年月	
ページ	55-61	ページ	
著者名	Sumiko KOBAYASHI	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年3月30日

氏名	中村 督	所属	外国語学部
研究課題	第四共和政フランスにおけるジャーナリズムの史的研究－制度化の問題を中心に		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究の目的は第四共和政のフランスにおいてジャーナリズムがいかなる状況にあったのかを「制度」の観点から分析することにあった。とくに解放後にいかにして各種組織が設置され、またそれがいかなる関係にあったのかを整理することが重要な論点となった。</p> <p>上記研究に関する研究経過は以下の三点に要約することができる。一点目は先行研究の整理である。とくに文献・資料を収集し、本研究を主にフランス史の文脈に位置づける作業を行った。二点目は一次資料の閲覧および収集である。これについてはフランス国立図書館（パリ）にて遂行し、一定数の有益な資料を読解することができた。また、このフランス滞在中（10月31日～11月7日）に文献の収集も行なった。第三は研究会での発表である。9月23日に地域研究センター共同研究主催の研究会にて「キリスト教民主主義とジャーナリズム－『ウエスト・フランス』の組織化に着目して」というタイトルの下、発表を行なった。この発表を通じて参加者から様々な助言を受け取り、内容を改善するためにフランス国立図書館にて調査を遂行した次第である。</p> <p>研究結果としては主に共著のかたちで寄稿した。上記研究会での発表を元に「キリスト教民主主義とジャーナリズムに関する一考察－『ウエスト・フランス』の創刊過程に着目して」（『宗教と政治のインターフェイス』（仮））という論考を執筆した。この論考ではとくに解放期（第二次世界大戦直後）のパリと地方（レンヌ）の関係を中心に、ジャーナリズムにまつわる各種組織がいかなる過程を経て創設されたのかを考察した。また、結論として大戦間期から解放期、そして第四共和政に至るまで、フランスのジャーナリズムの世界には一貫してカトリック団体が重要なアクターであり続けたことを指摘した。この指摘は、これまで報告者が取り組んできた研究を大きく前進させるもので、今後、大きな進展が予想される、他方、本研究の課題であった情報省の把握については、資料の問題からしても難点が多く、調査方法の変更を検討させられる結果になった。</p> <p>以上が簡潔な報告であるが、今年度もパツへ研究奨励金 1-A-2 を受給し、研究を進展させることができた。感謝の念を記しておきたい。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	『宗教と政治のインターフェイスー現代政教関係の諸相』
雑誌名		論文名	「キリスト教民主主義とジャーナリズムー『ウエスト・フランス』の組織化に着目して」
巻号		出版社	行路社
発行年月		出版年月	2017年4月
ページ		ページ	109-132頁
著者名		著者名	中村督
備考	済・未（年月頃予定）	備考	未（2017年4月中旬頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年3月31日

氏名	真野倫平	所属	外国語学部
研究課題	20世紀初頭のヨーロッパ文化と狂気の表象		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>数年前よりフランスのベル・エポックの恐怖演劇であるグラン=ギニョル劇と周辺諸科学の関係について研究をしてきた。その中で特に重要性を有するのが精神医学の領域である。今年度は特に、20世紀初頭における精神医学の状況ならびに同時代における狂気の表象の研究を行った。具体的には、一方で、ジャネをはじめとする同時代の精神医学関連の文献を収集し、当時の精神医学理論について検討した。他方で、文学作品やジャーナリズムなどの分析を通じて、同時代のヨーロッパ社会において、狂気や狂人についてどのようなイメージが共有されていたのかを研究した。</p> <p>そのために、20世紀初頭の精神医学に関する図書ならびに資料、さらに同時代の文学作品ならびにジャーナリズム関連文献も併せて収集した。さらに同時代の表象芸術として、ポスター・プログラム等の古文書も入手した。</p> <p>研究成果としては、以上の調査・研究にもとづき、『南山大学ヨーロッパ研究センター報』に論文「アルベール・ロンドルと両大戦間のジャーナリズム」を執筆した。ロンドルは両大戦間にリポーターとして活躍したジャーナリストで、流刑地、軍隊刑務所、精神病院、ユダヤ人問題、女性売春等に関するルポルタージュを発表し、社会が抱える問題を鋭くえぐりだした。特に狂気の主題については、ロンドルはその著書『狂人たちのもとで』において、精神病院の非人間的な環境を激しく批判した。彼は1836年の精神医療法が、患者の病気からの解放ではなく、家族の患者からの解放を意図したものであると指摘し、患者に対する人道的かつ医学的な扱いを訴えた。</p> <p>本論文においては、ロンドルの生涯ならびに主要作品を紹介した後、ロンドルのジャーナリストとしての特徴を明らかにし、さらに、ロンドルの社会批判が当時の社会において大きな影響力を持ちえた理由について考察を行った。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	アルベール・ロンドルと両大戦間のジャーナリズム	書名	
雑誌名	南山大学ヨーロッパ研究センター報	論文名	
巻号	第23号	出版社	
発行年月	2017年3月	出版年月	
ページ	pp. 87-99	ページ	
著者名	真野倫平	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 7日

氏名	茂木 良治	所属	外国語学部フランス学科
研究課題	留学における異言語・異文化適応プロセスの解明		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究では、フランス留学する学習者が、フランスにおける生活、現地の語学学校での授業、フランス語話者との交流などを通して、どのように異言語・異文化環境に適応していくのか調査し、そのプロセスを解明し、モデルの構築を目指す。研究代表者が所属する外国語学部フランス学科が設置している「フランス語実習」というオルレアンでの短期語学研修プログラムを研究フィールドとした。この実習には、2015年度は25名の本学1年次生が参加した。これらの学生を分析対象とし、実習中に直面した文化的な気づきや驚きについて、日誌に記入してもらい、その日誌での記述について深めながら約1時間程度のインタビューを実施し、学生たちが留学中に直面した異文化接触による問題や、それをどのように乗り越えていったかなどを聞き取った。現在、録音したインタビューデータをテキストに書き起こし、分析手法として修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ M-GTA (木下, 2003) を採用し、分析を進めている最中である。</p> <p>また、2016年11月に金沢大学において実施された日本フランス語教育学会において、本研究のパイロットスタディーとなる前年度の調査をもとに、「学生はどのようにフランス短期留学を意味づけているのか」という題目で発表した。この研究発表は、2014年度の「フランス語実習」の参加者に対して実施したインタビューデータを分析したものである。この調査の結果から、参加者は留学を通して、フランス語実践、異文化理解の促進、交流の拡大、自己成長など多岐に渡った体験をしていることが分かった。</p> <p>今後は、このパイロットスタディーの結果を検討しつつ、2015年度で収集したデータを M-GTA を利用し、より異言語・異文化適応プロセスに特化した分析を行い、モデルの構築を試みる。このモデルからフランス語を専門とする学習者の異言語・異文化適応プロセスが解明され、今後、留学を希望する学習者に対して、このモデルに根ざした異文化学習トレーニングや学習活動の提供が可能にもなる。</p> <p>この研究成果について 2017年11月末締切の日本フランス語教育学会研究雑誌 <i>RJDF(Revue japonaise de didactique du français)</i> にフランス語での投稿を予定している。さらに、本研究のデータと過去実施してきた調査のインタビューデータを活用し、短期留学が長期留学に出発するという選択にどのような影響を与えるのかについても分析し、2017年10月締切の『アカデミア (文学・語学編)』に「長期留学への刺激としての短期留学プログラム」として投稿する予定である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「長期留学への刺激としての短期留学プログラム」（仮）	書 名	
雑誌名	アカデミア（語学・文学編）	論 文 名	
巻 号	103 号	出 版 社	
発行年月	2018 年 1 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名	茂木良治（単著）	著 者 名	
備 考	17 年 10 月に投稿予定 済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目	Quel sens les étudiants donnent-ils au stage linguistique en France ? （仮）	書 名	
雑誌名	Revue japonaise de didactique du français	論 文 名	
巻 号	13 号	出 版 社	
発行年月	2018 年 9 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名	茂木 良治（単著）	著 者 名	
備 考	17 年 11 月に投稿予定 済・未（18 年 9 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年3月29日

氏名	太田 達也	所属	外国語学部ドイツ学科
研究課題	作文フィードバックをめぐるドイツ語教師のビリーフの質的分析		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究の目的は、日本で活動しているドイツ語教師を対象に昨年度実施した「作文フィードバックについての意見」を問うアンケート結果のうち自由記述の回答を分析し、日本語母語話者とドイツ語母語話者のドイツ語教師のビリーフにどのような傾向や差異が見られるかを探ること、および教員養成に関する文献調査の結果とあわせて、ドイツ語教員養成・研修への教育上の示唆を導き出すことにある。主な結果は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 直接フィードバックのもたらす教育的効果に対する教員の評価は、間接フィードバックに対する教員の評価よりも明らかに低い。この傾向は、母語話者教員においても日本人教員においても共通して見られるものの、母語話者教員の方が、直接フィードバックよりも間接フィードバックをより高く評価し、また授業でも間接フィードバックの方をより多く実践している傾向が顕著に認められた。 ・ 日本語教員においても母語話者教員においても、学習者にリフレクションの機会を与えることが重要であるとの認識が比較的強く見られた。 ・ ピア・フィードバックについては、回答した日本人教員の約 5 分の 1、ドイツ語母語話者教員の約 3 分の 1 が非常に高く評価しており、授業でもこれを実践してうまくいっていると回答している。 ・ ピア・フィードバックおよび間接フィードバックに対し否定的な見解を記した教員は、これらのタイプのフィードバックを授業で実践しない理由として、特に「時間的問題」を挙げていた。 <p>そのほか、自由記述回答では、授業でふだん実践しているさまざまなフィードバック方法が挙げられた。</p> <p>なお、アンケートの 5 件法による回答項目では、日本人教員が母語話者教員よりも「文法規則を覚えること」を重要視する傾向が、また母語話者教員が日本人教員よりも「発見的学習」を重要視する傾向が認められたが、今回分析した自由回答においては、直接フィードバックに対する評価は、日本人教員・母語話者教員ともに低かった。このことから、教員の実際の行動はどの程度首尾一貫しているのか、また、自身のフィードバック行動に関する教員のリフレクションを促すにはどうしたらよいか、という点があたな研究課題として明らかになった。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	作文フィードバックをめぐるドイツ語教師のビリーフ	書名	
雑誌名	日本独文学会東海支部 2016 年度冬季研究発表会予稿（査読つき）	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2016 年 11 月	出版年月	
ページ	1	ページ	
著者名	太田達也	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年4月16日

氏名	松戸庸子	所属	外国語学部
研究課題	現代中国における“維権（権利擁護）”と“維穩（治安維持）”の力学に関する実証研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>I. 研究経過</p> <p>中国の維権（権利擁護）活動は大きく二種類ある。信訪（上訪）と呼ばれる陳情活動と集合行動（デモ、ストライキや暴動等）である。習近平政権下での“維持”政策の一環として政治的監視体制の強化（たとえば2014年成立の「反スパイ法」など）によって、中国現地でのヒアリングが困難さを増してきているため、①思想・言論上での異議申し立て研究の端緒として「狼牙山五壮士」名誉棄損裁判問題の研究に着手した。史資料の収集分析に加えて河北省の現地（狼牙山山頂及び記念館など）調査を実施した。このテーマに関しては年度末に論文を執筆した（2017年6月に公刊確定）。このほかに、②『論文集』の編集として中国側の論文（内蒙古大学の楊常宝講師）と日本側の論文（北海商科大学の佐藤千歳准教授）の論文の編集を行った。さらに、③次年度から上記の内蒙古大学教員との共同研究に備えて、内蒙古自治区のオルドス市（地方政府による大規模開発とその弊害としてのゴーストタウン化の事例）で予備調査を行った。</p> <p>II. 研究結果</p> <p>①執筆した論文の対象「狼牙山五壮士」とは、日中戦争期に発生した戦闘の事象が中国共産党政権下で神格化されたものである。習近平政権下で起こった、これらの英雄や英雄譚の信憑性に疑義を呈した言論人を巻き込んだ名誉棄損裁判は日本ではあまり知られていない。しかしながら、今年1月に中国の教育部（日本の文科省に相当）が全国の中学・高校へ通達を出し、抗日期間を8年から14年に延ばすという史実再定義を指示するなど、名誉棄損裁判と並行し習近平政権下の中国では日中関係史の再評価が着々と進んでいる。90年代以降の愛国主義教育、2015年9月3日の軍事パレードの主眼が抗日勝利にあったように、中国国民の対日感情への政策的操作が続いている。「狼牙山五壮士」問題から判明したのは、その背景にある、思想の保守化・左傾化と軍部の強権化という現実である。同時に一般の中国国民はこの名誉棄損裁判や、その背景にあった『炎黄春秋』社（共産党の開明派の牙城）乗っ取り事件などに関してはあまり関心が無く、政治的アパシーが広がっていることが分かった。②内蒙古大学の教員との共同研究のための信頼関係が構築できた。次年度からは、インテンシブ、イクステンシブな調査研究の実現に向けて始動できる体制ができた。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	英雄譚に正当性を付与するための 論理と情理 — ネット言論空間で展開された 「狼牙山五壮士」名誉棄損問題の 意味—	書 名	
雑誌名	南山大学紀要『アカデミア』 社会科学編	論 文 名	
巻 号	第 13 号	出 版 社	
発行年月	2017 年 6 月（予定）	出 版 年 月	
ペ ー ジ	未定（23 頁～42 頁）	ペ ー ジ	
著 者 名	松戸庸子	著 者 名	
備 考	済・未 (未) (2017 年 6 月頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未 (年 月頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未 (年 月頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年3月31日

氏名	森山 幹弘	所属	外国語学部アジア学科
研究課題	インドネシア独立後の政治社会の変容と文学		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究ではインドネシアが独立国家として歩んできた 70 年間を振り返り、経済的にも政治的にも安定を見せている今日のインドネシアにおいて、文化的生産物、特に文学作品の中に、政治と社会の変動がどのように表現されてきたかを明らかにすることを目的とした。インドネシア人作家やその他の文化生産の主体が、どのように文学作品をはじめとして芸術作品を生み出してきたかについて考察する際には、それぞれの民族集団の文化的伝統、宗教、特にイスラム、イデオロギーを踏まえて議論することが必要である。また、近年のインドネシアの文化的活動と成果がグローバルな潮流をどのように受け止めて展開しているか、地域の伝統がどのように変容し、想像の共同体としてインドネシアという国民国家がいかに生き残ろうとしているかを、その文化的生産活動の中を探ることも、本研究のもう一つの目的とした。本研究では 1965 年に発生した 9 月 30 日事件を題材とした文学作品の一つである『祖国の子』（1985 年出版）とそれを取り巻く 1998 年のスハルト体制崩壊以後の言説を取り上げ、歴史の再評価、新たな解釈、さらには事件によって粛清された側からの申立てなどについて分析、解釈を試みた。</p> <p>研究の経過は、ほぼ当初の計画に従って以下のように実施した。</p> <p>4 月から 7 月 既に収集した文献の検討と分析 8 月 オランダ、ライデン大学図書館において文献調査を実施 9 月 収集した文献の整理と分析 10 月 論文の執筆 11 月 論文の推敲と校正</p> <p>研究の実施状況は当初予定していたよりも順調に進み、11 月には論文の推敲が完成し、査読者の審査を通過し、出版社と契約書を取り交わすことができ、現在はその出版を待っているところである。</p> <p>本研究、特に『祖国の子』とこの作品にまつわる言説によって明らかになったのは、1965 年に発生した 9 月 30 日事件は単に政治的な事件であっただけでなく、文化の面においても戦後のインドネシアの文化活動における大きな転換的となったと言うことである。イデオロギーの対立はインドネシアの知識人を分断し、さらにイスラム勢力を巻き込んだ様々な対立を引き起こし、それが社会と文化の変容をもたらした。さらにはスハルト体制終焉後には、抑圧されていた「被害者」の側からの異議申し立てが行われ、この事件が今尚、インドネシア国民にとってのトラウマとなっていることが明らかになった。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	Traditions Redirecting the Present: Shards of Memory and Instances of Globalisation in Modern Indonesian Cultural Productions since Independence (1945-2015)
雑誌名		論文名	TEXTUAL PRODUCTION IN THE MIDST OF POLITICAL AND SOCIAL CHANGE IN INDONESIA: READINGS OF AJIP ROSIDI'S ANAK TANAH AIR
巻号		出版社	Cambridge University Press
発行年月		出版年月	印刷中
ページ		ページ	Chapter Six
著者名		著者名	Mikihiro Moriyama
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年4月13日

氏名	箆橋一輝	所属	社会倫理研究所
研究課題	地域共同体を基盤とした渇水への制度的適応に関する研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究では、讃岐平野を事例として、戦後日本の水資源開発が地域の水利用・管理に与えた影響を分析した。讃岐平野では地理的・気候的条件の制約から、古くからため池の築造が盛んに行われてきたが、それぞれのため池ごとに自律的な水利用・管理制度（走り水、線香水、番水等）が形成されてきた。讃岐平野では地域ごとに存在するため池を基本単位として農業用水が利用されているが、香川用水の建設事業を契機として、いくつかの農業水利慣行が衰退していった。こうした制度変化は、香川用水によって讃岐平野に運ばれる農業用水量（年間1億500m³）を考えると、水管理の労力を削減しつつ生産量を維持・増加させるといふ点できわめて合理的なものであったと考えることができる。讃岐平野ではため池そのものは消失することはなかったものの、香川用水の建設以降、渇水への効果的な適応を可能にする農業水利慣行が変容していった。香川用水の建設に伴って渇水はもう二度と起こらないだろうという予想の下で、「遠い水」である香川用水への依存度を高めた水利用・管理が行われるようになった。1994年の讃岐平野における異常渇水の経験から明らかとなったのは、渇水の中でも弾力的に配水管理を行うことを可能とするという意味での農業水利慣行の威力であった。いったんは衰退した農業水利慣行が1994年の異常渇水のとときに一時的に復活し、それが農家の人々の異常渇水への適応力を高める効果をもたらした。</p> <p>本研究を通じて、今後検討すべき課題も明らかとなった。第一に、農業水利慣行が有する道具的価値についてである。渇水という不測の事態に対応するための制度的基盤として、農業水利慣行を位置づけて評価していく必要がある。第二に、農業水利慣行の固有価値である。農業水利慣行は農家の人々の水利用・管理についての規範形成に影響を与えると考えられることから、讃岐平野の水文化やため池に対して抱いている価値認識の構造を理解する上でも重要な役割を果たす。第三に、レジリエンスという観点から、讃岐平野のため池の水利システムを評価する必要がある。</p> <p>こうした課題への取り組みを通じて、地域に根づいてきた伝統的な水利用・管理ルールが持つ現代的な意義について、今後さらに検討していく必要がある。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	水資源開発が地域の水利用・管理に与える影響－讃岐平野における香川用水事業を事例として	書名	
雑誌名	社会と倫理	論文名	
巻号	31号	出版社	
発行年月	2016年11月	出版年月	
ページ	165-179	ページ	
著者名	籠橋一輝	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年3月29日

氏名	蔡 大鵬	所属	経済学部経済学科
研究課題	ネガティブショック発生時の企業への最適な救済策に関する理論的分析		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究は、国内外におけるフィールド調査の結果に基づき、産業組織論、国際経済学、空間経済学などの分析手法を応用しながら、ネガティブショック発生時の最適な産業政策を明らかにすると共に、企業への最適な救済策について政策提言をまとめることを目的としている。</p> <p>研究期間中では、以下の研究項目を実施した。</p> <p>第1に、中国の長江デルタ地域(無錫)および台湾においてフィールド調査およびヒアリング調査を実施し、ネガティブショックが発生している地域の現状および問題点を把握した。</p> <p>第2に、現在までの産業組織論の知見を踏まえながら、これまでの研究成果(Cai and Li, 2013)を掘り下げ、ネガティブショックと産業政策との関係を明らかにすることができた。なお、関連研究成果を下記の論文にまとめることができた。</p> <p>(1) “North-South Negotiations on Emission Reductions: A Bargaining Approach (with Jie Li),” Online First Articles, <i>Environmental and Resource Economics</i>. 二酸化炭素排出量の削減に関する国際交渉といった外的ショックが企業行動に対して与える影響を明らかにした。</p> <p>(2) “Host Country’s FDI Regulations, Multinational Enterprises’ Entry Strategies, and Mixed Markets (with Yukio Karasawa-Ohtashiro),” Working Paper Series No. 58, Society of Economics, Nanzan University, 現在投稿中。海外直接投資受入国の規制変更といった外的ショックが企業行動に対して与える影響を明らかにした。</p> <p>(3) “Greenfield, Merger and Acquisition, or Export? Regulating the Entry of Multinational Enterprises to a Host-Country Market (with Yukio Karasawa-Ohtashiro),” Working Paper Series No. 60, Society of Economics, Nanzan University, 現在投稿中。海外直接投資受入国の規制変更および需要減少といった外的ショックが企業行動に対して与える影響を明らかにした。</p> <p>(4) “Mutual Recognition for Sale: International Bargaining over Product Standards (with Jan Guldager Jørgensen),” Discussion Papers on Business and Economics, No. 1/2017, Department of Business and Economics, Faculty of Business and Social Sciences, University of Southern Denmark, 現在投稿中。工業基準の設定に関する国際交渉といった外的ショックが企業行動に対して与える影響を明らかにした。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	“North-South Negotiations on Emission Reductions: A Bargaining Approach”	書名	
雑誌名	Environmental and Resource Economics	論文名	
巻号	Online First Articles	出版社	
発行年月	2017年3月	出版年月	
ページ		ページ	
著者名	Dapeng Cai and Jie Li	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度

パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 5月 23日

氏名	宮崎 浩伸	所属	経済学部
研究課題	医薬品産業における M&A が企業パフォーマンスに与える影響の実証研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究の目的は、近年、国際再編の動きが激しいわが国の医薬品産業を対象に、M&A がその後の企業パフォーマンスにどのような影響を与えたのかを明らかにすることである。</p> <p>以前の研究では、わが国の医薬品産業を対象に、M&A の株価反応による分析を行ったが、本研究では、財務データを用いた分析を行うことで、M&A 後の企業パフォーマンスの動向を分析した。</p> <p>研究経過としては、まず、海外を中心とした先行研究の詳細なサーベイであり、次に、分析で用いるデータベースの作成と計量分析を行ったが、データベースの作成は、最も時間がかかる作業であった。その後、英文での論文執筆を行い、海外の査読付き論文に投稿・受理されることで、学術的貢献を行う予定である (現在、海外ジャーナルに投稿中)。</p> <p>なお、本研究は、わが国の医薬品産業における M&A が R&D 投資に与える影響を分析した最初の研究であり、この点から、本研究の学術的先駆性は高いといえる。また、計量分析については、the propensity-score-matching difference-in-difference (PSM-DID) 法を用いたが、特に、この PSM 法は、主に、医学、生物学、心理学等での分析に利用されている手法であり、本研究で取り入れた点は、新規性という意味においても、本研究の大きな特徴といえ、これにより、同時性バイアスの問題にも対処でき、因果関係を明瞭にできたといえる。</p> <p>なお、本研究で得られた研究成果は、主に以下の 2 点である。</p> <p>第 1 に、R&D 投資集約度には有意な影響はみられないが、R&D 投資額には、5 年後にプラスで有意な結果が得られた。この結果から、長期的には、R&D 投資を増加させることが明らかになり、M&A との相乗効果が働いていることが示唆される。</p> <p>第 2 に、売上高営業利益率、売上高経常利益率共に 5 年後にはマイナスで有意な結果が得られた。この結果から、長期的には、M&A による財務パフォーマンスの悪化、あるいは M&A に伴う企業文化の軋轢が生じている可能性が示唆される。</p> <p>上記の研究成果は、今後、わが国の M&A に関する法的・制度的整備を進める上で、また、産業政策を考察していく上でも、数量分析に裏付けられた基礎資料となる社会的、政策的意義を持っている。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016年度南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	How M&As Impact Acquirers' R&D: Japanese Pharmaceutical Industry	書名	
雑誌名	International Review of Management and Business Research	論文名	
巻号	Vol.6 Issue.2	出版社	
発行年月	2017年6月	出版年月	
ページ	625-634	ページ	
著者名	HIRONOBU MIYAZAKI	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
 パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 6日

氏名	赤壁弘康	所属	経営学部
研究課題	魅力あるまちづくりと観光資源開発に向けた観光経済学の新アプローチ ファイナンスとマーケティングの手法を中心として—		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>これまでは、ネットワーク外部性の影響を受けているとみなされる観光消費が示す変動を供給サイドから考察して確率的理論モデルを構築してきたが、今年度は需要サイドの要因からも同様の変動モデルが導けることを明らかにした。この研究成果「不確実な経済変動に伴う観光消費の相対的変動モデル」を 2017 年 1 月 8 日開催の観光経済経営研究会（南山経営研究センターと共催のワークショップ）において発表し、当日頂戴したコメント内容を反映させた修正論文を『南山経営研究』第 30 巻 2/3 号で公刊した。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	不確実な経済変動に伴う観光消費の相対的変動モデル	書名	
雑誌名	南山経営研究	論文名	
巻号	第30巻第3号	出版社	
発行年月	2017年3月	出版年月	
ページ	117-131	ページ	
著者名	赤壁弘康（単著）	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目	流動化プロセスにおけるセンチメントの影響	書名	
雑誌名	南山経営研究	論文名	
巻号	第30巻第3号	出版社	
発行年月	2017年3月	出版年月	
ページ	161-204	ページ	
著者名	斎藤伽織、竹澤直哉、赤壁弘康	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 10日

氏名	上野 正樹	所属	経営学部 経営学科
研究課題	新興国プレミアムゾーン戦略の効果測定：インド消費者への製品購入意欲調査		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究課題は、新興国の都市（おもにインド）で、各国ルームエアコン企業の製品に対する購入意欲をアンケート調査するものである。新興国戦略として、最大消費市場である中間層の攻略（ボリュームゾーン戦略）が注目されてきた。これに対し筆者は、ボリュームゾーンではなく、富裕層と中間層上位をターゲットとする「プレミアムゾーン戦略」をとる日本企業を発見し、分析してきた。つぎに、この製品戦略のパフォーマンスを解明するため、各社製品（日本・韓国・インド・中国企業）に対する消費者の購入意欲を調査することにした。</p> <p>実際にアンケート調査は次のようにおこない、アンケートを回収してきた。</p> <ul style="list-style-type: none"> *インド（ムンバイ）2016年9月1日～8日 約60人からのアンケート回収 *インド（デリー）2017年3月1日～8日 約130人からのアンケート回収 *ベトナム（ホーチミン）2016年8月18日～28日 約200人からのアンケート回収 <p>上述のうちインド（ムンバイ）2016年9月のアンケート調査では、雨季と都市の祭典が重なり、アンケートの回収が約60人に留まった。しかし前年度実施（2016年3月）のアンケート調査150人からの回収と合わせ、インドでのアンケート回収は合計で340人を超えた。現在までに回収したアンケートのうち、<u>分析可能な有効サンプル数は328</u>となっている。ベトナムの場合は182である。</p> <p>推定母集団（1000万人～1億人）と誤差範囲（±5%）をもとにすると、インドでのアンケート調査は必要サンプル数に近づいている。現在の有効サンプル数の誤差範囲は±5.4%である。共分散構造分析をもとに、各社製品に対する購買意欲の分析を始めている。</p> <p>具体的な研究実績は次である。このうち論文投稿としたものは査読プロセスにある。</p> <p>学会発表（発表済み、印刷済み）</p> <ul style="list-style-type: none"> *2016年4月 国際ビジネス研究学会中部部会（愛知学院大学）、単独発表、査読なし *2016年10月 国際ビジネス研究学会全国大会（大阪商業大学）、単独発表、査読あり <p>論文投稿（査読中、印刷未定）</p> <ul style="list-style-type: none"> *『組織科学』への論文投稿（2017年2月に投稿） *『国際ビジネス研究』への論文投稿（2017年3月に投稿） 			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	新興国戦略の通説と実態：ボリュームゾーンからプレミアムゾーンの戦略へ	書 名	
雑誌名	国際ビジネス研究学会 第23回 全国大会 報告要旨	論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月	2016年10月22日	出 版 年 月	
ペ ー ジ	pp. 74-77	ペ ー ジ	
著 者 名	上野正樹	著 者 名	
備 考	済	備 考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年3月24日

氏名	川北眞紀子	所属	経営学部 経営学科
研究課題	芸術鑑賞者の特性とマーケティング対応		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>クラシックの音楽ホールにとって、顧客維持や新規顧客層の獲得は、欠かせない活動である。ところが、クラシック音楽は一般的に敷居が高いと思われているために、鑑賞者層は非常に限定的であり、鑑賞習慣を普及させていくことは簡単ではない。そこで、ホールのファンの人々がアンバサダー（広報大使）となり、その友人・知人たちへコンサートを案内していく仕組みを作った事例がある。宗次（むねつぐ）ホールの「クラシック音楽広め隊」というボランティア制度である。クラシックの良さをわかっている既存顧客に、同ホールの主催公演のチラシを配布してもらい、新規顧客へアプローチしようとするものである。</p> <p>2013年3月から始まった第1期には約350人が参加した。活動スタート翌月の4月から3ヶ月の間、ランチタイムコンサートの月間入場者数が過去最高を記録したという。その後3年半で1,590名のボランティアが参加し、彼らは周囲の人々へ広報活動を行ってきた。参加者と参加者に誘われた人々の中には、クラシック音楽への鑑賞習慣を持つようになり、宗次ホールのファンへと育っていく姿が見られた。</p> <p>本研究の目的は、このボランティア制度を通じた顧客のコミットメントの変化のメカニズムを明らかにするための理論モデルを提示することである。その方法は、本事例で得られた定性データを探索的に検討し、そこから理論枠組みを導き出すという方法をとる。</p> <p>最初に宗次ホールの事例を提示する。次に先行研究レビューとして、芸術マーケティング研究、コミットメント研究、ボランティア活動の動機研究を検討する。これらの概念をふまえ、インタビュー調査の結果とアンケートの自由記述欄の2つの定性データを探索的に分析する。先行研究と定性データをもとに、このボランティア制度がもたらす顧客のコミットメント変化についての理論を提示する。最後に実務へのインプリケーションとして、本理論の広報的意義も提示していく。</p> <p>ここで明らかになったのは、顧客コミットメントが役割内／役割外行動に影響するという因果関係だけでなく、その逆の因果関係が存在することであった。また、役割内／役割外行動の動機として、相手組織へのコミットメントだけでは説明できない、活動志向型動機が見られた。活動志向型動機やコミットメントが行動を誘発し、それらが再びコミットメントに影響するというフィードバックプロセスを示した概念モデルが示された。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	クラシック音楽専門ホールにおけるボランティア制度による顧客コミットメントを活用したマーケティングPR戦略：宗次（むねつぐ）ホールの事例研究	書名	
雑誌名	広報研究	論文名	
巻号	第21号	出版社	
発行年月	2017年3月	出版年月	
ページ	pp.122-139	ページ	
著者名	川北真紀子	著者名	
備考	未（2017年4月ごろ）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考		備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年3月15日

氏名	澤井実	所属	経営学部
研究課題	旧陸海軍技術者の軍民転換プロセス		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>戦前・戦時期に陸海軍(陸軍造兵廠、海軍工廠、陸軍技術本部、海軍航空技術廠、陸海軍航空本部など)に勤務した技術者(高等工業学校、大学、海軍機関学校などを卒業した者)たちは、戦後陸海軍の消滅とともに公的部門、民間部門に新たな職場を見つけることになるが、この技術者の軍民転換プロセスの全体像を検討することが本研究の目的である。</p> <p>本研究ではとくに艦艇建造を担った海軍造船官に注目した。彼らの多くは高等工業学校、帝国大学工学部造船工学科の出身者である、高等工業学校に関しては各学校の同窓会名簿、帝大卒業者については『学士会氏名録』などを使って技術者の就職先の変遷を追跡した。もちろん同窓会名簿には大きな資料的制約があるが、旧陸海軍技術者は戦後のある時期から「同窓会的」組織を結成し、横の連絡を密にする動きがあった。そうして結成された諸団体(海空技術懇談会など)が公表した名簿類も活用しつつ、各技術者の経歴の空白部分を埋めていった。</p> <p>まだまだ空白部分は残されているが、海軍造船官に関してはある程度の見通しを得ることができた。当然のことながら造船官から民間造船所への移籍がよく指摘されるが、その点は実証的にも確認できた。またこの民間造船所への移籍は戦後すぐに行われたというよりも、民間造船所の工事量が増加する 1950 年代以降に多くみられ、しかも造船官をより多く求めたのは、戦前・戦時中において学卒技術者が比較的少数であった企業であることも判明した。</p> <p>さらに造船官の進路として防衛庁、海上自衛隊、および米海軍横須賀基地艦船修理廠(SRF: Ship Repair Facility)にも注目する必要がある。戦前は海軍艦政本部で艦艇設計を行い、1号艦を海軍工廠で建造し、2号艦以降を民間造船所で建造するパターンが見られたが、戦後になると海軍艦政本部に勤務していた技術者の一部が経団連の支援の下で財団法人船舶設計協会を設立し、防衛庁技術研究本部での艦艇設計態勢が整備されるまでの間、その業務を代行していた点が注目される。元造船官は戦後の船舶輸出だけでなく、再軍備にも大きく貢献したのである。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	戦後における元造船官の活動に関する一考察	書名	
雑誌名	南山大学『アカデミア』社会科学編	論文名	
巻号	第13号	出版社	
発行年月	2017年6月予定	出版年月	
ページ	未定	ページ	
著者名	澤井実	著者名	
備考	済・㊟（2017年6月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年4月4日

氏名	中島裕喜	所属	経営学部
研究課題	戦後復興期の日本における研究開発と技術者—プランゲ文庫の活用—		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究で課題として掲げていた、国立国会図書館憲政資料室所蔵のプランゲ文庫を調査した結果、戦後復興期のエレクトロニクス産業についての雑誌類を複数見つけることができた。これらは全国の図書館でも同資料室以外では閲覧できないものであり、これまで判明していなかったエレクトロニクス企業の動向について知ることができた。具体的には『電機通信』『ラジオ電気新聞』『ラジオ産業』といった業界動向を記したものの、また東芝の小向工場の季刊誌である『こむかひ』などを閲覧した。</p> <p>復興期の研究開発や技術者の動向をさぐるという本研究の趣旨に沿って、同時期の意義を明らかにすべく、個別のケースとしてオーディオメーカー、パイオニアの創業者である松本望氏の来歴を調査した。同氏の自伝である『回顧と前進』を手がかりに、戦前の代表的なエレクトロニクス製品であるラジオ受信機の勃興機の様子や、ビジネスチャンスを見出して事業を開拓した同氏の人生を紐解くことによって、当該期の技術的な課題や中小企業の経営の実態の一端が明らかになった。</p> <p>松本氏は無教会派キリスト教伝道者である父の厳しい教育を受け、貧しい境遇の下で商売を学び、上述のようなラジオ産業の将来性に着目した。技術的な教育を受けていたわけではないが、ラジオ商や木工所などを転々とする中で培った技能や取引ネットワークを活かすことで、当時としては高級品とされていたダイナミックスピーカーの製品化に成功する。しかし戦争が始まることによって、幾たびも松本の事業は困難に直面した。そこでの経験が開いたのが、終戦後の復興期だったのである。パイオニアのスピーカーは全国的にも有名になり、松本は業界の寵児となる。また、当時スピーカーはオーディオ製品の部品という位置づけであり、大手企業の下請け的な存在であった。松本は他の部品メーカーと連携して部品生産業者の地位向上に努めたが、それが今日のような日本のエレクトロニクス産業における電子部品メーカーの高い国際競争力をもたらすことになった。1960年代以降、パイオニアはオーディオメーカーへと転換するが、同社は多くの人材を社外から取り入れ、高度成長期の日本企業に見られる雇用形態とは一線を画していた。こうした展開は戦後復興期の松本の動向と無縁ではなかったと思われる。</p> <p>以上の研究内容を論文としてまとめ、井奥成彦編著『時代を超えた経営者たち』に掲載した。以上。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	時代を超えた経営者たち
雑誌名		論文名	パイオニア株式会社創業者・松本望一徒手空拳からオーディオ産業のリーダーへ
巻号		出版社	日本経済評論社
発行年月		出版年月	2017年3月13日
ページ		ページ	336（分担執筆：207～231頁）
著者名		著者名	井奥成彦編著
備考	済・未（年月頃予定）	備考	未（2017年4月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2016年 4月 5日

氏名	松井 宗也	所属	経営学部 経営学科
研究課題	確率モデルに表れる分布の裾の挙動とモデルの予測に関する研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>1つ目の研究は多次元 GARCH モデルに関するものである。より正確には CCC-GARCH(1, 1) モデルという最も基本的な GARCH モデルである。この GARCH モデルに関して、裾確率の大きさが各次元で同一となる条件は確率的漸化式(再帰方程式)の理論から求まる。しかし、裾の厚さが異なる場合はその方法ではうまくいかず、丹念に場合分けをすることが重要となる。報告者は国外の研究者と、2次元 GARCH(1, 1)モデルで、各次元の裾の厚さが異なる条件を部分的に導出した。それを論文としてまとめ海外の雑誌に投稿した。しかし半年間の審査の後にリジェクトされた。そこでレフェリーの報告に従い論文を改訂し、再度投稿した。その間に同時並行して、多次元(2次元以上)の確率的漸化式において各次元で裾の厚さが異なるための条件を導出した。ここでは漸化式の係数が上三角行列であるという条件を仮定した。そして現在はその結果を論文としてまとめている。この結果は3次元以上の多次元 GARCH(1, 1)モデルに応用できるのみならず、別の多次元 GARCH モデル(様々な種類がある)にも応用が可能である。論文がまとまり次第その応用研究にも挑戦したい。</p> <p>2つ目の研究はポアソン・クラスターモデルにおける予測量の研究であった。ポアソン過程を混合ポアソン過程に拡張したモデルは、ポアソン過程が満たすべき独立増分性(確率過程の重ならない区間の増分が独立となること)を一般には持たない。これまでの研究では、この独立増分性をうまく使って予測量を構成していた。よって、その部分をうまく(理論的あるいは数値実験で)回避して予測量を作らなければならない。報告者は既に混合ポアソン分の性質をうまく使い予測量を求めていた。そして数値計算を行って論文を投稿していた。申請直前には指摘された箇所を直せば受理という、論文採択の決定がなされた。そこでまずこの論文の最終稿を準備した。その後は関連する別のテーマで研究した。具体的には、複合ポアソン分布と組合せ論のひとつの関係に注目し、その関係から両者に共通する性質を導いた。それは対数凸性や対数凹性に関する性質である。今後はこの関係を数理的にどう解釈できるか研究していきたい。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Log-convexity and the cycle index polynomials with relation to compound Poisson distributions	書名	
雑誌名	無限分解可能過程に関連する諸問題(21)	論文名	
巻号	共同研究レポート 385	出版社	
発行年月	2017年2月	出版年月	
ページ	88-93	ページ	
著者名	松井 宗也	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年4月10日

氏名	安田忍	所属	経営学部経営学科
研究課題	会計不正と会計基準の理論的妥当性及び監査上の課題に関する研究		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>上記研究課題の下、2016年度は、会計不正に関連して、次の2点を中心に研究を進めた。</p> <p>第1は、不正会計の事例として、東芝のバイ・セル取引を取り上げ、不正な会計処理に関して会計基準・会計規範をどのように解釈・適用したのかを検討し、会計基準のあり方と適用上の問題点を明らかにすることである。</p> <p>第2は、監査における職業的懐疑心がどのように発揮されていたのかを検討することである。</p> <p>研究結果は、「東芝のバイ・セル取引と監査」（『南山経営研究』第31巻第1.2合併号）として紀要論文にまとめた。そこでは、東芝で行われたパソコン事業における部品の有償支給取引（バイ・セル取引）の内容を、東芝の「調査報告書」に基づいて検討し、有償支給取引の会計上の問題を明らかにした。また、実施された監査を検討し、監査における職業的懐疑心のあり方について考察を行った。</p> <p>東芝の部品取引は、パソコンを外部に製造委託するにあたって、部品を有償支給し、その価格をマスキング価格にして調達価格との差額を製造原価のマイナスという方法で利益としていた。会計基準ではバイ・セル取引の転売益は製品に転嫁されて売上に繋がるまで未実現とする必要があるが、東芝では製造委託先が持つバイ・セル製品の在庫期間が短く、未実現損益の影響は小さいことを根拠に上記の処理を正当化した。</p> <p>このような状況の中で、監査人が行った監査は、監査人が不正の兆候を把握していたにもかかわらず、十分な監査を実施せず、また、東芝側の説明などに対して批判的な観点からの検証を十分に行うことなく受け入れていたことが明らかとなった。以上より、不正リスクの高い項目に係る監査手続に重要な不備が認められ、監査基準が求める職業的懐疑心が発揮されていなかった。したがって、職業的懐疑心の発揮について、監査人によって一般的にどのように認識されているのか、また、制度的にどのような水準が求められるのかを検討することが今後の課題となる。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	東芝のバイ・セル取引と監査	書名	
雑誌名	南山経営研究	論文名	
巻号	第31巻第1・2号	出版社	
発行年月	2016年10月	出版年月	
ページ	85-95ページ	ページ	
著者名	安田忍	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 3月 27日

氏名	竹澤 直哉	所属	経営学部 経営学科
研究課題	社会的責任ファンドや贅沢品消費に関する研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>持続可能な経済活動から作り出される価値を安定的な社会的責任ファンドから分析する過程で、投機的・短期的な資産変動要因をセンチメントとして捉えるアプローチを選択した。つまり、高いリスクプレミアムを生み出す短期的な資産価格要因を直接モデル化（エントロピーマーチンゲール測度評価）することで安定的な資金運用に関する含意を見出すことにした。これは安定的な投資を直接表しているファクターを見出すことよりも、投機的な投資を直接表すことができるセンチメントに注目する方が議論を展開しやすいと判断したためである。</p> <p>本研究は、データ収集およびセンチメントに関する文献を整理することから始め、数値シミュレーションや実際の社会的責任ファンドのモーメントデータを使用した結果を報告することができた。その成果は国内のワークショップでの発表や研究会の議論などを通して、内容を精緻化し、論文として仕上げた。</p> <p>最終成果物は 2 つあり、「流動化プロセクにおけるセンチメントの影響」では、金融不安（流動性危機など）やセンチメントに関する分析を行った。とくに、金融危機で起こりやすくなる取引者のデフォルトが起きた場合の清算処理に着目し、センチメントを導入した際、central counterparty が被る動的リスクを評価することに成功している。また、“The Impact of Project Size and Risk Aversion on Market Sentiment Under the Risk Sensitive Measure” においては、投資規模や投資家の性質などの要因を考慮したモデルを提唱し、これらの要因と安定運用の関係性について社会的責任ファンドのモーメントデータを用いた数値分析を行った。投資規模や投資家の性質は資産運用において重要なファクターであり、こうしたファクターとリスク回避度との関係を明らかにすることで、安定運用への方向性を探ることが期待される。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	The Impact of Project Size and Risk Aversion on Market Sentiment Under the Risk Sensitive Measure	書名	
雑誌名	Nanzan Management Review	論文名	
巻号	Volume 31 Number 3	出版社	
発行年月	2017年3月30日	出版年月	
ページ	231-241	ページ	
著者名	Naoya takezawa	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目	流動化プロセクにおけるセンチメントの影響	書名	
雑誌名	南山経営研究	論文名	
巻号	Volume 31 Number 3	出版社	
発行年月	2017年3月30日	出版年月	
ページ	161-204	ページ	
著者名	斎藤伽織、赤壁弘康、竹澤直哉	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

年 月 日

氏名	池田亮一	所属	ビジネス研究科
研究課題	Epstein-Zin 型効用関数を用いた利子率の期間構造のモデル化と実証研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究は米国において観察される名目・実質金利の期間構造を消費ベースモデルを用いて説明することを目的とした。</p> <p>いわゆる消費ベースの資産価格付けモデルを用いた利子率に関するモデルは数多くある。たとえば Campbell (1986) は消費ベースモデルの典型と言える、代表的投資家の選好が期待効用で消費の過程がある種の正規性を持つ場合において、実質イールドカーブが平均的に右下がりになることを示している。もっとも、同じ枠組みに外生的な物価変動を導入して名目金利を研究した Boudoukh (1993) の論文が示すように、インフレと消費のショックが負の相関をしているような場合においては、名目債券は実質債券と比べてよりリスクの高い資産となり、名目イールドカーブが実質イールドカーブと異なる形状を持つということはありえる。実際 Boudoukh (1993) はほぼフラットな名目イールドカーブを得ている。Piazzesi and Schneider (2006) はこの考えを一步進め、再帰的効用関数を持つ投資家と、状態空間モデル (state space representation) に従う消費・物価過程を仮定したモデルにおいて、データが示すように平均的に右上がりな名目イールドカーブを得ることに成功した。</p> <p>しかしながら、1997 年から 2005 年までの米国の物価連動債 TIPS のデータを見る限り、実質イールドカーブは名目イールドカーブ同様の右上がり傾向を平均的に示している。さらに、データにおいては名目イールドカーブと実質イールドカーブとはほぼ平行している。期待インフレ率がどの満期においても変わらないとすれば、このことは投資家が名目債券に対して要求するインフレリスク・プレミアムが満期に関わらずほぼ一定であることを表している。</p> <p>本研究の目的は、あくまで基本的な消費ベースモデルの枠組みにおいても、実質イールドカーブがデータ上観測されるように平均的に右上がりになることを示し、さらに合理的な投資家が名目債券に対して各満期でほぼ変わらないインフレリスク・プレミアムを要求する状況を説明できることを指摘することにある。その目的のため、本研究では Yogo (2006) が主に株式市場の分析に用いた 2 財消費ベースモデルを債券の分析に応用し、Weil (1989) や Bansal and Yaron (2004) のアプローチを拡張しながら、モデルの 1 次近似解を解析的に導出した。モデルの解析解を近似的に導出することで最尤法による推定の数値計算のパフォーマンスが向上すると共に、再帰的効用関数によって表現される投資家の選好関係が、消費のショックの持続性を価格に反映させることを明示的に示すことができた。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	“Term Structure and Risk Premium for Persistence in Durable Goods Consumption”	書名	
雑誌名	2016 Asian Meeting of the Econometric Society at Doshisha University	論文名	
巻号	(査読付き国際学会)	出版社	
発行年月	2016年8月	出版年月	
ページ		ページ	
著者名	Ryoichi Ikeda, Yoske Igarashi	著者名	
備考	済	備考	済・未(年月頃予定)
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未(年月頃予定)	備考	済・未(年月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未(年月頃予定)	備考	済・未(年月頃予定)

2016年度
 パッケージ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年2月15日

氏名	窪田 祐一	所属	ビジネス研究科
研究課題	イノベーションとマネジメント・コントロール・パッケージに関する研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究は、イノベーションを実現するうえで組織構造・経営理念・管理会計が果たす役割機能について考察し、そのメカニズムを明らかにすることを目的として実施した。先行研究では、戦略やイノベーションは複数のコントロールの組み合わせ (コントロール・パッケージ) により実現されることが指摘されている。しかし、そのパッケージは未だ十分に解明されていない。このようなイノベーションや戦略をコントロールする研究は、管理会計分野において、国際的な研究潮流の1つになっている。そこで本研究は、なかでも、現場からの戦略創発と自律的組織の戦略行動に焦点をあて、イノベーションの実現過程に存在するコントロール・パッケージについて議論を行った。</p> <p>本研究では、まず管理会計とイノベーションに関する先行研究をレビューした。先行研究は、探索型イノベーションあるいは活用型イノベーションを志向するコントロールや、それらを同時に追求する両利き組織のためのコントロール・パッケージの解明を試みている。このような研究動向のなかで、本研究は、構造的ではなく、状況的な両利き経営のためのコントロール・パッケージについて注目してケーススタディを行っている。</p> <p>このケースでは、自律的組織の戦略行動が観察され、現場から新製品につながる新たなアイデアが創出されるとともに、製造プロセスにおける継続的改善のようなイノベーションも生み出されている。加えて、この企業では、経営理念と管理会計システム (ミニ・プロフィットセンター) のコントロールを用いてイノベーションを促しており、状況にあわせて重視されるコントロールが異なっている。これらの結果から、イノベーションのタイプやその発生場所によって、重視されるコントロールが異なる可能性があることが明らかになった。さらに、人によってコントロールに対する認知が異なるため、従業員の認知を組織的文脈と合わせて解釈し、コントロール・パッケージとイノベーションの関係を検討していく必要があることが示唆された。</p> <p>本研究は単独のケーススタディによるものである。近年、コントロール・パッケージの解明においては、ファジィセット質的比較分析などが有用であると指摘されてきた。今後は、研究方法論の再検討も含め、コントロール・パッケージに関わる経験的研究を積み重ねていきたい。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	イノベーションを実現するマネジメント・コントロール	書 名	
雑誌名	会計	論 文 名	
巻 号	第 190 巻第 2 号	出 版 社	
発行年月	2016 年 8 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	169-180 頁	ペ ー ジ	
著 者 名	窪田祐一	著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年4月18日

氏 名	青木 清	所 属	法学部
研 究 課 題	国籍の取得・喪失原理に関する基礎的研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>わが国の国籍法は、血統主義を比較的純粋な形で採用しているが、国籍の取得については、単に生物学的な出自を示す血統を絶対視するものではなく、国籍取得の時点（出生時か出生後か）、法的な親子関係の存否、出生地の内外（例えば、国籍留保制度）などを考慮することによって、「わが国との密接な結び付き」が必要であると解されている。この点については、平成 20 年 6 月 4 日の最高裁判所大法廷判決（民集 62 卷 6 号 1367 頁）も、出生後の国籍取得について、日本国民との法律上の親子関係に加えて「わが国との密接な結び付き」の指標となる一定の要件を設けることには合理的な理由があると判示している。</p> <p>他方、父母両系主義を採用する国籍法が増加する中で、重国籍者の数は今後ますます増加するものと考えられる。わが国の国籍法は、重国籍の発生に対して厳格であり、国籍離脱制度のほかに、国籍選択および国籍留保の制度を設けるなど、重国籍の解消に関しても積極的な立法政策を採用している</p> <p>こうした中で、わが国との関わりが深いアジア諸国を対象に、国籍の取得・喪失の実態を調査、分析した。</p> <p>韓国は、かつてはわが国以上に厳格に重国籍発生に厳格な態度をとっていたが、今般、外国人の受け入れに柔軟に対応するとともに、重国籍についても、原則、これを容認する姿勢に転じたことがわかった。</p> <p>その一方、中国は、かなり厳格な姿勢を維持している。二重国籍を容認しないというルールを、国籍法上、定めている。</p> <p>日・中・韓の違いは、かなり興味深いところである。具体的な運用について、さらなる調査、研究が必要である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	二十一世紀民事法学の挑戦・加藤雅信先生古稀記念
雑誌名		論文名	日韓二重国籍と氏（姓）
巻号		出版社	信山社
発行年月		出版年月	2017年9月頃出版予定
ページ		ページ	全18頁
著者名		著者名	青木 清
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	○済・未（初校ゲラ提出）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2018年 4月 19日

氏名	岡田悦典	所属	法学部
研究課題	刑事訴訟における証拠保全機能の再構成		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>裁判員制度が刑事裁判に導入され、公判前整理手続の創設により、集中審理と公判準備活動が必要とされるようになった。「証拠保全」の手続に焦点を当てる目的は、公判準備のためには、司法制度における両当事者（訴追側と弁護側）の対等な証拠保全手続を促進させることによって、より新しい時代の刑事裁判の在り方に適合するのではないかと考えたからである。そこで、研究の端緒として、刑事訴訟法 179 条（被疑者・弁護人の証拠保全請求権）と刑事訴訟法 226 条乃至 228 条の裁判所への証人尋問請求の制度のこれまでの議論を検討した。その結果、前者については、あくまでも捜査の補完的役割を負うものとして制限的に理解され、また、証拠開示の利用を否定的に解する最高裁判例（最決平成 17・11・25 刑集 59・9・1831）の課題を分析した。また、後者についても、結論としては、捜査機関の捜査権の一手段であり、かつ、捜査機関の独自の強制捜査権の補完的役割を負うものであり、また、残された最後の手段でかつ判断権は司法にはない、という解釈で主に運用されているという課題を明らかにすることができた。しかし、現行刑事訴訟法の過程を見てみると、より積極的な証拠保全手段として、179 条については議論されていること、その過程で検察官にも同様の規定を設けるべきことが議論されてきたことを研究した。しかも、その後の文献を紐解くと、憲法 37 条 2 項との関係で、上記刑訴法規定はやや冷淡に分断して解釈されてきている。しかし、証拠保全手続の沿革として、アメリカの証言録取手続について紐解くと、検察官に権限を提供することには否定的な議論があり、かつ、被告人の証人審問権の保障との関係で、議論があることも研究することができ、証拠開示に関する検察官の証拠保全義務の判例展開もあることを研究することができた。この点は、わが国ではあまり意識されていないものの、上記刑訴法規定については、国外強制退去に関わる証拠保全として、あるいは接見交通における証拠保全機能として指摘されるようになり、やや異なる動きが見られることもわかってきた。こうしてみると、今のところ、わが国の証拠保全手続については、179 条と 226 乃至 228 条があるものの、積極的に位置づけられなかったが、これは、旧来の糾問的捜査観の影響があるものと考えられるようになった。この点は、従来あまり意識して論じられていないことから、今後の展開として「公判準備のための規定」として再構成し、179 条についてはその要件を緩和して解釈すべきこと、証拠開示の一手段としても利用可能であること、226 乃至 228 条については、一方的な捜査手段であるという解釈を改め、捜査機関の一手段であるとしてもあくまでも司法機関による手段であり、当事者公平の観点から弁護人の立会を保障すべきことなどを結論付けたい。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	刑事訴訟における証拠保全機能の再構成（仮題）	書名	
雑誌名	南山法学	論文名	
巻号	40 巻 3=4 号（予定）	出版社	
発行年月	2018 年 3 月 31 日（予定）	出版年月	
ページ	20 頁（予定）	ページ	
著者名	岡田悦典	著者名	
備考	済（未）（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年3月15日

氏名	小原 将照	所属	法学部
研究課題	双方未履行双務契約の破産手続上の取扱いに関する再検討—複合契約を中心に—		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本年度の研究においては、倒産手続における実体的権利関係の処遇について、様々な権利関係に分類して研究を進めた。その中でも、複合契約に関する処遇と留置権の処遇に関する研究を中心に、研究会などへの参加も含め、多くの研究者との意見交換を行った。多くの倒産法学者より貴重な意見を聴くことができ、また様々な研究報告を聞くことで、新しい倒産手続における実体的法律関係の処遇についても知見を得ることができた。</p> <p>研究成果としては、複合契約に関する成果は、1つ出しているが、留置権に関するものについては、いまだ成果として出せていなかった。そこで、複合契約に関する研究よりも、留置権に関する研究を優先させることとし、また、例年、韓南大学との学術交流会があり、本年度はその交流会における研究報告を担当することとなったため、そこでの研究報告で留置権の処遇について報告を行った。本学の教員だけでなく韓南大学の研究者からも意見を拝聴でき、極めて有意義なうちに交流会は終了した。</p> <p>以上を踏まえて、本年度の研究成果として、民事再生手続における留置権の処遇について考察することとし、「民事再生手続における留置権の取扱いに関する一考察」を執筆し、南山法学 40 巻 3・4 号に掲載する運びとなった。本稿は、現在初稿段階であり、近々刊行されることになる。</p> <p>この研究成果によって、これまでほとんど議論されることのなかった留置権の処遇について、活発な議論が進むことを期待すると同時に、その議論の一助を担えれば幸いと考える。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016年度南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	民事再生手続における留置権の取扱いに関する一考察	書名	
雑誌名	南山法学	論文名	
巻号	40巻3・4号	出版社	
発行年月	2017年	出版年月	
ページ	119-140頁	ページ	
著者名	小原 将照	著者名	
備考	済・未 (2017年4月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)

2016年度
 パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 11日

氏名	田中 実	所属	法学部法律学科
研究課題	シャルル・デュムラン『損害論』における中世法学批判の検討		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>シャルル・デュムラン『損害論』(Tractatus de interesse) につき、Thireau などの研究に見られるように、従来しばしば基本的な資料として用いられることが常であった、1995 年にも復刻された 1681 年パリ版『全集』所収のものに加え、1546 年初版を入手しテキストの比較照合を行った。その結果、前者には、すでに Kiefner によって指摘されていたように、ジャック・ルヴィニの作品がベルペルシュの名で出版されていた出版事情を非難する出版業者に不都合な箇所が削除されているのみならず、誤植と思われる箇所を多々発見することができた。このため、後者を底本として、テキスト及び援用ローマ法文すべての邦訳を始めた。さらに、日本のみならず、フランス及びドイツの、デュムラン『損害論』を比較的詳しく扱う二次文献を集め、重要な箇所を検討した。この間、京都及び東京のローマ法関連の研究会に参加し、主としてローマ大全や中世法学文献読解能力を高めた。また、2016 年 9 月にザールブリュッケン及びパリで開催された学会での参加(後者では報告)前に、ドイツのパッサウ大学法学部及びフランクフルト大学法学部にそれぞれ短期滞在し、法制史学者と交流し、テキストを扱うにあたっての貴重な助言を得た。これまで、損害賠償の範囲の基準を定めるにあたりフランス、イングランドひいては我が国に影響を与えた特別損害の予見可能性を論じる部分に焦点をあてて紹介されることが常であったデュムラン『損害論』研究に対し、その前提となる、ローマの皇帝勅法(C. 47. 7. 1)の解釈を巡る中世法学の錯綜・混迷した議論を批判的に検討し、彼が損害概念の鋭い分析に裏付けられた新たな解釈を展開する箇所を紹介する、拙稿「シャルル・デュムラン『損害論』(1546)における勅法(C. 47. 7. 1)解釈」を完成させた(ちなみに、掲載雑誌『南山法学』が退職記念号のため紙幅の制限を余儀なくされ、完成した論文を分割し、(一)(二・完)の体裁で公刊されることになった。このため前者ゲラ(初校原稿)を提出する。後者も原稿は印刷業者に提出済である)。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	シャルル・デュムラン『損害論』 (1546)における勅法 (C. 47. 7. 1) 解釈 (1)	書名	
雑誌名	南山法学	論文名	
巻号	40巻3/4合併号	出版社	
発行年月	2017年5月(発行予定)	出版年月	
ページ	197-239頁(初稿暫定頁)	ページ	
著者名	田中 実	著者名	
備考	済(初稿ゲラ)・未(年月頃予定)	備考	済・未(年月頃予定)
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未(年月頃予定)	備考	済・未(年月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未(年月頃予定)	備考	済・未(年月頃予定)

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 4日

氏名	都筑満雄	所属	法務研究科
研究課題	フランスの消費者信用法制の検討をふまえた、我が国の消費者信用法の考察		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究は、フランスの消費者信用法制、とりわけクレジットカード取引に関する規律を検討し、これを踏まえて我が国における立法論的考察を行うことを最終的な目的としている。そして、クレジットカードは最も重要なキャッシュレスの決済手段でもあり、本研究の目的であるフランスのクレジットカード取引を中心とする消費者信用法制の考察を深めるためには、その前提として、フランスのキャッシュレス決済法制について検討することが必要である。フランスのキャッシュレス決済法制は基本的にはEUの指令を具体化したものであり、我が国においてこの点のEU法は立法にあたり参照されてきた。フランス法の検討はこうした点からも意義を有している。そこで、本年度は、フランスのキャッシュレス決済法制について、その特質を明らかにすることを試み、電子マネーに関する法制度の検討を行った。フランスにおいてキャッシュレス決済のルールは通貨金融法典に収められており、その中心となるのが決済サービス提供者と利用者との間の権利義務関係に関する規定である。これらは、電子マネーを含む、支払カード（我が国におけるデビットカードやクレジットカードの翌月一回払に相当）や銀行送金などのキャッシュレス決済手段に共通に適用される規定と電子マネーにのみ適用される規定とからなり、フランスのキャッシュレス決済法制の特質を明らかにするには、電子マネーを軸に検討することが、適当であるからである。また、電子マネーは将来的に重要な決済手段である。</p> <p>そして、検討の結果、まずは、電子マネーを中心にフランスのキャッシュレス決済法制の特質を明らかにすることを試みる、「フランスの電子マネー法」との論文を名古屋大学法政論集 270 号の 217 頁から 232 頁に掲載した。</p> <p>続いて、本研究は最終的には我が国の法制度の考察を目的としており、その一環から、我が国の電子マネーのルールについて検討するものとして、判例研究も行っている。具体的には、サクラサイトという悪質な商法を行う会社を加盟店とした電子マネー発行会社の責任が問題となった初めての裁判例である、東京地裁平成 27 年 6 月 25 日判決および東京高裁平成 28 年 2 月 4 日の意義を明らかにするべく、検討を行っており、近々、雑誌、現代消費者法に掲載される予定である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	フランスの電子マネー法	書名	
雑誌名	名古屋大学法政論集	論文名	
巻号	270号	出版社	
発行年月	平成29年2月28日	出版年月	
ページ	217頁から232頁	ページ	
著者名	都筑満雄	著者名	
備考	○済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目	判例研究：サクラサイトの被害者がその代金の決済に利用した電子マネーの発行会社の損害賠償責任が否定された事例（東京地判平27・6・25）	書名	
雑誌名	現代消費者法	論文名	
巻号	3号	出版社	
発行年月	平成29年6月ごろ	出版年月	
ページ		ページ	
著者名	都筑満雄	著者名	
備考	済・○未（平成29年6月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年 4月 6日

氏名	洞澤 秀雄	所属	法学部
研究課題	行政争訟における効率化・役割分担—イギリスの司法審査制度改革の観点から		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>イギリスにおける近年の制度改革について、司法審査などの行政争訟を中心に、その効率化や裁判所と審判所等の役割分担について、研究を進めている。研究課題としては争訟制度を念頭に置いているが、それに限らず、自身の専門である都市・環境領域をも対象にして、手広く研究を継続している。それらは以下のような論文等の執筆、研究会での報告へとつながっている。</p> <p>現在までの研究成果としては、紀要に論文を一つ掲載する予定である（論文①）。これは、争訟制度を中心的に扱った論文ではないが、環境領域において喫緊の課題である海洋の空間計画について法的観点から検討したものである。環境領域での制度改革を扱ったものである。この論文については、イギリス行政法研究会（2017年1月）において報告を行った。</p> <p>研究課題に直結する論文としては、書籍の性質上、パッへの助成を受けているとの明記をすることができなかったものがある。榊原秀訓編著『イギリス行政訴訟の価値と実態』（日本評論社、2016年12月）における論文（洞澤秀雄「行政訴訟手続の変容—都市計画・環境領域を中心に—」）、及び翻訳（ヴァルダ・ボンディ／伊藤治彦・洞澤秀雄（訳）「2013年から2015年の連合王国の司法審査改革—改革の理論的根拠と含意—」）も、本助成の研究成果の一部である。イギリスの司法審査制度改革について、その効率化の観点から検討を行ったものである。</p> <p>また、洞澤秀雄「開発許可取消訴訟と狭義の訴えの利益—最高裁平成27年12月14日判決（民集69巻8号2404頁）を中心に—」南山法学40巻1号（2016年）は、日本の文脈での行政争訟を扱うものであり、本研究課題と関連する研究成果である。但し、助成後あまり時間の経っていない時期に脱稿したため、パッへの助成を受けている旨の記載をしなかった。</p> <p>現在、環境影響評価に係る行政争訟に関して、研究を進めている。イギリス行政法研究会（2017年1月）において簡易な報告を行ったが、まだ論文執筆には至っていない。</p> <p>今後は本研究成果を生かし、イギリスの行政争訟における検討から、日本の行政争訟制度に関して比較法研究を行ってゆく。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	海の管理における海洋空間計画 —イギリスの海洋計画制度を参照 して—	書 名	
雑誌名	南山法学	論 文 名	
巻 号	40 巻 3・4 号	出 版 社	
発行年月	2017 年 4 月（予定）	出 版 年 月	
ペ ー ジ	1-38 頁（予定）	ペ ー ジ	
著 者 名	洞澤秀雄	著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年1月26日

氏名	榊原秀訓	所属	法務研究科法務専攻
研究課題	行政裁量の文脈と審査密度		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>近年、裁判所は、比較的広い裁量の存在を肯定しつつ、場合によっては、審査密度が高い審査を行ってきた。そこで、本研究では、裁量の統制、特に裁判所による行政裁量の審査が厳しくなり、審査密度が向上していることにかかわって、人権や権利との関係で裁量統制のあり方を検討した。最初に、人権と行政裁量の関係に注目して、憲法研究者が両者の関係をどのように理解しているのかについて検討した。次に、人権にかかわっているという状況以外の要因や、必ずしも人権にかかわる事例とは言えないものの、審査密度を高めて権利利益の保障をしている事例を中心に、審査密度向上のために、人権やその他の事情がどのような役割を果たしているのかについて検討を行った。その際、行政規則の存在が一定の役割を果たしていることも少なくないと考えられ、行政規則にも注目して検討を行った。最後に、裁判所が審査密度を向上させた場合、行政庁としても審査の厳格度を向上させることを期待されると考えられることから、政治的にも注目度が高い辺野古新基地建設にかかわる公有水面埋立承認の職権取消にかかわる裁量の問題について、福岡高裁那覇地裁判決と最高裁判決の検討を行った。</p> <p>南山法学の論文は、具体的事例に即して裁量の統制のあり方を検討し、裁判所に意見書として提出したものである。つまり、金沢市庁舎前広場を利用した軍事パレードの中止を求める集会開催の許可申請に対して金沢市長によってなされた不許可処分に関して、金沢地裁判決は、金沢市が不許可処分の理由としてあげた「庁舎の耐震改修工事中においては、庁舎前広場を来庁者の仮設駐輪場、工事用の足場や資材置場として専用的に使用することから」、金沢市庁舎等管理規則5条14号に定める行為に該当し、庁舎等の管理上支障があるという主張は否定したものの、同じく不許可処分の理由としてあげた「特定の個人、団体等の主義主張や意見等に関し賛否を表明することとなる集会を開催することは、金沢市庁舎等管理規則第5条第12号に定める示威行為に該当する」という主張を支持して、金沢市庁舎前広場申請不許可処分を適法としたことから、その判断の妥当性を検討した。金沢市長によってなされた不許可処分は、法令の仕組みや行政裁量の審査密度を向上させた最高裁判例を適切に理解しておらず、金沢市長の主張する許可基準としての「市の事務・事業との同一性基準」は、基準としても、その運用においても妥当なものではないと考えられる。そして、金沢市長の違法な不許可処分を適法と判断する金沢地裁の判断も論理的に妥当性を欠くものと考えられることから、以上の点について、順番に詳細な検討を行った。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2015 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「金沢市庁舎前広場申請不許可処分 の違法性」	書 名	
雑誌名	南山法学	論 文 名	
巻 号	40 巻 2 号	出 版 社	
発行年月	2017 年 1 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	271 頁～288 頁	ペ ー ジ	
著 者 名	榊原秀訓	著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年 3月 31日

氏名	丸山雅夫	所属	法務研究科
研究課題	共犯論における論点と解釈		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>今回の申請は、研究課題に明らかにしたように、共犯論一般における個別・具体的な論点について、解釈論を展開する内容のものであった。第 1 に、条文上に明文規定を持たない連鎖的共犯（間接共犯、さらには再間接共犯等）の成否と範囲について、裁判例と学説を中心に検討し、南山法学誌上に成果を公表した。第 2 に、狭義の共犯の罪数について、通説・判例が例外なく依拠している共犯従属性説を前提とした場合に（共犯独立性説は、すでに過去の遺物であり、学説史的な意義しか認められていない）、正犯行為や正犯の罪数への従属の要否と程度・範囲について、裁判例の分析を中心として検討し、南山法学誌上に成果を公表した。第 3 に、共同正犯関係からの離脱ないしは共犯関係の解消、共犯の中止について検討を開始したが、問題の広がりや複雑さから、裁判例や文献を収集する段階にとどまっており、私見としての解釈論を展開するまでには至っていない。今後の検討課題として、継続的に研究をしていかざるを得ない(2017 年度の研究課題として申請する予定にしている)。</p> <p>以上のように、主としてふたつの個別論点について解釈論を展開し、私見を公表したことから、研究全体としては、当初に予定していた成果を十分に挙げ得たものと考えている。また、これらの論点との関係では、経費の支出状況も適切なものであった。他方、第 3 の個別論点については、私見としての解釈論を展開するまでには至っていないが、次年度には成果を公刊する予定である。また、その関係で、文献収集等に一定の経費を支出しているが、今回の申請につなげるものと考えている。</p> <p>今回の申請課題については、複数の成果を公表し得たことは肯定的に評価できると考える一方で、研究会等において他の研究者等との議論の場を持たなかったことは残念である。その主たる理由は、もっぱら、私が主催ないしは参加している研究会のテーマとの関係に求められる。しかし、多くの議論を経たうえでの成果報告が望ましいことは自明であり、今後は、そうした場を適切に設定していきたいと考えている。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	連鎖的共犯の可罰性と成立範囲	書名	
雑誌名	南山法学	論文名	
巻号	40巻1号	出版社	
発行年月	2016年9月	出版年月	
ページ	21-44頁	ページ	
著者名	丸山雅夫	著者名	
備考	済	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目	共犯と罪数	書名	
雑誌名	南山法学	論文名	
巻号	40巻2号	出版社	
発行年月	2017年1月	出版年月	
ページ	27-50頁	ページ	
著者名	丸山雅夫	著者名	
備考	済	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 3月 28日

氏 名	POTTER, David	所 属	総合政策専攻
研究課題	Research on the Development of a Strategic Official Development Assistance Policy in Japan		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>予定通り、2016 年度には、日本 ODA の戦略的発展について研究を行った。研究計画を二部に分けて、第一部では、ゼミの 3 年次生と ODA 大綱 (1992 年—2015 年) の内容分析を行い、その中で政府が各他校において「安全保障」、[人間の安全保障]、「戦略」等どのように捉えたか検討した。</p> <p>第二部では、2000 年以降日本 ODA 政策の安全保障化を踏まえての同政策と安全保障政策との連携強化そして援助配分への影響の研究に取り組んだ。</p> <p>同研究を「雑誌」の部①および下記の学会と特殊講義で発表した。</p> <p>“Strategy, Security, and Japan’s Foreign Aid to Southeast Asia.” Presentation at the Department of International Studies, de La Salle University, Manila, Philippines, August 8, 2016.</p> <p>“Japanese Official Development Assistance, Geopolitics, and ‘Connectivity’ in the Mekong Region.” Paper presented at the Asian University Network Forum for Advances in Research, Aichi Gakuin University, Nagoya, December 21-23, 2016.</p> <p>“Patterns of Japanese Development Assistance in Myanmar.” Paper presented at the Burma Studies Special Symposium, Nagoya University Center for Asian Legal Exchange, Nagoya, March 8-9, 2017.</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	日本の政府開発援助（ODA）大綱の比較研究	書名	Asian University Network Forum for Advances in Research Conference Proceedings
雑誌名	アカデミア社会科学編	論文名	Japanese Official Development Assistance, Geopolitics, and 'Connectivity' in the Mekong Region.
巻号	12号	出版社	愛知学院大学
発行年月	2017年1月	出版年月	2017年
ページ	127-138	ページ	
著者名	David M. Potter. Potter Seminar	著者名	David M. Potter
備考	済（2017年1月）	備考	未（2017年4月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4 月 5 日

氏 名	浅香 幸枝	所 属	外国語学部スペイン・ラテン アメリカ学科
研究課題	メキシコ日系社会の構造変化に関する研究：トランスナショナル・リレーションズの視点から		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究費により、メキシコでの現地調査が可能となり、研究課題に関してインタビューと現地取材によって詳細な研究をまとめた。</p> <p>本現地調査に加え、東京商工会議所の所蔵の図書を入手したことにより、世界に広がる日系社会の全貌が分かった。これらのデータを基に、研究成果物として、下記論文を出版社に入稿した（入稿原稿添付）。</p> <p>「メキシコにおける日系企業進出に伴う日系社会の変容の研究— 人の移動と異文化理解の視座から —」『アンドラーデ先生追悼論文集』上智大学、2017年5月近刊予定 書物以外では、国連のアカデミック・インパクトでの招待講演、日本移民学会冬季大会で報告した。</p> <p>先行研究により、現状を把握した後、外務省領事移住部の作成した『海外における邦人及び日系人団体の一覧表』および日系社会のリーダーへのインタビュー調査によって、日系企業進出に伴う日系社会の変容を人の移動と異文化理解の視点から考察した。</p> <p>上記データによって明らかになった事は、2000年代に入って日本語や日本文化の人气が地方へも拡がり、また近年の日系自動車産業の進出により日本語が就職するためのツールとなっていることである。</p> <p>「日系企業進出に伴い日系社会はどのように変容し、どのような協力が考えられるか」という問いに対して、本研究成果は、日系人に限らず、非日系のメキシコ人にとっても就職機会が拡がっており、日本語や日本文化の需要が生まれていることが確認できた。さらに、スペイン語と日本語が使えることは就職に有利な条件となり、この分野で日系人の活躍が期待できる。また、日系社会との協力により、メキシコの文化を理解しながら、摩擦を避け、さらに友好関係を築くことが可能だと分析する。</p> <p>日本とメキシコに限らず、ラテンアメリカ全域を見渡すとき、日本の中南米への開発政策は重要である。進出先の実態を良く知り、生活改善や向上に貢献していくことは対日イメージを向上させるだけでなく、実際の日本の生活改善や向上にも寄与する双方向性を持つものだと考察できる。なぜならば、人を直接介した交流は、その実生活を垣間見ることになるからである。また、憧れの源泉は実際の生活の豊かさや質にあるからだ。日本がメキシコやラテンアメリカから人生を楽しみ、家族を大切にする生き方を学ぶことも重要である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	『アンドラーデ先生追悼論文集』 上智大学
雑誌名		論文名	メキシコにおける日系企業進出 に伴う日系社会の変容の研究— 人の移動と異文化理解の視座か ら—
巻号		出版社	田中プリント
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・〇未（2017年 5月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年4月18日

氏名	石川良文	所属	総合政策学部
研究課題	人口推計における居住地選択モデルと人口変化がもたらす地域経済効果分析		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究では、我が国の人口減少の問題を鑑み、市町村等の小地域レベルの将来人口の推計方法を検討し、さらに人口の変動が消費需要の変化を通じて地域の経済に与える影響を分析した。人口推計においては、自然増減と社会増減をどのように推計するかが課題であるが、特に社会増減(地域の転出入)は、住民の居住地選択要因の複雑さから推計が困難となっている。本研究は、居住地選択において重要な要因を明らかにし、精度のよい居住地選択モデルを構築することを第一に目的としたが、これについては瀬戸市を事例に居住地選択の要因モデルを構築することができた。居住地選択モデルを構築するにあたっては、2015年に瀬戸市で行われた調査データを用い、これを元に順序プロビットモデルで実証的な分析を行った。この検討結果については、2016年10月に開催された日本地域学会で報告を行った。以上で検討した居住地選択モデルから社会増減の変動をコーホートモデルに組み込むことで小地域の人口推計方法を構築した。構築した推計方法では、居住地選択の要因を政策変数としており、政策の有無による人口シミュレーションが可能となるよう検討した。</p> <p>このモデルに基づく人口推計結果を元に、人口の変動が地域の消費需要に与える影響を分析するモデルを、過去の研究成果(石川(2004))をベースとして検討した、このモデルでは、所得—消費の内生化モデルとなっているため、消費地の選択モデルが組み込まれていればより精度の高いモデルとなるが、本研究では消費地選択は過去の実績のままと仮定した。経済影響を分析するモデルは、産業連関モデルであり、これを小地域、小地域を除く大地域、全国の3地域に区分しており、着目している当該地域の人口変化が地域外にどのように影響するかを分析することができるようになっている。</p> <p>なお、これらの研究成果の一部は、既述したように2016年10月に日本地域学会で報告を行ったが、その改良モデルを2017年6月に開催される土木学会土木計画学発表会で報告することとしている、また、経済影響分析については、環太平洋産業連関分析学会の和文誌「産業連関」に投稿している。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	人口減少による地域経済影響の分析	書名	
雑誌名	産業連関	論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (未) (2017年10月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4 月 11日

氏名	梁 曉虹	所属	総合政策学部
研究課題	兼意著「四抄」研究（其の二）：漢字研究の角度から日本で用いられた俗字考察		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>2014年から開始した本研究は、私の十数年来の研究課題「日本佛経音義研究」と関連し、重要な構成部分である。研究実績概要は、以下の通りである。</p> <p>1、研究経過</p> <p>① <u>国内資料搜集</u>：昨年行った資料調査に基づいて、本大図書館の申請を経て、杏雨書屋（大阪）から贈られた兼意著「四抄」の複写本や関連ある日本古代の香要抄書等を入手した。常時使用する資料のため、至便である。図書館の協力なしには不可能であった。</p> <p>② <u>海外資料調査及び学者訪問交流</u>：海外資料は、主に漢字俗字資料収集。2016年5月12日から5月14日まで台湾台中市、国立台中教育大学にて中国文字学会主催の「第27回中国文字学国際学術研討会」に参加、逢甲大学の宋建華教授とは、日本写本俗字資料と中国碑刻、敦煌俗字資料について学術交流、資料交換をした。2016年8月18日乃至20日、河北大学近代漢字研究第一屆学術年会に参加、また該大学漢字研究中心訪問し、近代漢字俗字資料を調査、関連者と学術交流。</p> <p>2、研究結果</p> <p>(1) <u>学術會議参加及び論文発表</u>：①2016年5月12日から5月14日まで台湾台中市、国立台中教育大学で中国文字学会主催「第27回中国文字学国際学術研討会」に参加、私は、「日本天理本『大般若経音義』漢字研究」と題する論文を発表した。②2016年10月28日から30日まで中国人民大学文学院主催の「第十回漢文仏典語言学国際学術研討会」に参加。私は、「信瑞『浄土三部経音義集』的語料価値研究—以日本資料為例—」と題する論文を大会にて発表した。③2016年10月31日から11月1日まで北京語言大学漢語史与古文献研究所主催の「第二回文献語言学国際論壇」に参加。私は、「日僧 湛奕著『浄土論注音釈』考論」と題する論文を大会にて発表した。④2016年11月4日から7日まで、杭州にある浙江大学文学院/仏教文化研究センター主催の「第四回仏教文献与文学国際学術研討会」に参加。私は「浄土三経音義在日本—以乘恩撰『浄土三部経音義』為中心」と題する論文を大会にて発表した。</p> <p>(2) <u>論文公刊</u>：①「天理本『大般若経音義』漢字研究」、『第二十七回中国文字学国際学術研討会論文集』（2016年5月）。②「從無窮会本『大般若経音義』“先德非之”考察古代日僧的漢字觀」、『漢語歴史語言学的伝承与発展—張永言先生從教六十五周年記念文集』（復旦大学出版社、2016年5月）③「亮阿闍梨兼意『寶要抄』与古籍整理研究—以佛典為中心」、『国際中国文学研究叢刊』第四集（上海古籍出版社、2016年9月）④「無窮会本『大般若経音義』与異體字研究」、『漢語研究的新貌—方言·語法与文献』（香港中文大学中国文化研究所・吳多泰中国語文研究センター、2016年10月）⑤「高山寺藏古写本『華嚴伝音義』論考」、韓国交通大学東亜研究所・上海師範大学人文与伝播学院『東亜文献研究』18号（2016年12月）。また、論文数篇の投稿もあり、出版を期す。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「高山寺蔵古写本『華嚴伝音義』論考」	書名	『第二十七回中国文字学国際学術研究会論文集』
雑誌名	『東亜文献研究』（韓国交通大学東亜研究所・上海師範大学人文与伝播学院）	論文名	「天理本『大般若経音義』漢字研究」
巻号	18号	出版社	国立台中教育大学、中国文字学会
発行年月	2016年12月	出版年月	2016年5月
ページ	pp19-32	ページ	pp83-10
著者名	梁 曉虹	著者名	梁 曉虹
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目	「日僧湛奕著『浄土論注音釈』考論」	書名	『漢語研究の新貌- 方言・語法と文献』
雑誌名	『文献語言学』	論文名	「無窮会本『大般若経音義』と異體字研究」
巻号	4号	出版社	香港中文大学中国文化研究所・吳多泰中国語文研究センター
発行年月	2017年3月	出版年月	2016年10月
ページ	Pp49-62	ページ	pp105-118
著者名		著者名	梁 曉虹
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目	「日本早期異体字研究- 以無窮会本『大般若経音義』為例」	書名	『近代漢字研究』
雑誌名	中国文字学報	論文名	「古代日僧所撰三種『大般若経音義』異體字研究」
巻号	第七号	出版社	商務印書館
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（2017年月頃予定）	備考	済・未（2017年月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 4日

氏名	松戸武彦	所属	総合政策学部
研究課題	ポスト・モダン社会の統治スタイルと市民社会の形成		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>ポスト・モダンの社会の顕現化が、ポピュリズム的社会状況と密接に関連する態様はここ数年で急速に明らかになりつつあった。この点でポスト・モダンに関する議論を現実の中で考える論考は、日本においてもここ数年、とりわけ 2016 年に入って実質的に活発になった。そこで、今年度の研究プロセスでは、主にこうした新聞、雑誌文献を確認し、どのような問題が問題化されてきたかをサーベイした</p> <p>ここ数年、世界全体に不寛容という「空気」が蔓延しているように見える。こうした不寛容を最も可視化させる出来事の一つが、EU を取り巻く移民問題である。この問題は、EU 全体として殺到する移民に対してどのように対処するのかという問題として表面化しているだけではない。むしろ、何より EU を構成するそれぞれの国民国家内に台頭する、ナショナリズム(民族主義)に、そしてそれは時にはポピュリズムとどのように向き合うのかという問題と重層的に関連している。</p> <p>本研究は、こうした共生への志向が排除へと反転するメカニズム、言い換えれば、現代社会全体に蔓延する不寛容を、ポスト・モダンの社会が本質的にどのような社会か、あるいはどのような事態が進行する社会として理解しうるのかという探究と結び付けて考えようとしたものであった。</p> <p>上述したように、こうした傾向は、特にここ数年で社会的にもはっきり形を現し始めたものである。イギリスの EU 離脱はもとより、EU 内諸国におけるポピュリズム政党の台頭、トランプアメリカ大統領の誕生と言った現象は、根底にポスト・モダンの社会とポピュリズムとの関係性が横たわっていると考えられるものであった。</p> <p>本年度の研究では、とりわけ、EU 内における文化的多元主義から多文化主義への移行の中で、異なる文化的背景を持つ人々の共生プログラムの進展と考えられてきたものが、その論理ゆえに反転し、排除の論理を準備しているのではないかという問題性を検討してきた。ポスト・モダン近代の行き着く先という色合いを強く持つが、移民排除志向もこうした傾向の一部として理解可能だと考えられる。とりわけ、フランス国内のテロとテロ実行犯の関係は、実行犯の行動が、フランス社会が持つ近代への志向をむしろ内面化した移民二世がその中心を担っているという点で、「統合に強くコミットする人々の排除」というきわめて厄介な問題を現代社会に提起しているということがはっきりした。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	ポスト・モダンと不寛容社会の台頭	書名	
雑誌名	南山大学紀要『アカデミア 社会科学編』	論文名	
巻号	第13号	出版社	
発行年月	2017年6月	出版年月	
ページ		ページ	
著者名	松戸武彦	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年 4月 10日

氏名	水落 正明	所属	総合政策学部総合政策学科
研究課題	夫婦の家事の相互関係に関する研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究では、お茶の水女子大学 COE (ジェンダー研究のフロンティア) が、中国・北京と韓国・ソウルで実施したパネル調査 (2003～2007 年) を用いて、夫婦の家事時間の相互関係についてデータ分析を行った。ワーク・ライフ・バランス、女性活躍といった近年の政策目的を実現する上で、夫婦における家事分担は無視することのできない重要なファクターであり、東アジアにおける国際比較の観点から研究を行った。</p> <p>研究経過としては、研究採択後から 2016 年 9 月にかけて、パネルデータの入手と構築、さらに記述的分析を行い、10 月から本格的なパネル推定を始めた。その後、12 月にはパネル調査の実施主体であるお茶の水女子大学の研究会で、北京パネルについての分析成果の報告を行い、得られた結果についてディスカッションを行った。さらに 2017 年 2 月には、南山大学に、この分野の関連研究者 2 名を招いて研究会を開催し、あらためて北京パネルについての分析成果の報告し、分析の方向性について議論した。翌 3 月には、立命館大学の研究会に参加し、ソウルパネルを使った分析成果について報告し、国際比較の方法について討議した。</p> <p>これらの研究活動の成果としては、現時点で以下のような知見を得ている。第一に、出産によって北京、ソウルの双方において、夫婦とも有意に家事時間が増える。第二に、出産によって北京、ソウルとも、夫よりも妻のほうが家事時間が増える。第三に、働き方における男女平等度が高いと言われている北京において、出産による夫と比べた妻の家事時間の増加幅が、ソウルよりも大きい。これは、これまでの研究蓄積とは異なる結果となっており、さらなる分析の必要があることが明らかになった。現在、日本のパネルデータを使った分析を行っており、その結果から東アジアの三カ国比較を行い、日本の夫婦の家事分担に関する新しい知見を得る予定である。</p> <p>こうした成果について、まだ論文の形になっていないが、2017 年 6 月に仙台で開催される日本人口学会の国際セッションにおいて発表予定である。その後、英語書籍の一章として執筆する計画となっている。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年1月31日

氏名	三輪 まどか	所属	総合政策学部
研究課題	高齢者の意思能力の程度に応じた権利擁護と福祉専門職・家族等の「かかわり」		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>先に申請していた科研費 (課題番号 26870689) において実施した専門職後見人に対するアンケート調査では、現在、後見監督を担う家庭裁判所が果たすべき役割を明確にすることや、家庭裁判所に対する期待が高かった。そこで、本研究では、上記アンケート調査にご協力いただいた、特に身上監護を担う社会福祉士 4 名にインタビューを行い、どのような点について、家庭裁判所に期待するのか、あるいは、家庭裁判所に対する不満を伺った。インタビュー中挙げられた内容としては、特に身上監護について評価が低い点、また、報酬額の算定が不明である点、家庭裁判所の役割としては、何かあったときの「相談先」であり、具体的な監督は難しい点、一般の人にとっては、印籠のような役割 (家庭裁判所の名前を出せば、逆らえない。逆に言えば、それだけ効果が高い) を果たしている点などが挙げられた。なお、家庭裁判所が果たす役割については、研究成果 (雑誌) ①で公開予定である。</p> <p>それらを踏まえた上で、家庭裁判所に対するアンケート調査を実施しようとしたところ、業務の負担上、また責任の所在上、回答は難しいのではないかという意見が、上記インタビュー調査より聞かれた。今までアンケート項目を検討し、作成していたが、途中でやめることとなり、家庭裁判所 50 箇所に対する開示請求を行うこととした。開示請求している内容は、①後見人および後見監督人に対して、就任時、就任後に配布される文書、②成年後見人等の報酬額の基準となる文書 (支部ごとに基準が異なれば支部ごとの文書)、③成年後見人等の財産管理および身上監護の内容に関する具体的な指示文書の雛形、などである。</p> <p>内容を吟味していたため、開示請求自体は 2017 年 2 月に入って行うこととなってしまった。これから、開示されたデータを元に (あるいは、全て非開示になる可能性もある)、さらなる研究成果をあげたいと考えている。なお、この研究成果については、パンフレット等で公開するとともに、現在企画が進行している図書①に反映させたいと考えている。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	後見監督責任に関する一考察- 後見監督に関する 3 つの裁判例を素材として-	書 名	契約から紐解く介護と後見
雑誌名	アカデミア社会科学編	論文名	
巻 号	第 12 号	出 版 社	信山社
発行年月	2017 年 1 月予定	出 版 年 月	2018 年予定
ペ ー ジ	未定	ペ ー ジ	
著 者 名	三輪まどか	著 者 名	三輪まどか
備 考	済・⊕ (2017 年 2 月頃予定)	備 考	済・⊕ (2018 年 12 月頃予定)
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論文名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未 (年 月頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論文名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未 (年 月頃予定)	備 考	済・未 (年 月頃予定)

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 18日

氏 名	森山 花鈴	所 属	法学部・社会倫理研究所 (2016年度申請時点は総合政策学部)
研究課題	自殺対策に係るプラットフォーム構築に関する政策学的研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究は、全国で展開されている自殺対策関連施策について調査を行い、①ウェブサイトを活用した自殺対策に関する政策的・社会的課題を明らかにするとともに、実際に要望されているウェブ上の自殺対策に係るプラットフォームを開発・構築する実践的研究である。さらに、並行して②自殺対策関係者同士の関係者ネットワークを構築し、対面上のプラットフォームの構築をも行うことを目的としている。</p> <p>具体的には、全国で実施されている自殺対策関連施策の調査を中心に行い、定期的に自殺対策研究関係者との意見交換会を実施した。また、自殺対策関連ウェブサイトの構築および上記を含む研究情報共有のためのページを作成するとともに、自殺対策に関する情報を提供するウェブサイトを作成した。</p> <p>①の自殺対策に関する政策的・社会的課題を明らかにするという目的については、ウェブサイトに特化しての調査はできなかったものの、広く自殺対策に関する政策について調査を行うことができ、そのうえでウェブ上の自殺対策（特に自死遺族支援）に係るプラットフォームを開発・構築することができた。また、②の対面上のプラットフォームについては、2016年10月以降、合計7回実施することができている。(実施日:10月14日(金)、11月23日(水)、12月7日(水)18:00～2017年1月6日(金)、1月27日(金)、2月21日(火)、3月17日(金))</p> <p>その中で、自殺対策に関する政策的・社会的課題について、研究成果「雑誌」の部①および研究成果「雑誌」の部②（特に子どもの自殺対策）で明らかにしている。</p> <p>これまで、自殺対策関連施策の把握自体や、自殺対策関係者・自死遺族自身が必要としている情報サイトに関する研究はほとんど行われてこなかった。そのため、支援ウェブサイトの構築、対面上プラットフォームの構築自体が独自の試みである。</p> <p>引き続き、来年度以降も自殺対策およびいのちの支援全般に関する研究を実施していきたいと考えている。</p> <p>なお、この研究は、広くネットワークを構築するだけでなく、全国に存在する自殺対策関係者・災害支援関係者・遺族、病気支援関係者・遺族などに対しても社会的・心理的ケアツール開発の促進に寄与する研究となると考える。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	緒言 自殺対策の現状 —「自殺対策基本法」の成立から 10 年	書 名	
雑誌名	社会と倫理	論 文 名	
巻 号	第 31 号	出 版 社	
発行年月	2016 年 11 月 30 日	出 版 年 月	
ペ ー ジ	pp. 101-106	ペ ー ジ	
著 者 名	森山 花鈴	著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目	自殺に関する概況と子どもの自殺 をめぐって—希死念慮のある子ど もの小児神経科外来での対応の経 験を含めて	書 名	
雑誌名	社会と倫理	論 文 名	
巻 号	第 31 号	出 版 社	
発行年月	2016 年 11 月 30 日	出 版 年 月	
ペ ー ジ	pp. 133-146	ペ ー ジ	
著 者 名	加我 牧子・森山 花鈴	著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 5日

氏名	山田哲也	所属	総合政策学科
研究課題	国際機構論の再構築：D. ミトラニーの機能主義を中心に		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>昨年度も引き続き、ミトラニー関連の一次資料および関連文献の収集・分析を行った。他方、研究成果としては、別記の通り、国際法学者ブライアリーの国際組織認識を取り上げる論稿を上梓した。その経緯は以下の通りである。</p> <p>①ミトラニーの史料の中に、ブライアリーの著作の抜き書きがあり、その現物を入手・分析する必要が生じたこと。</p> <p>②ミトラニーとブライアリーは、戦間期に英王立国際問題研究所の調査部門でともに勤務した経緯もあり、さらなるミトラニー理解のためにはブライアリーについても調査すべきであると考えに至ったこと。</p> <p>③これまでのところ、ミトラニーとブライアリーの直接のやり取り（書簡等）は発見されていないところ、とりあえず、公刊されているブライアリーの書物を通じて、ブライアリー自身の国際組織認識を検討することにも一定の意義があると考えたこと。</p> <p>以上の結果、別記論文にも記した通り、ブライアリーの国際組織認識も、ミトラニー同様の機能主義的発想がみられ、1940年代において機能主義が少なくともイギリス国内での主流的な国際組織認識であると考えられることが判明した。</p> <p>2017年度については、時代的な射程を広げ、機能主義の生みの親とされるレナード・ウルフの分析、さらには、今日のグローバル・ガバナンス論との架橋を試みることにしたい。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	「戦間期国際法学における国際組織の位置づけ—J.L. Brierly を題材として」、査読なし	書名	
雑誌名	『法政研究（九州大学）』	論文名	
巻号	第83巻3号	出版社	
発行年月	2016年12月	出版年月	
ページ	351-372頁	ページ	
著者名	山田哲也	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2016年03月31日

氏名	レジナルド・アルヴァ	所属	理工学部
研究課題	The Scope of Evangelization in the Light of the Teachings of <i>Evangelii Gaudium</i>		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>Evangelization is at the heart of the Catholic Church's mission. The Church continues its work of evangelization from the day it was born. The contemporary world is losing interest in matters of religion. Therefore, pastoral workers need new insights to continue their work. Successive Popes have issued documents on evangelization to guide all the pastoral workers. However, with the passage of time, pastoral workers seek new approaches to do their work. Pope Francis issued Apostolic Exhortation <i>Evangelii Gaudium</i> to encourage pastoral workers and give them directions in their work of evangelization especially in contemporary times. In this paper, we shall examine the new insights, which the Pope is offering to the pastoral workers involved in the work of evangelization.</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	The Scope of Evangelization in the Light of the Teachings of <i>Evangelii Gaudium</i>	書 名	
雑誌名	Academia	論 文 名	
巻 号	12	出 版 社	
発行年月	2016	出 版 年 月	
ペ ー ジ	171-191	ペ ー ジ	
著 者 名	Reginald Alva	著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（年 月頃予定）	備 考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年 3月 3日

氏 名	佐々木 美裕	所 属	理工学部システム数理学科
研究課題	センサネットワークの送信スケジュール最適化問題のモデル化と解法		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>5月に金沢で開催された日本オペレーションズ・リサーチ学会「数理的発想とその実践」研究部会第6回研究集会にて、「集中制御型センサネットワークの最適化モデル—ネットワークトポロジと送信スケジュールの最適化」と題して講演を行い、集中制御型センサネットワークの寿命を長くするためのトポロジ構築問題と各センサのデータ送信スケジュールを求める数理的手法について紹介した。現在、関連論文について調査し、サーベイ論文を執筆中である。また、サーベイの結果をもとに、集中制御型センサネットワークの実用化のために最適化手法がどのように役に立つのか、過去の研究と今後の可能性について、3月に名古屋で開催される電子情報通信学会のシンポジウムで講演を行う予定である。</p> <p>送信スケジュール最適化問題については、すべてのセンサが送信を完了するまでの時間を最小化するミニマックス型モデルと、各センサが送信する時刻の総和を最小にするミニサム型モデルの2つを提案し、それぞれ0-1整数計画問題として定式化した。いずれも干渉が発生しない送信スケジュールを求めるものである。これらの問題に対する貪欲算法も提案し、貪欲算法によって得られた上界値を用いて最適化ソフトウェアで最適解を求める計算実験を行った。ミニマックスモデルは、厳密に最小の時間で送信完了するスケジュールを出力するものの計算時間が長く、特に干渉が発生しやすい密なネットワークにおいては、センサ数100程度の問題でも解けない場合があった。一方で、ミニサムモデルは厳密な最小時間スケジュールを求める保証はないもののミニマックスモデルと比較すると計算時間が短く、大規模な問題を解くのに適していることがわかった。さらに、限定的な結果ではあるものの、貪欲算法によって得られる解の精度もよく、解法の改善を行うことによってセンサ数千規模の大規模なセンサネットワークの送信スケジュールを求めることを期待できることがわかった。ここまでの成果を論文にまとめて日本機械学会誌に投稿し、7月に掲載(ウェブ公開)された。その内容については、9月に大阪で開催されたスケジューリング・シンポジウム2016にて発表を行った。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	TDMA scheduling problem avoiding interference in multi-hop wireless sensor networks	書名	
雑誌名	Journal of Advanced Mechanical Design, Systems, and Manufacturing	論文名	
巻号	Vol. 10, No. 3	出版社	
発行年月	2016年7月	出版年月	
ページ	8 ページ（ページ番号なし）	ページ	
著者名	Mihiro Sasaki, Takehiro Furuta, Takamori Ukai, Fumio Ishizaki	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年 4月 14日

氏名	白石高章	所属	理工学部 システム数理学科
研究課題	複雑モデルでの統計的多重比較法の研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>ベルヌーイ試行による多群比率モデルを考える。母比率に順序制約のないこのモデルにおけるすべての母比率の間の相違に関しての多重比較検定について白石(2011)は次を論じた。比率の間のすべての差の同時区間推定法が、Hochberg and Tamhane (1987) で述べられている。この手法と同様なシングルステップの Tukey-Kramer 型検定方式を構築することができる。しかしながら、この検定方式は保守度が未知パラメータに依存し制御することができない。多重比較検定法として、チューキー・クレーマー型とダネット型のシングルステップの逆正弦変換による多重比較検定法を優越する閉検定手順を提案し論述してきた。提案した閉検定手順は、チューキー・ウェルシュの方法や REGW 法も優越している。</p> <p>片側の順序制約がある場合での母比率の間のすべての相違に関しての多重比較検定について論じる。分散が同一で平均に片側の順序制約がある場合に、多群正規モデルでの平均相違に関するシングルステップの多重比較法が Hayter (1990)によって提案されている。白石(2014)は、彼らの手法と類似の比率の相違に関するシングルステップの多重比較法を、逆正弦変換により提案した。さらに、このシングルステップの多重比較法を超える閉検定手順を提案した。この場合、標本サイズが等しいという条件が必要であった。本研究では、すべての比率相違に対して、カイバー自乗統計量に基づいた閉検定手順を提案した。提案した手法は、白石(2014)の方法よりも少し検出力が高く、標本サイズが等しいという条件が必要ではなくデータ解析の汎用をこれまでの手法よりも広くしている。提案した手法は、順序制約を仮定しない白石(2011)の方法やシングルステップの方法よりも著しくよくなることがシミュレーションによって見る事ができた。</p> <p>片側の順序制約がある場合での対照群との比率相違の検定として、正規分布理論のウィリアムス(1971)の方法と類似の方法を提案できる。この場合も、標本サイズが等しいという条件が必要である。対照群との比率相違の検定として、我々はカイバー自乗統計量に基づいた閉検定手順を提案した。提案した手法は、ウィリアムス型の手法よりも検出力が高く、標本サイズが等しいという条件が必要ではなく、適用範囲が広い。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Closed Testing Procedures Based on X ² -Statistics in Multi-Sample Models with Bernoulli Responses under Simple Ordered Restrictions	書名	
雑誌名	Japanese Journal of Biometrics	論文名	
巻号	37巻2号	出版社	
発行年月	2017年1月	出版年月	
ページ	67-87	ページ	
著者名	T. Shiraishi and S. Matsuda	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2016年12月12日

氏名	杉原 桂太	所属	理工学部システム数理学科
研究課題	アクターネットワーク理論に倫理的視点を備えるための理論的研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 米国及び欧州, 日本において自動走行車への社会的関心が高まっていることを確かめた. 2. 自動走行車について, 正の側面だけではなく負の側面が指摘されていることを以下の文献によって確認した. <ul style="list-style-type: none"> ・ Waelbers, K. 2011: <i>Doing Good with Technologies Taking Responsibility for the Social Role of Emerging Technologies</i>, Springer. 3. 日本におけるコンセンサス会議の実施について, 次の文献によって確かめた. <ul style="list-style-type: none"> ・ 小林傳司 2004:『誰が科学技術について考えるのか コンセンサス会議という実験』名古屋大学出版会. 4. オランダにおける構築的テクノロジー・アセスメントの成立過程について, 次の文献によって確認した. <ul style="list-style-type: none"> ・ van Boxsel, J. 1994: "Constructive Technology Assessment: A New Approach for Technology Assessment Developed in the Netherlands and its Significance for Technology Policy," Aichholzer, G. and Schienstock, G. (eds.) <i>TECHNOLOGY POLICY</i>, DE GRUYTER STUDIES IN ORGANIZATION. 5. 構築的テクノロジー・アセスメントの特徴について以下の文献によって確かめた. <ul style="list-style-type: none"> ・ Schot, J. 2010: "Towards New Forms of Participatory Technology Development," <i>Technology Analysis & Strategic Management</i>, 13(1), 39-52. 6. 以上の研究に基づき, アクターネットワーク理論による構築的テクノロジー・アセスメントを自動走行車に適用するために必要な理論的基盤として, 同アセスメントにおける技術者の役割について技術者倫理に基づいた考察を行った. 7. 以上の成果を学術雑誌への論文として公表した. 			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	アクターネットワーク理論による構築的テクノロジー・アセスメントの自動走行車への適用に向けて	書名	
雑誌名	技術倫理研究（名古屋工業大学技術倫理研究会）	論文名	
巻号	13	出版社	
発行年月	2016年11月30日	出版年月	
ページ	37-57	ページ	
著者名	杉原桂太	著者名	
備考	○済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 14日

氏名	栞原 寛明	所属	情報センター
研究課題	情報流解析のためのプログラミング言語機構		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究では、以下の 2 項目について研究を進め、学会発表を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. プログラムの情報流解析に必要な機密度束の構造と各種データの機密度を、対象プログラム中に記述するための仕組み 2. 実行時例外に伴う情報流を解析するための型システム <p>項目1では、Java プログラムを対象として、機密度束の構造およびプログラム中で利用される各データの機密度を指定するためのアノテーションを定義した。アノテーションは、クラスやメソッドなど一部のプログラム構成要素に対して付加情報を記述するための機構である。機密度束は一種の集合であるので、列挙型を用いてプログラムの一部として記述し、機密度間の順序関係をアノテーションによって記述する。データの機密度もアノテーションにより記述するが、Java 言語の静的インポートを用いて簡潔に記述できるようにしている。</p> <p>また、機密度に関するアノテーションが記述されたプログラムを処理して情報流解析を行うツールを実装した。アノテーション処理の一部として、定義される機密度束に固有で定型的なアノテーション定義を自動生成することで、開発者の労力を削減している。ツールは OpenJDK の Java コンパイラを拡張する形で実装されており、アノテーションが記述されたプログラムから情報流解析のための型システムに従って制約集合を生成することで情報流解析を行う。</p> <p>項目2では、実行時例外に伴う情報流を静的に解析するための型システムを提案した。実行時例外はその発生がプログラム中に明示されない。そこで、実行時例外が発生する可能性のあるプログラム構成要素は与えられるものとし、その実行時例外に伴う情報流を解析する手法を提案した。実行時例外の発生に影響を与える可能性があるデータの機密度を静的にすべて求める点が提案手法の主要なポイントである。本研究では、1 種類の実行時例外のみを扱う手法を検討したが、任意の実行時例外を一般的に扱うための枠組みを検討することが今後の課題として残されている。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	情報流解析のための Java アノテーション	書名	
雑誌名	ソフトウェア工学の基礎 XXIII	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2016/12	出版年月	
ページ	73-82	ページ	
著者名	吉田真也、桑原寛明、國枝義敏	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目	実行時例外に伴う情報流の型検査に基づく解析手法	書名	
雑誌名	ソフトウェア工学の基礎 XXIII	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2016/12	出版年月	
ページ	229-234	ページ	
著者名	桑原寛明、國枝義敏	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目	Hybrid MPI/OpenMP による網羅率 100%のレインボーテーブル生成の高速化	書名	
雑誌名	コンピュータセキュリティシンポジウム 2016 (CSS2016) 論文集	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2016/10	出版年月	
ページ	255-262	ページ	
著者名	安藤公希、桑原寛明、上原哲太郎、國枝義敏	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 1日

氏名	沢田篤史	所属	理工学部ソフトウェア工学科
研究課題	アーキテクチャ指向ソフトウェア開発支援環境の研究（組込みシステムを事例として）		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を800～1,000字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究では、ロボットや家電、スマートデバイスなど、組込みシステムを対象とするアプリケーションソフトウェア開発のための、統合的な支援を提供する工学的基盤を確立することを目的とし、ソフトウェアアーキテクチャに基づく開発支援環境の基本構成や形式的基盤について検討を行った。物理デバイスや周辺環境の構成を反映して設計されるソフトウェアアーキテクチャと、その開発プロセスを統合した、プロセス統合型アーキテクチャモデルの定義を目標に、ソフトウェアアーキテクチャとソフトウェアの開発プロセスとの間の相互依存関係を分析した。</p> <p>一般に、組込みシステムを構成するセンサやアクチュエータなどの物理デバイスはそれぞれ並列に動作する。それらを扱うソフトウェアのアーキテクチャも、物理デバイスを制御するソフトウェアコンポーネントを基本要素として定義されることになる。ソフトウェアコンポーネント相互のやり取りは何らかのメッセージを通信することによって行われ、アーキテクチャにはそれがソフトウェアコンポーネント間の関連として定義される。一方で、コンポーネントやそれらの組み合わせによって組込みシステムを開発するという側面からは、コンポーネントやコンポーネント相互の通信に関する仕様を何らかの形式で記述し、仕様に基づいて設計・実装し、仕様を満たすことを検証する、という作業（プロセス）が存在することになる。</p> <p>本研究では、ソフトウェアアーキテクチャが与えられたときに必要となる、仕様定義のプロセスに着目した。コンポーネントの通信からなる振る舞いの仕様記述において、組込みシステムを構成する物理デバイスからの並列事象が同時に生起する状況を簡便に定義する記述法を提案した。これらの記述法による仕様記述は、後続の設計・実装、検証のプロセスを構築するための基礎と位置づけることができる。</p> <p>この成果は、2016年12月に行われた、ソフトウェア工学の基礎ワークショップ(FOSE2016)、および2017年3月に行われた情報処理学会組込みシステム研究会にて発表し、それぞれの予稿集に掲載されている。さらに、2017年5月に発行されるコンピュータソフトウェア誌に掲載予定である（採録決定）。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	並列事象の同時生起を考慮した振る舞い仕様記述法に関する考察	書名	
雑誌名	ソフトウェア工学の基礎 XXIII (日本ソフトウェア科学会 FOSE2016)	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2016/12	出版年月	
ページ	pp. 255-56	ページ	
著者名	張漢明, 野呂昌満, 沢田篤史	著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
②		②	
論文題目	MVC アーキテクチャのメタレベル適用による形式仕様モデルに関する考察	書名	
雑誌名	情報処理学会研究報告 (組込みシステム)	論文名	
巻号	Vol. 2017-EMB-44, No. 14	出版社	
発行年月	2017/03	出版年月	
ページ	pp. 1-6	ページ	
著者名	張漢明, 野呂昌満, 沢田篤史	著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目	複数事象の発生を含意した区間振る舞い記述法とその検証法の提案	書名	
雑誌名	コンピュータソフトウェア	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2017/05 (採録決定)	出版年月	
ページ		ページ	
著者名	張漢明, 野呂昌満, 沢田篤史	著者名	
備考	済・未 (2017年5月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 7日

氏名	張 漢明	所属	
研究課題	区間の概念を用いた分散システム検証支援に関する研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>高い信頼性が求められる分散システムでは、際どいタイミングで複数の事象が発生したときの事象の取りこぼしが、重大なシステム障害の原因となる。このような障害は、通常は発生しないエラーが複数同時に生じたときなどに見受けられる。このような障害は、同じエラーが生じたときに必ず発生するとは限らない。開発時に予期しなかったある特定の稀なタイミングで、特定の事象の組み合わせが発生することが原因で障害が発生する。このようなタイミングに依存した再現性の低い現象を検出することは困難な作業である。本研究の目的は、複数事象の発生を含意した振る舞い記述法を提示することにより、設計段階における振る舞い検証を支援することである。</p> <p>本研究における基本的な着想は、複数事象の発生を区間に局所化して並列事象の同時に発生する箇所を限定することにより、並列事象の同時発生を抽象化することである。CSP では事象が同時に発生するという概念はない。大域的な時間がない環境で、異なったプロセスで同時に事象が発生することを表現する必要がある。同時事象の発生を表現するために、事象が発生する開始と終了の区切りの事象を導入する。区間内に複数の事象が発生したことを「同時事象の発生」とする。CSP では振る舞いを関数として表現することができる。同時事象の発生をライブラリ関数として抽象化した表記法を「区間振る舞い記述法」とよぶ。</p> <p>区間振る舞い記述法を用いることにより、同時事象の発生を含んだ振る舞いを逐次プロセスとして簡潔に記述することを可能にする。区間内の同時事象の発生を含めた事象発生の場合分けは、事象の数の組み合わせとなる。区間振る舞い記述法では、単独で発生する事象も定義することができるので、単独の事象発生と複数の事象発生を 2 つに分けて記述することができる。開発の初期の段階における単独の事象発生を基にした仕様の検証と、設計の詳細化の過程で複数の事象発生を基にした仕様の検証を分離して、段階的に検証することができる。</p> <p>区間振る舞い記述法は、複数の事象が同時に発生することを考慮した振る舞い設計を検証するために必要な、振る舞い仕様記述のパターンを提供する。区間振る舞い記述に基づいた振る舞い仕様を検証することにより、並行システムに特有な事象通知順序の逆転や際どいタイミングによる予期しない事象の漏れなどによる欠陥がないことを保証することができる。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	複数事象の発生を含意した区間振る舞い記述法とその検証法の提案	書名	
雑誌名	コンピュータソフトウェア	論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名	張漢明, 野呂昌満, 沢田篤史	著者名	
備考	済・未 (2017年5月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
②		②	
論文題目	MVC アーキテクチャのメタレベル適用による形式仕様モデルに関する考察	書名	
雑誌名	情報処理学会研究報告（組込みシステム）	論文名	
巻号	2017-EMB-44/44	出版社	
発行年月	2017年3月	出版年月	
ページ	pp. 1-6	ページ	
著者名	張漢明, 野呂昌満, 沢田篤史	著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目	並列事象の同時生起を考慮した振る舞い仕様記述法に関する考察	書名	
雑誌名	ソフトウェア工学の基礎 XXIII	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2016年12月	出版年月	
ページ	pp. 255-256	ページ	
著者名	張漢明, 野呂昌満, 沢田篤史	著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年 4月 6日

氏名	野呂 昌満	所属	理工学部 ソフトウェア工学科
研究課題	非機能特性を考慮したスマートデバイスアプリケーションメタ開発環境の設計		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>近年、急速に普及してきたスマートデバイス上でのネイティブアプリケーションと web アプリケーション(以下、スマートデバイスアプリケーション)の非機能特性(とくにコンテキストウェアネス)を重視した作成支援を目指して、統一的なソフトウェアアーキテクチャ(以下、統一アーキテクチャ)を提案した。統一アーキテクチャに基づき、特定の開発環境に依存しないクロスプラットフォームメタ開発環境を設計・試作した。</p> <p>本研究の特色はソフトウェアアーキテクチャと MDA の概念を融合し、非機能特性とくにコンテキストウェアネスを意識したスマートデバイスソフトウェアの、特定プラットフォームに依存しない開発支援を目指した。本研究の独創性は、この成果をスマートデバイスアプリケーション開発に適用することで、既存のクロスプラットフォーム開発環境にはない、非機能特性を考慮したアプリケーションの開発を支援可能としたことにある。スマートデバイスアプリケーションのドメインにおいて、ホットスポットを充足するコンポーネントの標準化が可能になれば、アプリケーションの完全自動生成が可能となる。本研究はこの基礎を提供したものと位置付けられる。</p> <p>IoT に基づく組み込みソフトウェアを事例として、コンテキストと非機能特性を統一的に扱うスマートデバイスアプリケーションを題材に提案アーキテクチャの適用事例研究を行った。実用的なソフトウェアの記述が可能であり実現コードが整理できることを確認した。さらに、コンテキスト協調に基づく移動体のソフトウェアの再構成に提案アーキテクチャが応用可能であることも確認した。</p> <p>メタ生成系に関連しては、プログラミング言語ならびに実行時環境をプラットフォームとした多段階 MDA を定義した。このアーキテクチャに基づくメタ生成系を設計試作し、本研究の着想が実現可能であることを確認した。</p> <p>ソフトウェアの形式記述に関連しても、アーキテクチャに基づく形式新手法を念頭に研究した。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	組込みシステムへのコンテキスト指向プログラミング技術の適用	書名	
雑誌名	情報処理学会研究報告（ソフトウェア工学）	論文名	
巻号	Vol. 2016-SE-193, No. 11	出版社	
発行年月	2016/07	出版年月	
ページ	1-8	ページ	
著者名	江坂 篤侍, 野呂 昌満, 沢田 篤史, 他	著者名	
備考	済	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目	MVC アーキテクチャのメタレベル適用による形式仕様モデルに関する考察	書名	
雑誌名	情報処理学会研究報告（組込みシステム）	論文名	
巻号	Vol. 2017-EMB-44, No. 14	出版社	
発行年月	2017/03	出版年月	
ページ	1-6	ページ	
著者名	張 漢明, 野呂 昌満, 沢田 篤史	著者名	
備考	済	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年 3月 3日

氏名	蜂巢吉成	所属	理工学部
研究課題	プログラミング教育のための WebIDE の実用化に関する研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>Web ベースの統合開発環境(Web-based Integrated Development Environment, WebIDE)を用いたプログラミングの教育の実用化に向けて研究を行った。今年度の成果を示す。</p> <p>(1) WebIDE によるプログラミングの進捗状況把握 プログラミング演習における従来の進捗状況把握方法は、学習者のコンパイル状況やソースコードの編集過程などを利用していた。本研究では、演習課題では実行例が提示され、学習者は動作確認のためにその実行例を試すというプロセスに着目した進捗状況把握方法について考察した。境界値や同値クラスに基づいた実行例が多いことから、学習者が試した実行例を調べることで進捗状況がある程度把握できることがわかった。</p> <p>(2) WebIDE によるテスト支援 (雑誌②) これまでの研究で、学習者がテストケースを自分で適切に設計できるようになることを目指し、学習者の作成したテストケースを評価してアドバイスを行うシステムを提案している。今年度は、実際に WebIDE を利用し、10 人程度の規模でテストケース作成演習を行い、その評価を行った。提案システムによるテストケース作成の効果はある程度認められるが、十分なテストケースを作成するまでの回数の多い学生には必要な値などを明示したより直接的なアドバイスをフィードバックしたり、教員が直接指導したりといった方法が必要になることがわかった。</p> <p>そのほか、プログラミング教育の支援について、次の研究を行った。</p> <p>(3) プログラミング学習用プルーフリーダ (雑誌①) プログラミング学習において、学習者が作成したプログラムが教育者の意図に合致しているかをチェックするプルーフリーダを試作した。</p> <p>(4) プログラムの誤り修正課題および正誤判定プログラムの自動生成 (雑誌③) プログラムの誤り修正課題とその正誤判定を行うプログラムを自動生成するツールを提案した。誤り修正課題は意図的に誤りを混入させたプログラムを学習者に提示し、その誤りを正しく修正させる課題であり、デバッグやコードリーディングの能力向上に有効である。実際の演習を行い、誤り修正課題演習の評価を行った。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	学習項目を利用したプログラミング学習用プルーフリーダの試作	書名	
雑誌名	日本ソフトウェア科学会 第33回大会	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2016年9月	出版年月	
ページ	6ページ	ページ	
著者名	蜂巢 吉成, 吉田 敦, 阿草 清滋	著者名	
備考	済	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目	データ構造と関数定義に着目したプログラミング学習者用テストケース評価記述方法の提案	書名	
雑誌名	ソフトウェア工学の基礎 XXIII (FOSE 2016)	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2016年12月	出版年月	
ページ	33-42	ページ	
著者名	小林 悟, 蜂巢 吉成, 吉田 敦, 阿草 清滋	著者名	
備考	済	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目	プログラムの誤り修正課題および正誤判定プログラムの自動生成	書名	
雑誌名	情報処理学会論文誌：教育とコンピュータ	論文名	
巻号	Vol. 3 No. 1	出版社	
発行年月	2017年2月	出版年月	
ページ	64-78	ページ	
著者名	蜂巢 吉成, 吉田 敦, 阿草 清滋	著者名	
備考	済	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
パッへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 3月 15日

氏名	横森 励士	所属	理工学部ソフトウェア工学科
研究課題	コードクローンの関係を用いたコンポーネントランク法の拡張手法の改良について		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究では、コードクローンの関係をコンポーネントランクモデル上で考慮することで、コンポーネントランク法を拡張するための手法を提案した。具体手的な研究成果としては、昨年度までの成果として国際ワークショップにおいて発表した論文に対して、コンポーネントランク法の拡張手法の精度をさらに向上させるための改良手法について検討を行った。精度の向上のためには、関係があまりない部品同士を結合しないようにするための方法が必要となり、どのような制限方法が考えられるかを考察した。その結果として、パッケージ階層における位置関係や、コードクローン検出時の粒度を考慮する改良手法を提案した。それぞれの改良手法について、関係があまりない部品同士を結合しないようにするための方法を提案し、評価実験を行った。改良手法についての成果を付加した論文を電子情報通信学会に 2017 年 3 月に投稿する。投稿においては、英語の記述についての改善を提案されたこともあり、投稿予定の論文では、論文の英文校正を受けた。結果として、冠詞の利用方法など、あいまいであった部分がよりわかりやすいものとなり、英語論文として質的な向上がみられた。</p> <p>論文で提案した手法は、ソフトウェアの中でコードクローンを保持する部品から共通して利用されている部品を抽出するという手法である。ソフトウェア部品間の類似性を利用してソフトウェアの理解に役立てようという試みであると考えられ、いろいろなアプローチが考えられる。</p> <p>本年度の研究成果として、そのようなアプローチに基づくソフトウェア理解支援手法の一つとして、ソフトウェア部品間の類似性を利用してソフトウェアの理解に役立てるための研究を行った。具体的には、各部品に対してコードクローン関係や利用関係を分析し、マトリクスを計測する。得られた値自体の類似性や、実際の利用先や利用元部品がどれだけ一致しているかに基づいてソフトウェア部品の分類を行い、分類結果を部品群として抽出し、それらの部品群の性質を調査した。</p> <p>それぞれの分類手法により、いろいろな部品集合が得られ、それらの多くは部品間に存在する何らかの共通性を表現したものであった。現状はそれぞれの手法の特徴を把握している段階で、初期の実験結果をまとめた成果を、研究報告として投稿し、発表を行った。今後、手法間の違いや、再現率などを評価した結果を追加したうえで、国際会議などに投稿することを考えている。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	部品間関係を利用したソフトウェア部品の分類手法の提案	書名	
雑誌名	情報処理学会研究報告	論文名	
巻号	Vol. 2016-SE-194, No.8	出版社	
発行年月	2016-11-10	出版年月	
ページ	1-8 (8 ページ)	ページ	
著者名	横森 励士	著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未 (年 月頃予定)	備考	済・未 (年 月頃予定)

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年3月27日

氏名	横山哲郎	所属	理工学部
研究課題	可逆変換を用いた高水準プログラミング言語のプログラム変換		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>すでに良くテストされ稼働実績があるアプリケーションの算法・解法・論理を再開発することは困難でリスクを伴うためにコストがかかる。したがって、類似する新規のアプリケーションの開発において既存のアプリケーションの算法・解法・論理の一部を統合することでコスト削減をすることが妥当であることは少なからずある。しかし、正しさが厳密に保証された高水準言語間のプログラム変換を行うことはコードの可読性を損ない変換後のコードの可読性や再利用性を下げる問題がある。当初の予定では、われわれは変換前後の基本データ型および単純な派生型(クラス・モジュール等の型に準ずるものを含む)の間に自然な対応関係をつけ、振る舞いの保証は限られた範囲でのみすることを考えた。すなわち、プログラム変換の全域性を犠牲にする代わりに可読性と再読性を上げるアプローチを取るのである。命令型やオブジェクト指向型の性質を備えたいわゆる軽量プログラミング言語を用いて開発される数十~数百行からなるコードレッドのみを対象としたかった。</p> <p>これに対して、正しさの保証されないコードの変換については、計算機科学系の会議において肯定的な評価がほとんどされなかった。しかし、今後も当初計画していた研究は継続して、より実践的なコミュニティでの発表をおこないたい。</p> <p>そこで、今年度はまず小さな可逆言語 R-CORE と R-WHILE の間での正しい可逆変換を示し、IEICE の雑誌において発表した。正しさは数学的には証明していないものの再帰降下関数によって記述されているので丁寧な議論によりその正しさは確からしい。副次的な成果としてこの可逆変換の存在によって R-CORE は可逆チューリング完全であることが示された。したがって、意味論が非常に簡単で、逆変換がわずかに 4 行で記述可能(可逆チューリング機会の逆変換器と同様、筆者の知る範囲で最も簡潔)であるにも係わらず計算能力が高いことが分かった。今後の可逆計算の計算複雑性理論や計算可能性理論を発展させる上でこの言語が活用されることが期待される。</p> <p>可逆言語間の変換の研究を進めていく上で、通常の方法を衛生的に可逆模倣する事例研究が不足していることは問題であった。研究室の学生でも実施できるほどの大きさに切り分けることが可能なテーマであるので、卒業研究のテーマの候補にしたい。一方で、元々本研究で計画していたような通常の方法の変換は字句解析器、構文解析器、意味論があまりにも複雑なので卒論のテーマに向かないようにも感じられた。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	A Minimalist's Reversible While Language	書名	
雑誌名	IEICE Transactions on Information and Systems	論文名	
巻号	E100-D-5	出版社	
発行年月	2017年5月	出版年月	
ページ	pp. 1-9	ページ	
著者名	Tetsuo Yokoyama, Robert Glück	著者名	
備考	済・○未（2017年5月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 8日

氏 名	大石 泰章	所 属	理工学部機械電子制御工学科
研 究 課 題	非線形サンプル値制御における対象システムの拡張とサンプル時刻間性能の保障		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>現実の制御系の多くは、制御対象は連続時間で動作し、制御器は離散時間で動作するというサンプル値制御系である。制御対象が線形システムの場合は厳密な離散化が線形システムの形で得られるので、これに基づいてサンプル値制御系の設計をすることができ、サンプル時刻間の性能保証も可能であった。制御対象が非線形システムの場合は長く有効な方法がなかったが、申請者は前年度までの研究で、非線形システムの離散化を誤差評価つきで行い、これにロバスト制御を適用する方法を開発した。しかし、対象となる非線形システムは多項式で表現されるものに限られ、サンプル時刻間の性能保証が可能かどうか不明らかであった。</p> <p>本研究ではこの問題の解決をめざし、以下の2つの課題に取り組んだ：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 非多項式的なシステムの離散化と誤差評価； 2. サンプル時刻間の性能を保障する制御系設計。 <p>「1. 非多項式的なシステムの離散化と誤差評価」では、前年度に得た離散化と誤差評価の方法を非多項式的なシステムにも適用できるよう拡張した。システムの離散化に使っているのは Picard 反復法であり、この方法は非多項式的システムにもそのまま適用できる。問題は誤差評価のために Picard 反復の収束速度を評価できるかどうかであったが、対象システムの Lipschitz 定数を使い、帰納的に評価することで、非多項式的システムに対しても収束速度の評価ができ、誤差評価もできることがわかった。数値実験の結果、得られる誤差評価は妥当であり、実用に耐えることがわかった。</p> <p>「2. サンプル時刻間の性能を保障する制御系設計」では、前年度のサンプル値制御系の設計法を拡張してサンプル時刻間の性能保証もできるようにした。Picard 反復法を使えば、非線形システムのサンプル時刻間の挙動を直前のサンプル時刻における状態とそこからの経過時間の多項式で近似的に表すことができ、近似誤差も評価できる。これを性能を評価する関数に代入し、誤差に関する項は上界で評価するとともにサンプル時刻間で積分すれば、サンプル時刻のみの性能を考えるとときと同じ形の評価関数に帰着できる。以上により原理的にはサンプル時刻間の性能保証ができることがわかったが、上界を使う評価である上に方法が複雑なので、その実用的価値は明らかでない。この点はさらなる検討が必要である。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	非線形制御における数値計算技術の利用	書名	
雑誌名	第4回計測自動制御学会制御部門マルチシンポジウム予稿集	論文名	
巻号		出版社	
発行年月	2017年3月	出版年月	
ページ	5ページ（電子出版）	ページ	
著者名	大石泰章，坂本登	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年 2月 28日

氏 名	奥村 康行	所 属	理工学部
研究 課 題	光アクセスにおけるコンスタレーション共有の伝送容量拡大技術に関する研究		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p><研究経過></p> <p>現在商用化されている光アクセスシステムを一層高速化する新たな光アクセス方式を導入することを狙い、偏波多重と呼ばれる多重化技術の適用法について研究した。偏波多重とは、光ファイバの中に一つの直線偏波とそれに直交する偏波を入力し、受信側でそれら二つの偏波を分離できれば、原理的に二倍の伝送容量が達成できることを利用するものである。この技術課題として、光ファイバ中の信号伝搬における直線偏波の回転がある。これを解決するため、独立成分分析というブラインド処理による二つの偏波の分離を提案し、その効果をシミュレーションにより明らかにした。ブラインド処理の特徴として、分離のための特別な信号を用いる必要がなく、情報を受信しながら偏波分離を行えるので、偏波回転が時刻とともに変化する環境でも適用できる。</p> <p><研究結果></p> <p>光通信におけるアナログ回路は OptSim というシミュレータを用い、独立成分分析については Matlab というシミュレータを用いて、両者を連携させて全体のシミュレータを構築した。受信シンボル数が 3000 のとき、偏波回転のない場合と、偏波回転を 20 度から 80 度として独立成分分析を適用したときのシンボル誤り率(SER)を測定した(下図)。この結果より、偏波回転が 80 度までであっても、提案方式により偏波回転がない場合とほぼ同じ特性が得られることが明らかになった。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Comparing Shell Mapping to Trellis Shaping as Symbol Mapping for Co-existence of Next Generation PON and Current System	書名	
雑誌名	International Journal of Networks and Communications	論文名	
巻号	Vol. 6, No. 2	出版社	
発行年月	2016	出版年月	
ページ	pp. 24-31	ページ	
著者名	Y. Okumura, K. Fujii, and K. Oowaki	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目	独立成分分析を用いた OFDMA-PON における偏波回転補償	書名	
雑誌名	映像情報メディア学会技術報告 放送技術	論文名	
巻号	Vol.41, No.6	出版社	
発行年月	2017年2月	出版年月	
ページ	pp. 29-32	ページ	
著者名	福岡慶剛、奥村康行、藤井勝之	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目	自動二輪車の乗車時における 145MHz 帯ホイップアンテナの電磁界解析と実測	書名	
雑誌名	映像情報メディア学会技術報告 放送技術	論文名	
巻号	Vol.41, No.6	出版社	
発行年月	2017年2月	出版年月	
ページ	pp. 21-24	ページ	
著者名	加藤隆介、藤井勝之、奥村康行、浅沼雅行	著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年 4 月 4 日

氏名	坂本 登	所属	理工学部機械電子制御工学科
研究課題	多様な制約条件を満たす非線形最適制御の計算理論と実証		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究では、申請者が開発中である非線形最適制御設計のためのハミルトン・ヤコビ方程式の数値解法（以下、安定多様体法とよぶ）をより工学的に有用な応用が可能となることを目指し、制約条件を陽にかつ最適に取り込む枠組みの構築を目指した。</p> <p>産業分野における制御系設計は、システムのもつ物理的限界や安全性、耐久性確保のために課す許容限界仕様など、様々な制約条件を満足する必要がある。これら制約条件の下での最適制御理論は、理論・実用両面で不十分であり、制御性能の劣化や設計における試行錯誤と設計時間の長期化などをもたらしている。本研究では、申請者が開発した最適制御におけるハミルトン・ヤコビ方程式の数値解理論のさらなる発展と数値計算プログラムの開発を行い、産業界における生産性向上に貢献することを目的とした。</p> <p>本助成によって得られたより具体的な研究成果は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 制約条件が入力と状態の両方を含むような広い制約条件を扱うことができる一般的な枠組みを構築した。ここでは、Lagrange 未定乗数を導入し、されにこれを状態変数で表現する。対象システムが線形であっても、得られるハミルトン・ヤコビ方程式は非線形となり、このような方程式を扱えるのは、安定多様体法しか存在しない。 2. 上記の一般的制約問題を磁気浮上システムの加速度制約問題に適用した。移動物体の制御では、内容物の保護や振動の抑制などの重要な仕様を満させる目的から、物体の加速度に制限を加える要求が求められることが多い。ここでは、機械電子制御工学科所有の磁気浮上実験装置によって、その効果を検証した。通常の制御系に事後的に加速度制約を加えた制御系と比較して、極めて良好な結果を得ることができた。 3. 航空機制御の応用として、舵面の変動範囲の制約と速度制約を考慮した実験機の制御系設計を行った。これは、日本宇宙航空研究開発機構（JAXA）との共同研究である。 <p>今後の課題としては、より複雑な多入出力システムに対する加速度制約問題を扱うこと、安定多様体法の計算法の効率化によって、設計にかかる時間とコストを抑えることがあげられる。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Control augmentation system design for Quad-Tilt-Wing unmanned aerial vehicle via robust output regulation method	書名	
雑誌名	IEEE Transaction on Aerospace and Electric Systems	論文名	
巻号	掲載予定	出版社	
発行年月	2017	出版年月	
ページ		ページ	
著者名	A. T. Tran, N. Sakamoto, M. Sato, and k. Muraoka	著者名	
備考	済（2017年4月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
②		②	
論文題目	Optimal swing up and stabilization control for inverted pendulum via stable manifold method	書名	
雑誌名	IEEE Transaction on Control System Technology	論文名	
巻号	掲載予定	出版社	
発行年月	2017	出版年月	
ページ		ページ	
著者名	T. Horibe, N. Sakamoto	著者名	
備考	済（2017年4月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年月頃予定）	備考	済・未（年月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 4月 10日

氏名	高見 勲	所属	理工学部機械電子制御工学科
研究課題	非線形制御対象に対するより厳密な擬似線形化を用いた線形制御の適用と応用		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>制御対象、Control Moment Gyroscope (以下、CMG と略する。) に着目し、理論の基礎となる事例を作成する。CMG は宇宙空間など、宙に浮いた大型構造物の姿勢を制御するための装置である。申請者は既に研究室にCMG の小型モデルを研究室に有しており、その強い非線形性について研究調査を実施している。研究室にある小型モデルは、内部に回転体(ローター) を持つジンバル1、ジンバル1 を外側から保持するジンバル2、ジンバル2 をさらに外側から保持するジンバル3 から構成されており、各ジンバルの角度を任意の位置に制御することが、大型構造物の姿勢を制御することに相当する。この CMG は、ジンバル1, 2, 3 の角度$_1(t)$, $_2(t)$, $_3(t)$ に対して三角関数形式での非線形性を有しており、その可動範囲の全てにおいて線形制御で制御を行うことは困難な制御対象であることが知られている。また、ローターを回転させるための動力源、内側のジンバル1 を傾けるための動力源は存在するが、外側のジンバル2, 3 は動力源を持たず、ノンホロノミック系という難しさも有している。</p> <p>本研究では、非線形性の強い CMG の擬似線形表現を得る手法を構築する。Taylor 級数展開の高次近似などを基礎として、任意の領域において、任意の精度で、このシステムの近似モデルを擬似線形表現の形式で得る手法を構築することを考えた。得られるであろう結果を元に、制御対象の特徴に依存しないような、より一般的な近似手法を得ることを目的とする。先行研究では、三角関数を直接 Taylor 級数展開せずに、一度変数変換を用いて、別の表現にしてから Taylor 級数展開を適用することで、良好な制御結果を得た。Taylor 級数展開を適用するとき都合のよい正準系のようなものが存在するのか、またその正準系へと変換する手法はどのようなものかを検討した。また、後ほどディスクリプタ表現を用いた等価変換を行うため、近似システムは従来法でよく用いられる線形近似に固執する必要はない。そこで、Pade 近似などの、通常線形化では用いられない(x_n ではない基底を用いた) 級数展開近似の利用とその有効性について研究した。</p> <p>提案手法の有効性をシミュレーションだけでなく実験でも検証した。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Control Moment Gyroscope のスライディングモード制御	書 名	
雑誌名	システム制御情報学会研究発表講演論文集	論 文 名	
巻 号	2017	出 版 社	
発行年月	2017.5.25	出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名	神谷直樹、陳幹、高見勲	著 者 名	
備 考	済・○未（2017年5月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年2月15日

氏名	藤井 勝之	所属	理工学部機械電子制御工学科
研究課題	FDTD法を用いた有機電界効果トランジスタ型 THz 波センサの最適構造検討		

研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800~1,000 字以内で簡潔に記述すること)

THz 波イメージングは、セキュリティー用途での利用が期待されているが、民生用途に広く用いるために低コストかつ可搬性が高い大型イメージング装置に適したセンサが無いことが課題である。これを解決するために、奈良先端科学技術大学院大学の中村教授のグループと共同で、大面積のフレキシブル基板上に容易にマトリックス化可能な有機電界効果トランジスタ(OFET)を用いた THz 波イメージングセンサを開発している。この素子において、検出感度やその周波数特性を向上させるためには、有機半導体層における THz 波電界強度を知り、必要な帯域においてそれを最大化する必要がある。例えば、これまでに FDTD 法による電磁界シミュレーションによって、素子を形成する楕円電極による有機層電界強度の、偏波方向および周波数依存性が確認されている。本研究では、より広範囲な周波数帯に対して、素子構造を変化させつつ FDTD シミュレーションを行うことによって、センサとしての感度最適化に関する知見を得ることを目的とする。

研究の端緒として、特定の周波数帯で共振することが既知であるボウタイアンテナを有機トランジスタの電極として採用することにした(図1)。ボウタイアンテナは三角形の金属平板を突き合わせた形であり、これはマイクロストリップアンテナ(MSA)の一種とみなせる。そこで MSA の設計法を基に平面型ボウタイアンテナをシリコン基板上に配置した際の給電部における反射係数を計算した(図2)。しかしながら、FDTD 法による電磁界シミュレーションの収束が悪く、特定の周波数帯での共振が得られていないのが現状である。これは MSA の誘電体基板に比べて、有機電界効果トランジスタ型 THz 波センサの基板の厚みが非常に大きいこと、従来のアンテナ理論が適用できないことに起因すると考えている。今後も引き続き、FDTD 法による THz 波センサの解析を進めていく予定である。

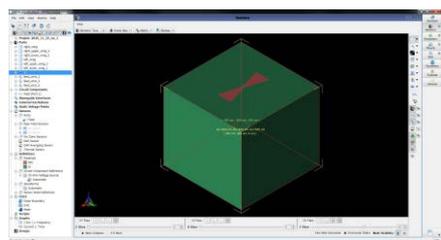


図1 FDTD法による解析モデル。

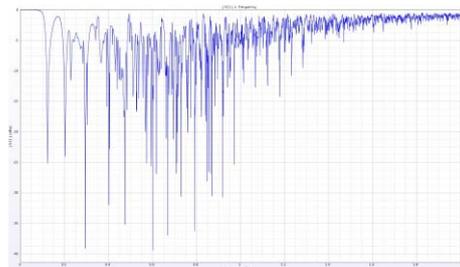


図2 反射係数。

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	Comparing Shell Mapping to Trellis Shaping as Symbol Mapping for Co-existence of next Generation PON and Current System	書名	
雑誌名	International Journal of Networks and Communications	論文名	
巻号	DOI: 10.5923/j.ijnc.20160602.02	出版社	
発行年月	2016 年	出版年月	
ページ	pp.24-31	ページ	
著者名	Y. Okumura, <u>K Fujii</u> , K. Oowaki	著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
②		②	
論文題目	自動二輪車の乗車時における 145MHz 帯ホイップアンテナの電磁界解析と実測	書名	
雑誌名	映像情報メディア学会放送技術研究会	論文名	
巻号	In press	出版社	
発行年月	In press	出版年月	
ページ	In press	ページ	
著者名	加藤隆介, <u>藤井勝之</u> , 奥村康行, 浅沼雅行	著者名	
備考	済・未（2017 年 2 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目	独立成分分析を用いた OFDMA-PON における偏波回転補償	書名	
雑誌名	映像情報メディア学会放送技術研究会	論文名	
巻号	In press	出版社	
発行年月	In press	出版年月	
ページ	In press	ページ	
著者名	福岡慶剛, 奥村康行, <u>藤井勝之</u>	著者名	
備考	済・未（2017 年 2 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度
 パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般)研究成果報告書

2017年 2月 22日

氏名	浅野享三	所属	短期大学部
研究課題	革新技术時代に外国語（英語）教育が果たす役割		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>技術革新が目覚ましいこれからの時代に、外国語（英語）教育は何ができるのかについて研究する目的で本研究奨励金を使用した。本年度は研究休暇中であることから、研究計画通りに着手できた。具体的な経過は次の通りである。4月、Applied Linguistics & Language Teaching 大会（於、国立臺灣技術科学大学）にて、Making Connections between Reading Literature and Instructing Communicative Skills と題して外国語（英語）教育は、技術としてのスキル指導と文学作品を通じた読解指導の双方が可能なことを、Readers Theatre の手法を通して研究発表した。以下、5月に香港大学にて、8月に第17回北欧リテラシー学会（於、フィンランド・トゥルク）、そして12月にシンガポール国立大学にて、同様の趣旨から発表した。同時に国内学会（リメディアル教育学会）で発表し、各種学会および研究会に参加した。また今年度は神戸市外国語大学の客員研究員の立場でも研究を深めることができた。</p> <p>研究成果として、本学教職センター紀要に「音読劇をテーマとした外国語科教員免許状更新講習に関する考察」を投稿した。本拙稿は研究奨励金を使用した研究成果の一部である。</p> <p>その他の成果を項目のみで記す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨今の外国語教育の名の下で実施されていることは、指導者の側からは外国語の教授であり、学習者の側からは外国語の学習であること、 ・外国語教育として可能なことは、未達成分野にあること、 ・革新技术の出現により外国語の教授と学習は、早晚コンピュータが担うこと、 ・少子化等に伴う労働力不足が深刻な近未来には、外国語教育のプロセスを経て「文化資本」としての人材と人間を育てることが可能なこと、などの現状認識を持つことができた。そして新たな研究課題も同時に見つけることができた。今後の教育に生かすことで学生に還元して参りたい。 			

研究成果公刊（計画を含む）

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	南山大学教職センター紀要
雑誌名		論文名	音読劇をテーマとした外国語科 教員免許状更新講習に関する考 察
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	浅野享三
備考	済・未（年予定）	備考	済・未（2017年 4月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（年 月頃予定）	備考	済・未（年 月頃予定）

2016年度

パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 1月 18日

氏名	五島敦子	所属	短期大学部
研究課題	アメリカにおける継続教育概念の検討		
<p>研究実績の概要 (研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること)</p> <p>本研究の目的は、アメリカにおける継続教育概念を検討することである。具体的には、「継続教育(Continuing Education)」という概念が登場した経緯を歴史的に明らかにするとともに、今日的動向を調査することにある。本年度の成果は、以下の3点である。</p> <p>第一の成果は、「日本教育学会第75回大会」(8月)において「1920-30年代アメリカの現職教員と大学拡張部」と題する研究発表を行ったことである。大学拡張部は、現職教員に働きながら学ぶ機会を提供することで、教員の量的拡大に貢献した。同時に、大学拡張講座による単位取得基準を厳密化することによって教員の質的向上に寄与した。これにより、教員免許更新制が制度化していくなかで、教員の専門性を向上させるために「継続教育」が必要とされるようになった道筋を明らかにした。この成果と今後の研究について、History of Society Annual Meeting(11月)において、Hample 教授らに助言をえることができた。</p> <p>第二の成果は、「継続高等教育研究会」(8月・12月)において、オバマ政権以降に行われた継続高等教育に関する制度改革と政策動向について研究発表を行ったことである。アメリカでは1970年代から経験学習単位や学外学位制度などの成人の高等教育促進のための柔軟な学習形態が普及してきた。しかし、近年では、授業料高騰によって若年層の就学期間が長期化し、卒業率の低下が問題になっている。そこで、コンピテンシー・ベースド・プログラム、ハイブリッド学位プログラムなどが開発されており、従来、成人を主要なターゲットとしてきた継続教育部局が正規学位プログラムの担い手として期待されていることを明らかにした。本研究会は、名古屋大学高等教育推進研究センター夏目達也教授が主管する研究会である。研究の目的は、「各国の高等教育における社会人向け継続教育に関する国際比較」であるため、アメリカのほかに、フランス、イギリス、ロシア、韓国、カナダなどの継続高等教育の展開について発表が行われた。今後は、国際比較の観点からアメリカ的特色の精緻化を行う必要がある。</p> <p>第三は、全日本大学開放推進機構 (UEJ) の研究会(7月・10月)に参加するとともに、その研究成果となる研究書『大学はコミュニティの知の拠点となれるか—少子化・人口減少時代の生涯学習』を刊行したことである。申請者は、第3章「知識基盤社会に対応する大学開放」を執筆した。知識基盤社会における大学と社会の双方向的・互恵的関係を意味する「エンゲージメント」という概念が登場した背景を踏まえ、この概念が、大学評価の指標となっている世界的潮流を示し、エンゲージド・ユニバーシティという戦略ビジョンを提示して大学改革を推進している事例を紹介した。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目		書名	大学はコミュニティの知の拠点となれるか
雑誌名		論文名	第3章「知識基盤社会に対応した大学開放」
巻号		出版社	ミネルヴァ書房
発行年月		出版年月	2016年9月
ページ		ページ	31-44頁
著者名		著者名	上杉孝實・香川正弘・河村能夫編
備考	済・未（ 年月頃予定）	備考	済・未（ 年月頃予定）
②		②	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年月頃予定）	備考	済・未（ 年月頃予定）
③		③	
論文題目		書名	
雑誌名		論文名	
巻号		出版社	
発行年月		出版年月	
ページ		ページ	
著者名		著者名	
備考	済・未（ 年月頃予定）	備考	済・未（ 年月頃予定）

2016年度
パツへ研究奨励金 I-A-2 (特定研究助成・一般) 研究成果報告書

2017年 3月 31日

氏名	森泉 哲	所属	短期大学部
研究課題	市民活動はいかに促進されるのか？一個人，家族，社会意識からの検討—		
<p>研究実績の概要（研究経過、研究結果を 800～1,000 字以内で簡潔に記述すること）</p> <p>本研究では、社会参加がいかに促進されるのかについて、その規定因となる諸要因である自己ならびに家族要因及びその効果であるウェルビーイングの関連について実証的に調査し、明らかにするものであった。</p> <p>調査にあたって、文献研究を実施し、社会関係資本に関する理論ならびに家族コミュニケーションパターン理論を援用し、社会参加の規定因の影響度を質問紙調査によって検討することにした。</p> <p>日本人大学生 314 名（男性 174 名，女性 140 名）に対して、a) 社会参加の頻度（ボランティア活動，コミュニティ活動への参加，慈善団体への参加等に関して），b) 一般的信頼，c) 自己効力感，d) 家族コミュニケーションパターン，e) 生活満足感，f) 社会的充実感（Flourishing）について測定した。</p> <p>その結果、社会参加に対する規定因の影響度については以下のとおりの結果が得られた。一般的信頼は社会参加に対して有意な影響を及ぼしていなかったが，自己効力感は社会参加に有意に正の影響を及ぼしていた（$\beta = .20, p < .01$）。家族コミュニケーションパターンのうち，両親との自由な議論は社会参加を促進していたが（$\beta = .13, p < .05$），両親との自由な会話は，社会参加に負の影響が見られた（$\beta = -.13, p < .05$）。これらのことから，自己効力感を高めること，また日ごろから両親と様々な話題について両親と話し合う行動が社会参加につながることを示唆された。一方でただ単に家族と自由に会話することが必ずしも社会参加を促すことにはならず，むしろ逆効果であるということは家族コミュニケーションの質が重要であるという示唆であるように解釈できる。</p> <p>社会参加と心理的健康の指標である人生の満足感ならびに社会的充実感については，両概念ともに単純相関は有意であったが，本結果では社会的充実感に対して正の影響がみられた。この解釈をめぐっては，生活満足感は個人の生活全般に関する幸福感を表しているが，社会的充実感とは社会参加を通して社会への貢献している，役立っているという正の感情を測定しているものであり，社会的充実感と正の関連が見られるのは予測を支持できるものである。</p> <p>このような研究を通じて，個人が社会の一員としてシティズンシップを発揮することは結局は自己の人生を豊かなものにすることが可能となるという自己と社会の相互作用についてさらに検討していきたい。</p>			

研究成果公刊（計画を含む）

「2016 年度南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2」の文言が入った研究成果刊行物を記入してください。公刊されたものについては、教育・研究支援事務室に提出されたかどうかを備考欄に記入してください。

「雑誌」の部		「図書」の部	
①		①	
論文題目	社会参加はいかに促進されるのか？ ー自己効力感，家族コミュニケーション，ウェルビーイングとの関連ー	書 名	
雑誌名	日本グループダイナミックス学会 第 63 回大会発表論文集	論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月	2016 年 9 月	出 版 年 月	
ペ ー ジ	163-164	ペ ー ジ	
著 者 名	森泉 哲	著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
②		②	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）
③		③	
論文題目		書 名	
雑誌名		論 文 名	
巻 号		出 版 社	
発行年月		出 版 年 月	
ペ ー ジ		ペ ー ジ	
著 者 名		著 者 名	
備 考	済・未（ 年 月頃予定）	備 考	済・未（ 年 月頃予定）